

# 研究紀要 第10号 昭和55年

## 目 次

### 特集 家庭と学校・その教育に関する基本問題

挨拶にかえて…………… 鯉坂 二夫… 2

問 脳…………… 平澤 興… 4

### 教えと学びの基本問題

時務の感想…………… 保田興重郎…16

数学教育の問題点…………… 赤 攝也…22

家庭教育の問題点…………… 辰野 千寿…28

育児としつけに関する意識調査…………… 岩野 武志…31

文書による教育相談の内容と統計…………… 土屋昭枝・朝倉典子…46

特別寄稿 視聴覚メディア断章…………… 神山 順…38

追悼 浮世の慈悲と見返り如来…………… 北島 織衛…44

### 全家研・教育対話・その指導と実践(5)

私の対話活動…………… 鈴木庄五郎…55

教育対話活動管見…………… 吉田 市藏…56

対話活動 - 実践の一事例…………… 伏木 栄子…58

教育対話雑感…………… 足立 富男…59

教育対話主事としての自覚…………… 長原 篤…61

誠…………… 藤波 駿…63

ある教育相談から…………… 花木 賢二…64

対話活動の間接的な方法…………… 金澤文四郎…66

私の教育論…………… 近藤 嘉男…67

信頼と心のふれあいのなかに…………… 服部 道子…70

### 展げゆく地域社会との交流(6)

ありのままに語る…………… 平野 恵子…71

出会いを大切に…………… 田幡 綾子…73

このごろ思うこと…………… 佐藤 容子…74

ポピーと私…………… 竹野 文代…76

家庭学習の輪を…………… 鈴木 和子…77

教育モニター3か月の歩み…………… 光恒 紀子…79

百を求めてゼロにしないで…………… 沼田 幸子…80

モニターひとすじ…………… 江島 絹子…81

くずれやすい習慣…………… 田淵 澄子…83

関係資料…………… 85~100

財団設立趣意書・寄附行為・事業報告・事業計画・

全家研設立趣意書・規約・教育対話主事名簿・役員的人事異動



## 挨拶にかえて

理事長 鯨坂 二夫

教育とは子どもたちに生きる力を与え、子どもたちを幸せにすることであると思う。

子どもの幸せとは何か。私は率直に言いたい。その幸せとは、彼らが父母にもらった遺伝の力——どの子も、それぞれに違った、その子だけの力を恵まれて生まれている——が、できるだけ伸びて、その結果はもう運命であろう、それを十分満足して抱きしめるかどうか、そこに幸せがあるのではあるまいかと。私は三人の子どもたちが、中学に入った時に、はっきりと論じた。勉強は生命がけでやるものだ。しかしそれは決して他人に勝つためではない、自分に負けないためだ。友達とはつねに暖かい友情の手を握れと。この卑近な例話のなかに、私は子どもたちの将来の幸せを左右する何かしら不思議な力を感じ取りたいと思う。

子どもの生きる力とは何か。まず身体の強さであろう。そうして感情の豊かさ、その愛しさであろう。肉体と感情とは、人間という

車を走らすガソリンである。なぜ子どもたちが体育に精を出し、歌を歌い、絵を描くか。それはこの生きる力の根底をしっかりと培うためである。いわゆる基礎の力であり、基本の力であるものをよき時に身につけるためである。やがて彼らには明るい知性というハンドルと、確実な意志というブレーキが必要となるであろう。そうして、この四つのものが調和的に花を咲かせることが全人教育の志すところと言ってよい。生きるための基礎を築き、基本となる力を培うことを私はこのように理解したい。

その力は、まず父母によって与えられ、教育はこれをすくすくと伸ばさなければならない。その伸ばす力は、環境——家庭、学校、社会、自然などすべてを含めて——の力だと言えよう。この伸びゆく生きる力と、伸ばす環境の力とが、しっかりとかみあって、人間という芸術品が出来上がる。これが教育の基本原理であろう。そうして、その伸ばす力の

最も根源的なものは、当然、家庭の力である。家庭こそは国の教育、民族の教育、社会の教育、学校の教育、その他、凡そ教育と名づけられるあらゆる教育の中心である「子どもたち」にとって、最初の、そして最後の砦であると言わなければならない。

どのような父母の間に生まれ、どのような家庭の力のなかで育まれたか。父母の間柄はどうであるか、兄弟姉妹の数、その生活の様式など、この伸ばす力のもつ影響力は、はかり知れぬものがある。私の知っているハンガリー人は言った「ソ連の侵入後、はじめて母国に帰った。六人の兄弟のうち三人は故人となっていたが、残った三人は一晩中、今はなき母のことを語りあかした」と。亡き母の話を一晩中語った兄弟、その家庭の今昔、それが目の前に見えるようであった。また、あるイギリスの友人、この人は旅行というとき、きまって船の旅をする人である。その理由を聞くとつぎのような答であった。「私はイギリスに生まれ、私の母はよく海の話をしてくれた。大英帝国の青年ともあろう若者は必ず海に行け。七つの海を征服した国の青年ともあろう者は。海に生きる若人こそはイギリスの青年たるに相応しいと。だから自分は、旅という海を思い出し、船の旅をするんだ」。

幼き日に、母親がその子にどのような歌を歌ってやり、どのような話をしてやるか、そこにその子どもの一生を左右する一つの大きな課題があるのではないか。

また私の信頼する友人の医者は言った。「患者を診断する場合、必ずその家庭の人間関係、父母のあり方、夫と妻の間柄……など、いろいろなことを総合的に考えて判断を下すことにしている」と。

父母は——教師もそうであるが——子どもにとって、真実の生きた模範である。「子どもは母の愛するものを愛し、母の信ずる神を信ずる」「父の家よ、汝こそは道徳と国家の学校である」と教えた古人があった。私も思う。家庭の茶の間、居間の力が、子どもたちの将来を約束するのではないかと。

私たちが、全家研の運動に身を投じたのも、この家庭の根底に培い、民族の健全な成長をという念願をこめてのことであった。今回尊敬申し上げる平澤興先生のあとをうけて、理事長の重責を荷うことになったが、まことに浅学非才、恐縮至極のほかはない。全力をあげ、全霊を傾けてこの運動の推進の捨石になりたいと念じている。

(甲南女子大学学長)



# 間 脳

諸知覚（皮膚知覚，視覚，聴覚，味覚？）の  
中間中枢と生命神経系の綜合中枢のある脳部

平 澤 興

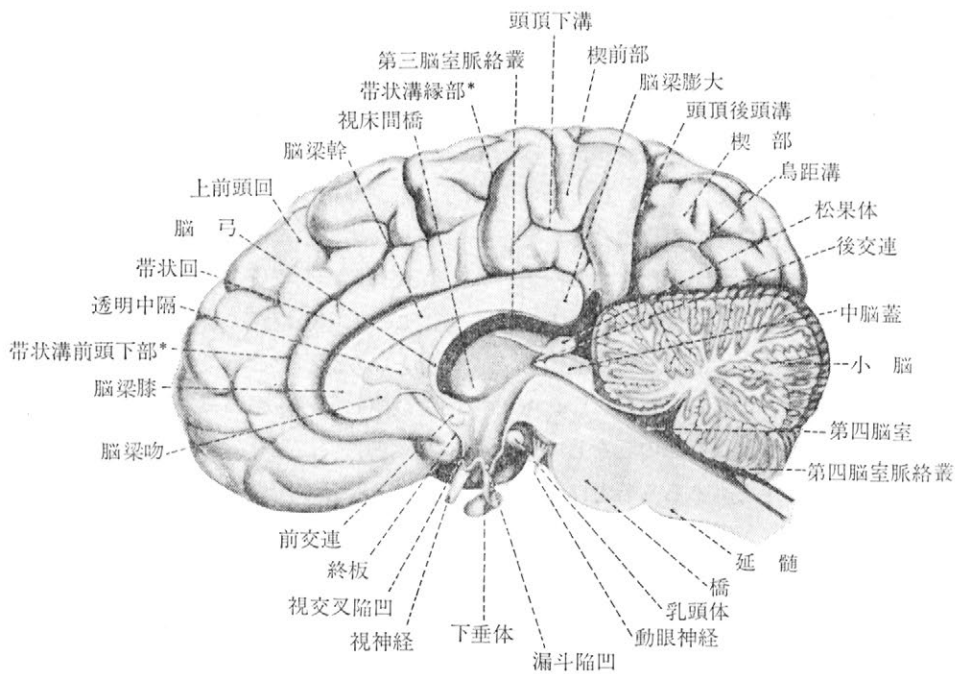
## 間 脳（第1～第6図）

終脳については、なお述べたいことがいろいろあるが、しかし、基本的な重要事項は大体述べたから、次には間脳に移ることにする。

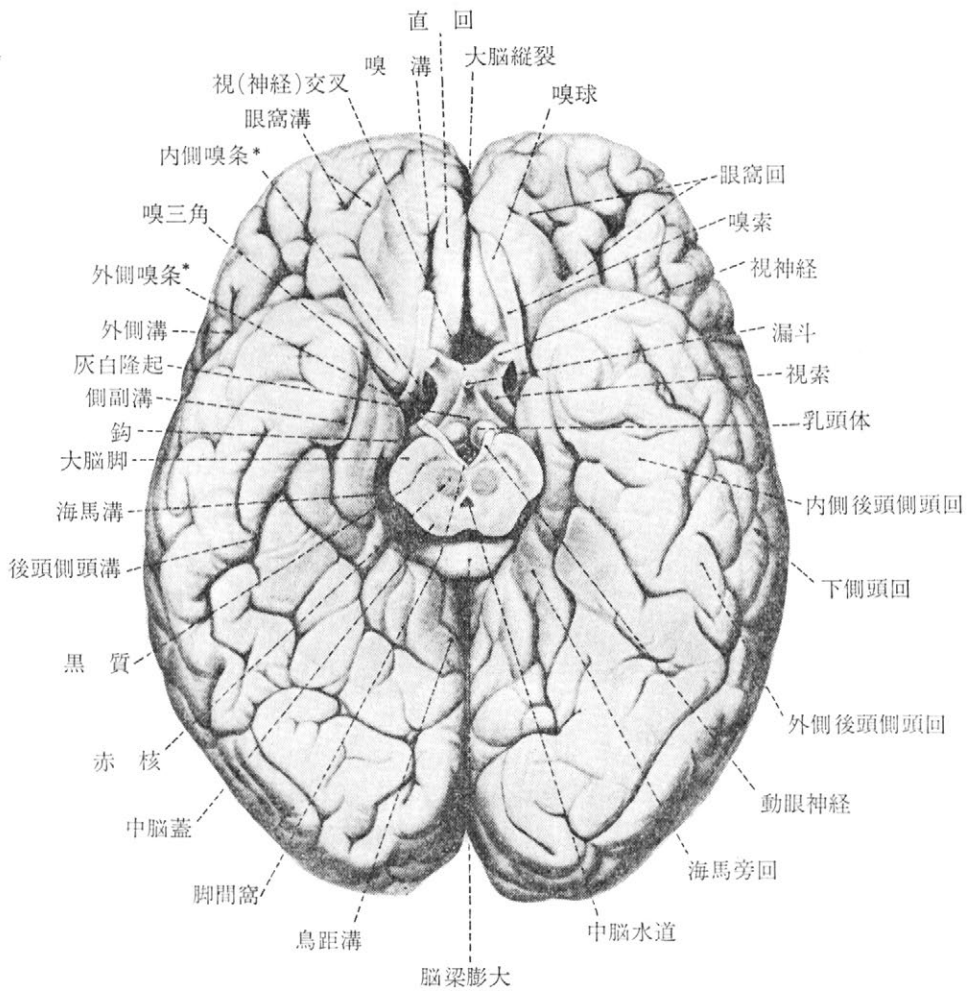
この間脳は、ただ生きるということになれば、むしろ終脳よりも大切な部分である。動物的生命、即ち「命あつての物种」などという命そのものの維持ということになれば、間脳は、

脳全体の中でも最も重要な部分である。それは、生命維持に最も重要な自律神経、即ち、生命神経の本部が間脳の視床下部にあるからである。

終脳には、その大脳皮質に精神中枢、並びに知覚、及び運動の最高中枢などがあり、またその大脳核に錐体外路系全体の統合中枢があり、その人間生活における重要性は改めて説くまでもなく、特に重要なことは、人間を人間たらし



第1図 脳の正中断

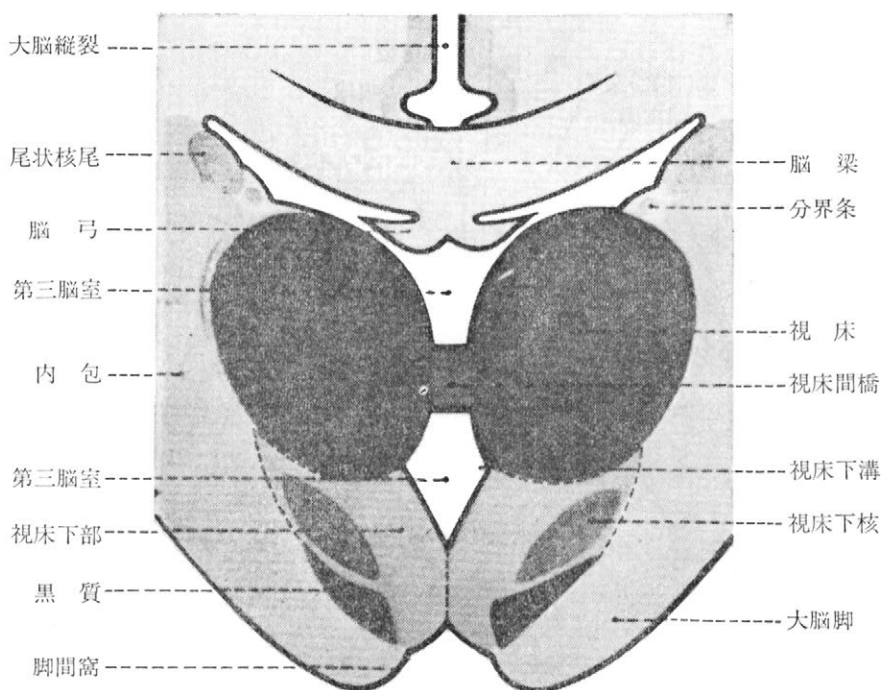


第2図 大腦の底面

める精神活動の中枢のあることで、この精神中枢の機能停止ということになれば、人間は、いわゆる植物人間として生き得ても、もはや、真の人間としての人間ではなく、ただ呼吸しているということだけになる。

人間には、動物的生命と精神的生命とがあるが、動物的生命の保持に最も重要なものは間脳（視床下部）であり、精神的生命に最も重要なものは終脳（大腦皮質）であり、原始的な動物的生命にとっては、間脳は終脳よりもより重要であり、終脳をとっても動物的生命はあるが、間脳（殊に視床下部）をとれば、もはや命を保つことはできなくなる。

いずれにしても、間脳は発生的には終脳よりも古く、左右一対あるが、細い視床間橋で結ばれ、左右の視床間に第三脳室という空間がある。第三脳室の中には脳脊髄液がはいっており、前方は、終脳の中にある側脳室へつらなり、後方は、中脳を貫く中脳水道につらなる。間脳は、出来上がる途中までは外からも見えるが、出来上がった状態では、すばらしい發育を示す終脳のために、上方も、前後左右も完全に被われて、自然の位置では外からは見えなくなり、自然の位置で外から見えるのは、ただその下面、即ち、視床下部の腹側面だけである。間脳を全体として見当つけるには、脳の正中断（脳



第3図 間脳の垂直断 (模式図)

を中央で前後に切った断面)か、垂直断で見るとはかばかない。

間脳は、更に二部、即ち、視床脳と視床下部とに大別される。視床下部は、間脳の下で、自律神経、即ち植物神経の中核、即ち、呼吸・消化・吸収・循環等、いわゆる植物性作用を行う諸内臓の最高中枢のある部であり、視床脳は、主として知覚作用の中間中枢のある部である。

### 視床脳 (第1図, 第3図~第6図, 第9図)

先ず視床脳を見ると、これは視床下部よりも広く、全体としては、太い方を後に向けた卵円形のもので、特に視床脳というのは、視覚作用との関係が最初に発見されたためである。しかし、その後研究が進むにつれ、それほど簡単なものではなく、次第に脳の中でも最も重要な一部として注目を集めつつある。視床脳は、更にこれを、

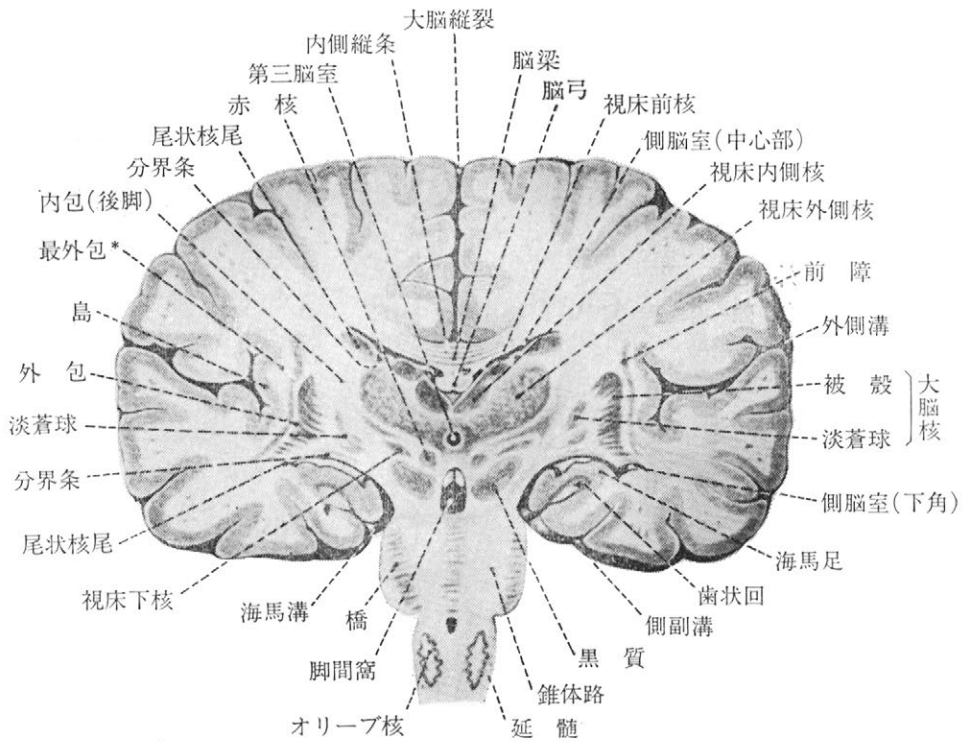
#### 1. 視床

#### 2. 視床上部

#### 3. 視床後部

の三部に分けられるが、視床は、視床脳の主部をなすものである。

視床は (第1図, 第2図~第6図), 先ずいろいろの皮膚知覚、即ち、圧力を感じる圧覚、痛みを感じず痛覚、冷温などを感じる温度覚、接触を感じる触覚などの知覚神経の中核をなす中間中枢のあるところである。一般に、神経路、あるいは伝導路というのは、いくつかの神経元、即ち、神経細胞とその神経突起が連続してつくられるもので、これらの神経元、または神経細胞を、刺激を伝える方向により、それぞれ第一次、第二次神経元、または神経細胞などと呼び、神経路は、第一次神経路、第二次神経路などと呼んでいる。皮膚から出て、これらの知覚を伝える知覚神経は、皮膚から始まって、先ず脊髄、あるいは、脳幹の諸部で神経細胞を換え、この第二次神経細胞から出た神経繊維の主部は、交叉し、一少部は交叉せずそのまま昇



第4図 赤核を通る垂直断

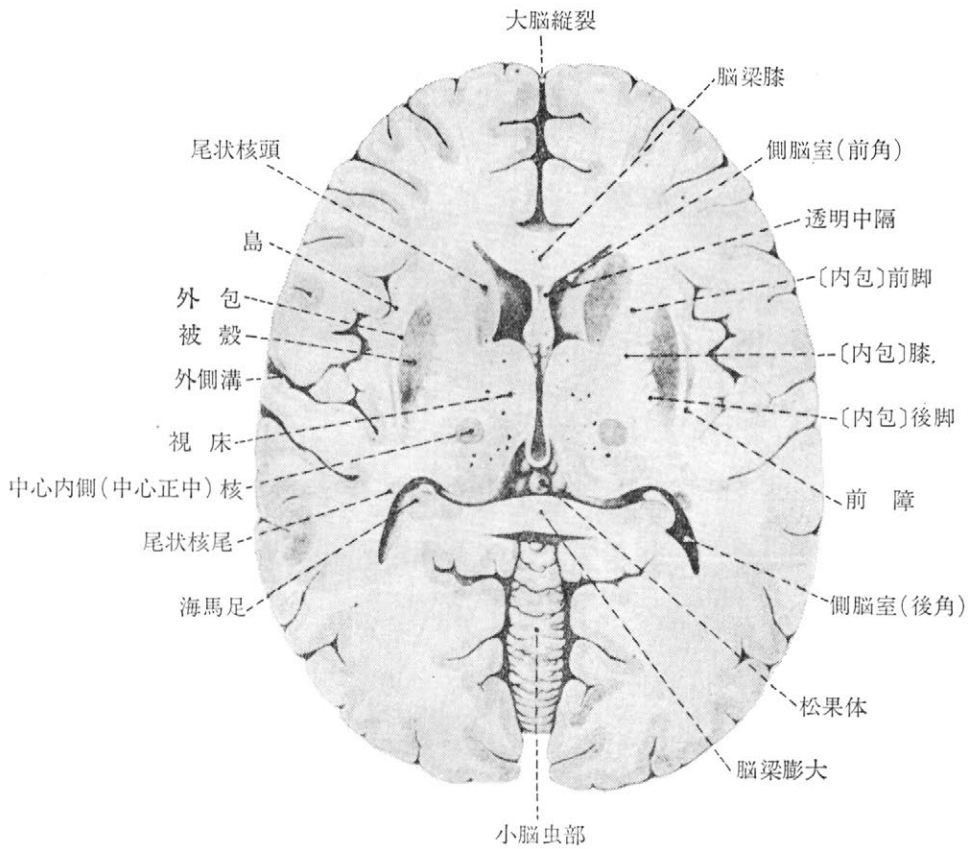
って視床まで達して、ここでまた神経細胞を換え、この第三次神経細胞から出る繊維が、更に脳の諸部に連絡するのである。視床まで達した興奮の配分は決して簡単ではないが、しかし、極めて興味深く、動物の発育度によりいろいろである。哺乳類以下で、真の大脳皮質の発育がないか、あるいは、ごく悪いような動物では、末梢の皮膚から視床へ達した興奮は、主として反射運動を起こす錐体外路中核たる大脳核に達し、かくて、種々の反射運動を起こすことになる。しかし、人間の如く、大脳皮質の発育のよい生物では、視床へ達した皮膚知覚は(第9図)、主として先ず大脳皮質へ達して、種々の反応を起こし、その一部は下等動物と同じく、やはり大脳核に連絡して、錐体外路性の働きを起こすことになる。

同じく皮膚知覚でも、知覚の種類により、大脳皮質との関係はまたいろいろで、皮膚知覚の

中でも、痛覚・温度覚・圧覚などは、系統発生的に古く、原始的のものであるが、触覚は新しく、より高等のもので、この触覚は、更に、新旧の二つに分けられる。古い触覚は、さわったことはわかるが、どこへさわったとか、さわったものが何であるとかは分からぬが、発達した新しい触覚になると、それまでも分かる識別力があり、これは特に人間において発達がよく、盲者のいわゆる指話などは、この高度に発達した識別力のある触覚によるものであり、こうした触覚は、まさに目のかわりにさえなり得るものである。ヘレン・ケラーの偉業は、まさにこの高度発達の触覚によるものであり、この触覚の中間中枢をなすのは、この視床である。

味覚の神経路については、今日なお議論があるが、おそらく、やはり視床を通じて、大脳皮質の味覚中枢に至るものようである。

このほか、詳細については、今日もなお分か



第5図 松果体の上を通る水平断

らぬ点があるが、いろいろの内臓からの内臓知覚や、更には筋、関節などからの知覚も、視床で休み、一部は内臓中枢のある視床下部に、一部は大脳核と大脳皮質の方へ伝えられるようである。更に重要なことは、詳細はなお不明であるが、視床が感情の中枢をなすと思われることで、これは、近時発病に重要な意味を持つストレスの研究などとともにより明らかにしつつある。

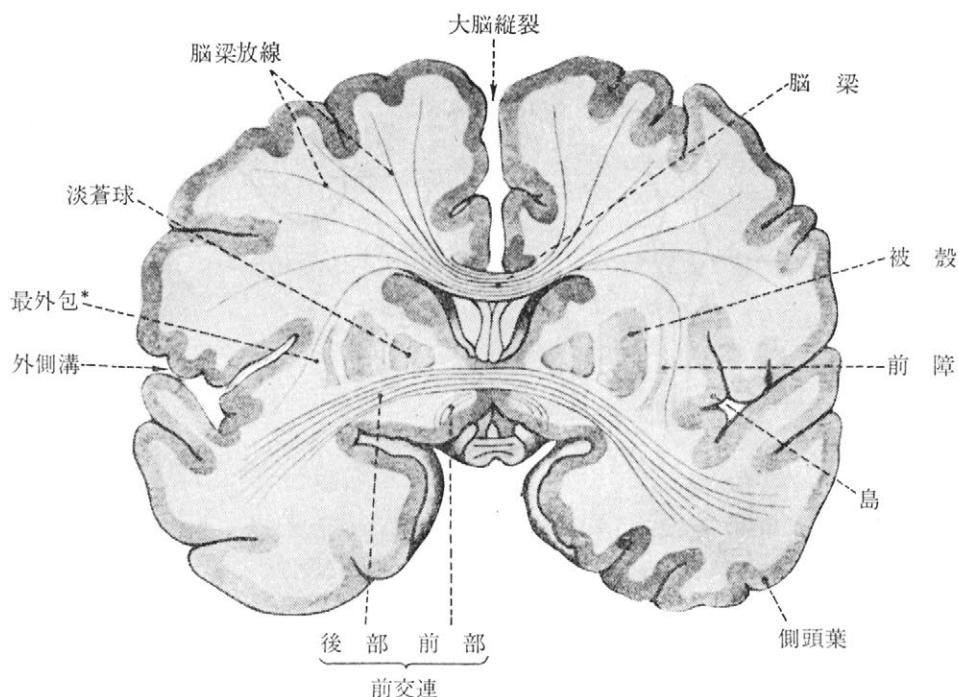
視床は、中枢神経における複合核の代表的なものとして重要な意義を有する。中枢神経、即ち、脳や脊髄の神経細胞の配列を見ると、部分により、いろいろであるが、大別すると、大体三種に大きく分けることができる。即ち、その第一は、神経細胞が神経繊維などにまじって不規則に散在しているもの、たとえば、いわゆる

脳幹の網様体の如きものであり、その第二は、神経細胞がしかるべき集団をなして、いわゆる神経核をつくるもの、その第三は、神経細胞が規則的に層的配列をして、いわゆる層構造を示すもの、たとえば、大脳皮質の如きもの等に分けられ、そのおのおのは更に詳しく見ると、多種多様である。その詳細は後にゆずるが、今、視床で問題になることだけを少し詳しく見ると、第二の神経核の状況にもいろいろあり、単一の核もあれば、そうした神経核がいくつも集まる複合核もあるが、視床は、中枢神経系の中でも最も発達した複合核の一つで、この点からも、視床は極めて面白い。

視床核の分け方は、人によりいろいろで、正式の解剖学用語では、

1. 視床前核 (前背側核, 前腹側核, 前内側





第6図 前交連および脳梁線維の放射模式図

核)

2. 視床内側核
3. 視床外側核 (前外側核, 中間腹側核, 後内側腹側核, 後外側腹側核, 背側外側核, 後核〔視床枕〕)
4. 視床網様核
5. 中心内側核

等に分けており, Vogt は猿で60, Walker は20, 新見は17に分けておるが, 視床核の詳細については, あまりに専門的になるので, ここでは略する。

しかし, ここで一般的事項として触れておきたいことは, なるほど視床は, 脳の中でも最も複雑な複合核の一つで, 多数の神経核を有してはいるが, そこには大脳皮質で見る如く, 独特の層的構造を示さないということである。これは, 視床は作用的にも極めて重要な中間中枢ではあるが, しかし, その役目は, 主としてそこへ達した興奮を脳の他部へ連絡, あるいは分配するという点で, 大脳皮質におけるが如く,

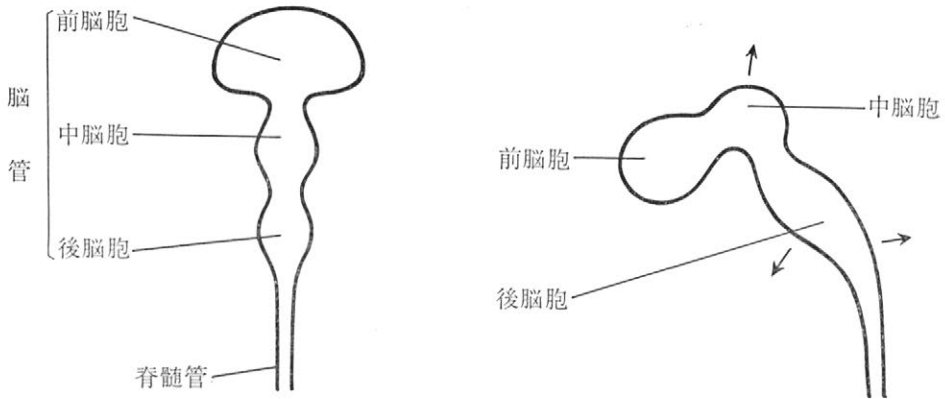
達した興奮の総合的操作を行うところではないということを示すものである。もとより, 視床核相互の間にも多少の連絡もあり, 作用的関連も考えられるが, しかし, これはそれほど重要な作用ではない。

以上述べたことからわかる如く, 視床は, 何よりも先ず主として皮膚知覚の中間中枢であるが, しかし, 大脳核への連絡により, 錐体外路性の作用にも, また, 視床下部への連絡により, 自律神経性の内臓活動などにも関係し, 更には, おそらく味覚神経の中間中枢をもなすものであり, 殊に, 近時感情の中枢などとしても考えられている。しかし, その詳細な機能については, 更に精密な今後の研究が必要である。

### 視床上部と視床後部

視床脳のうち, 他の二部, 即ち, 視床上部と視床後部は, 視床よりも発育が悪い。

視床上部 (第1図) は左右視床の後上部の間



第7図 脳管と脊髓管

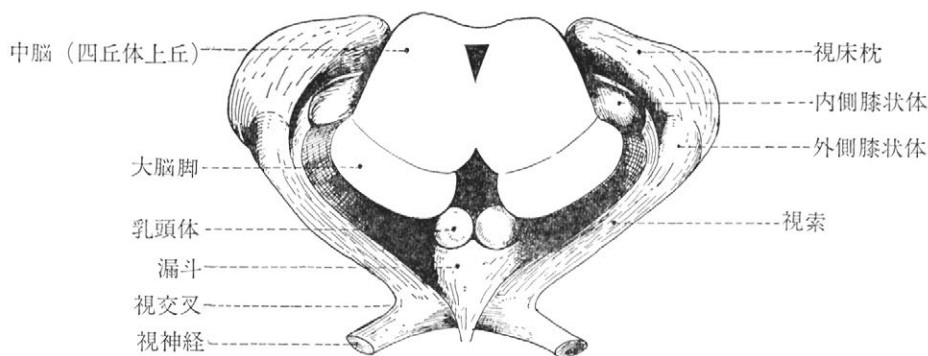
にある狭い部分で、**松果体**、**手綱三角**、**後交連**の三部からなる。松果体というのは、その名の示す如く、まつかさを思わせるような形をした小さなものであり、手綱三角は、三角形を呈した痕跡的な部分で、松果体の前外側に存し、中に手綱核を有する。後交連は、松果体のすぐ下方で左右の脳部を連絡する神経繊維からなる細いひもである。

松果体の機能に関しては、いろいろ議論があるが、昔から、一種の内分泌器官として見られてきた。そして、一般的には、身体の成長、殊に、生殖器のそれを抑制する作用を有するものと思われている。もし、この松果体に故障が起こると、一般に、身体並びに精神の発育に早熟をきたし、殊に、生殖器の成長が極度に良好となり、幼児でも生殖器だけは成人の如く、極端なものになると、乳児でも生殖器に発毛を見るような例さえ報告されている。即ち、松果体は、成長促進作用を有する(脳)下垂体とは逆作用を呈するものである。この松果体は、歴史的にも、いろいろのことをいわれてきたもので、例のデカルトなどは、松果体こそは精神の宿所で、人間の賢愚も性格も、全くこれ松果体の作用に基づくものだなどといっておるが、しかし、これは確実な証拠があってのことではなく、反対者によれば、果してデカルトが松果体

そのものを見たことがあるか、どうかも疑わしいといっておる。

手綱三角は、直接臭をかく作用には関係ないが、嗅覚の反射に関係するといわれる。即ち、前頭葉の下面にある嗅覚中枢からくる嗅覚反射を起こす神経路の一部がここで休み、ここから更に中脳の運動核に連絡して、嗅覚反射を起こすのであり、人脳の中でも最も古い部分に属する。即ち、視床上部は発育が悪く、松果体を除くほかは、あまり重要な部分ではない。

視床後部(第8図)は視床の後外下方にあるもので、内外の二部からなり、内側のものを**内側膝状体**、その前外方にあるものを**外側膝状体**とよぶ。いずれもその中に核を有し、外側膝状体の核は六層形成を示している。内側膝状体は、中脳の下丘とともに聴覚の中間中枢をなし、外側膝状体は、中脳の上丘、および視床後部(視床枕)とともに視覚の中間中枢をなすものである。視覚とか、聴覚の中間中枢をなすというのは、視床が大脳皮質への皮膚知覚の中間中枢をなしていたように、目とか、耳からくる視神経とか聴神経が大脳皮質の中枢へ行く途中に通過する中継所であるということである。即ち、外側膝状体で休む視神経も、内側膝状体で休む聴神経も、ともに第二次神経元にあたり、やはり交叉も完了したものである。ただ、



第8図 視床下部及び視床後部（後方から前方を見る）。大脳半球を取り除き、中脳（上丘）で垂直断をしたもの。

人間の視神経においては、交叉する繊維と非交叉の繊維とが大体半分ずつで、従って、外側膝状体に終わる神経繊維も、兩種の繊維がほぼ半分ずつである。聴神経の方は、ほとんど交叉をしているが、第二次神経路の途中に、なお種々なる副核が介在し、繊維の一部は、かかる副核にも終わるから、内側膝状体に終わる繊維は、必ずしも第二次繊維だけではなく、第三次、第四次性の繊維なども多少は加わる。

第二次神経元に交叉するものが多く、視神経の場合の如く、交叉繊維と非交叉繊維が相半ばする（半交叉）とか、あるいは、聴神経における如く、その第二次神経元の途中で副核が出現し、主なる第二次神経元の中に第三次、第四次神経元が混在するというようなことは、個々の神経により多少違いますが、しかし、大局的に見れば、末梢（皮膚、目、および、耳）から来た二次的の神経繊維が、先ず中間中枢たる視床脳に休み、最後に、大脳の皮質中枢に行くということは、皮膚知覚、視床、および、聴覚中枢に共通のことであり、極めて興味深いことである。

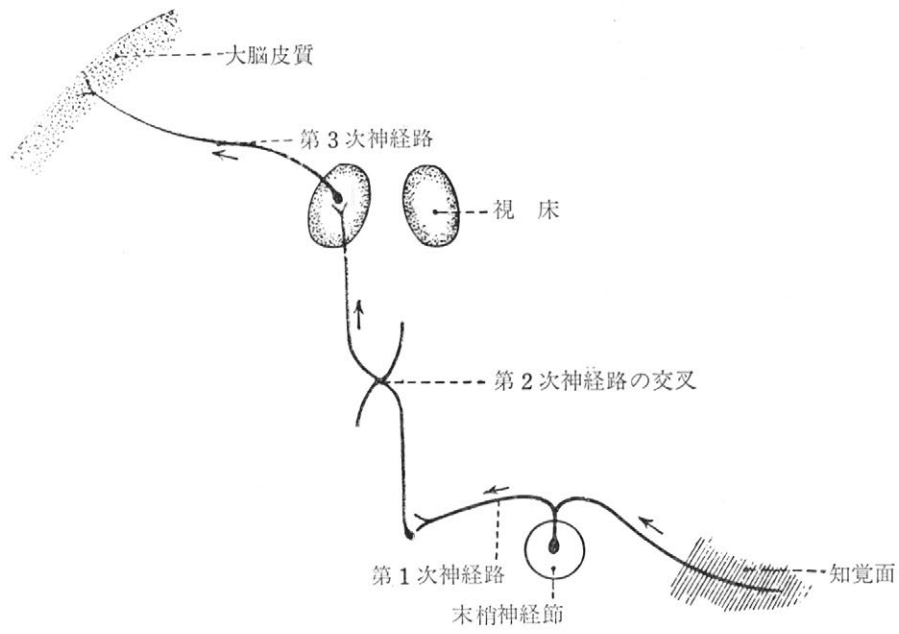
視床脳を全体として見ると、更に、視床、視床上部、および、視床後部の三部からなり、視床上部は、内分泌器官たる松果体を有する点において重要であるが、大脳皮質への知覚神経の

中間中枢としての作用はない。しかし、視床と視床後部は、何よりも先ず、知覚神経の大脳皮質への中間中枢として重要で、視床は主として皮膚知覚、視床後部は視覚、および聴覚神経の中間中枢となる。視床は、皮膚知覚のほか、上述した如く、その他なお種々なる知覚神経の中継所としてもはたらき、極めて重要な部分である。視床脳が直接に中継所とならぬ知覚は、嗅覚だけで、これは他の知覚、即ち、皮膚・目・耳・舌などからの知覚とは全く別の道を通るが、これは、嗅覚が五感の中でも最も原始的で古く、これだけはその皮質中枢への連絡も旧体勢のまま、まだ新体勢をとらぬということである。

## 視床下部

視床下部（第1図、第2図、第6～第8図）は、第三脳室の底をなす狭い部分で、視床の下にあり、これとは視床脳の内側面にある視床下溝によって境され、前端は終板に、後端は大脳脚に連なる。一般に、神経細胞に富む灰白質からなり、前から後に向かって、正中断でわかる如く、終板、視（神経）交叉、（脳）下垂体、漏斗、灰白隆起、乳頭体などが区別される。

終板は、視床下部の最前方にあり、灰白質の



第9図 皮膚知覚路型の模式図

薄板である。終板というのは、本来、脳胞全体の終わりの部の前壁をなして、脳胞を閉じていたからである。中枢神経系の発生を見ると（第7図）、初めは全体として長い中空の管をついているのであるが、それが次第に変化して、管の壁が厚くなり、先ず脊髄になる部（脊髄管）と脳になる部（脳管）とが分かれる。脳になる部は、更にその壁がますます変化して、前・中・後の三つの袋、即ち、前脳胞、中脳胞、後脳胞をつくり、それぞれ前脳、中脳、および、菱脳が出来るのである。初め、終板は前脳胞の最先端の部で、外からもよく見えるのであったが、その後、その後方から大脳半球になるべき部が両側へ突出して周囲に遅しく発達し、そのためにかくされて、出来上がった人脳では、自然の位置では外から見えなくなるのである。そういう意味で、終板は、脳の発達の歴史から見ると、意味深い旧跡のような部分で、上方は、前交連の前方で終わる。

前交連は、視床下部ではなく、大脳半球に属

する交連系で、その交連系としては古いものである。これは大脳半球の中でも、古い嗅覚に関係する左右脳部を連続する神経繊維によってつくられる。前交連は、更に前後の二部に分かれるが、人では、この前交連の発育は、大脳半球の新しい部分を結ぶ交連系たる脳梁よりはるかに悪く、とても比較にはならぬが、下等動物ではその関係は逆である。ついでに、大脳半球に属する新しい交連系たる脳梁に言及すると、人脳では、この脳梁の発育は極めてよく、脳の正中断で見ると（第1図）、全体として「つ」の字になり、これを前から後へ向かって、脳梁吻、膝、幹、および、膨大の四部に分けられる。

視交叉（第8図）は、眼球後部から出る視神経が脳底で交叉して生ずるもので、交叉後は更に後外方にはしって視索となり、その繊維は、分かれて第一次視覚中枢たる視床枕、外側膝状体、および中脳上丘等に終わるものである。

下垂体、あるいは脳下垂体は、視交叉の後方に下垂する小指頭大の内分泌器官で、発生原基

を異にする前後の二部からなる。前部の下垂体前葉（あるいは腺葉）は、口腔原基の腹側部から生じ、後部たる下垂体後葉（あるいは神経葉）は、間脳原基の腹側部から生ずる。前葉は、一般の腺組織と同様で、その分泌物たる諸種なるホルモンはその腺細胞で形成されるが、後葉の分泌物は、視床下部の神経細胞の中で神経分泌としてつくられ、下垂体と漏斗を結ぶ下垂体基の神経繊維を経て後葉へ運ばれ、ここでホルモンとしてはたらくといわれる。漏斗は、第三脳室が下方へ漏斗状にしぼんだ部位で、その先端に下垂体があり、従って漏斗は、下垂体の根本にあたる第三脳室のくぼみといってもよい。下垂体は、内分泌系全体のリーダー格のような重要な立場にある内分泌器官で、その機能については更に後述する。

灰白隆起は、漏斗の後方にある灰白質の薄板であり、乳頭体は、その後方にある左右一対の半球状のたかまりである。

さて、下垂体前葉は、内分泌器官のうちでも中心的立場にある重要なもので、ここでは諸種のホルモン、たとえば、

1. 成長ホルモン
2. 性腺刺激ホルモン
3. 副腎皮質刺激ホルモン (ACTH)
4. 甲状腺刺激ホルモン (TSH)
5. メラニン細胞刺激ホルモン (MSH)
6. 脂肪分解促進ホルモン (LPH)

等々がつくられ、そのホルモンの影響するところは全く全身的で、そのホルモン分泌に故障が起されば、その影響もまた全身的である。

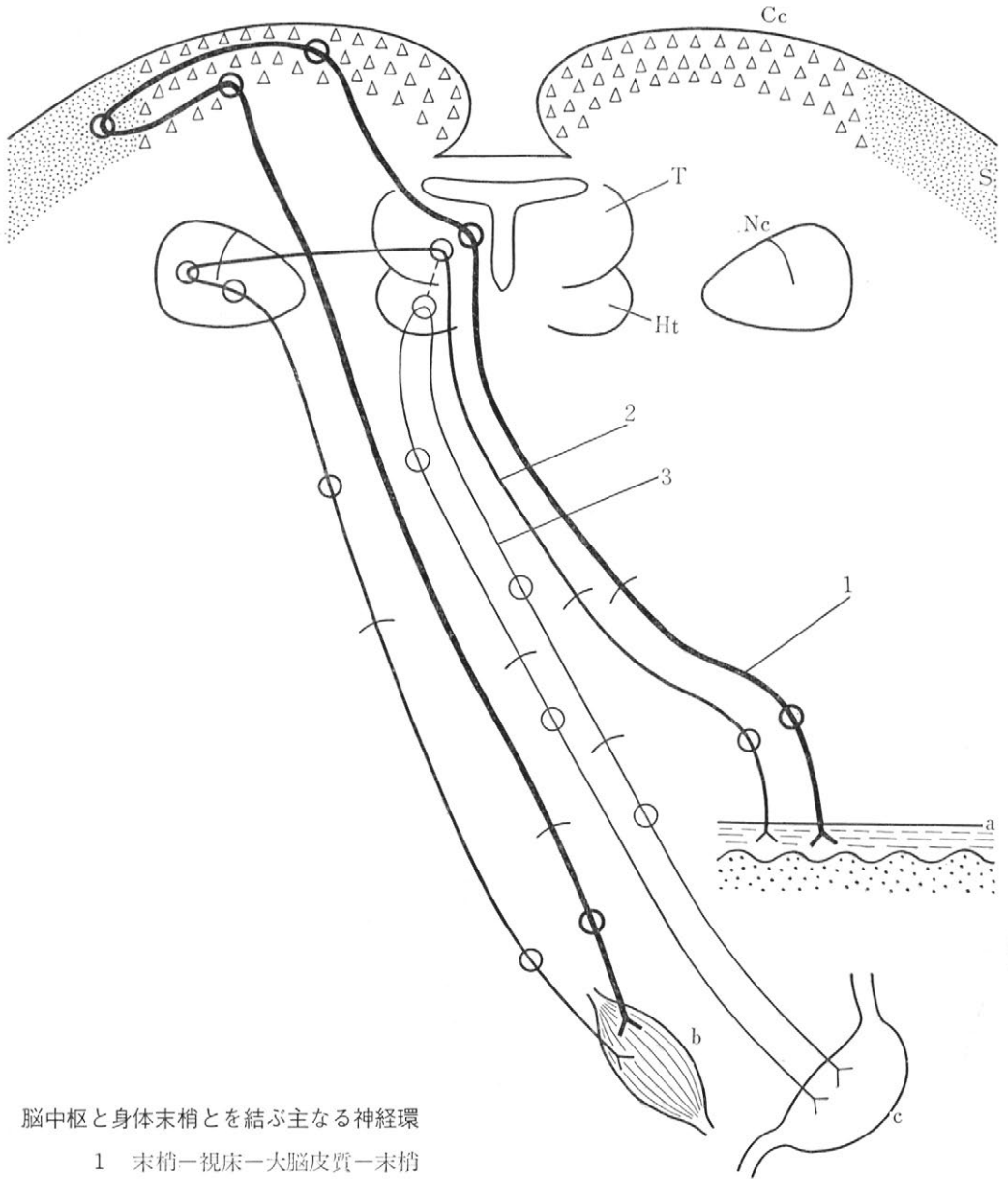
下垂体後葉のホルモンは、前述の如く、視床下部の神経細胞でつくられて、ここへ運ばれてきたもので、尿量を少なくする抗利尿ホルモン ADH 等であり、前葉ほど複雑ではない。

いま、病因になるストレス発生の例について一言すると、ストレス発生には、感覚、あるいは、感情問題などが大きな比重をもつが、そう

いう意味では、知覚や感情にとって中核的のはたらきをもつ間脳、殊に視床は、いわばストレス発生の中心とも考えられる。かくて、視床に発生したストレスの刺激は、視床下部、殊に主として下垂体（前葉）に集まり、その影響で先ず副腎皮質刺激ホルモン ACTH 等の分泌となり、これが副腎皮質を刺激して、コルチゾン・その他を分泌して、身体の調節をとるようになるのである。ここでは、これらのことについて詳しく述べる余裕はないが、副腎からも諸種のホルモンが出て、からだを安定した状態に保つようはたらくのである。下垂体と副腎との関係は、前者はいわばオーケストラの指揮者のようなはたらきをしておるもので、ストレス的刺激は、先ず視床にはたらき、ここから視床下部、殊に、下垂体にはたらき、この下垂体の命令で、更に副腎がはたらき出すようなことになっており、何としても、下垂体のはたらきはホルモン全体のはたらきに対し、従ってまた、全身の機能調節に最も基本的性格を有するものである。

さて、視床下部は、下垂体で述べたことからわかる如く、極めて重要なもので、ここには、種々なる神経細胞集団、即ち、神経核があるが、余り専門的になるので個々の核の構造や作用にはふれない。実はまだ簡単に説明し得るほど諸家の意見が完全に一致しておらぬのである。

詳細の点についてはなお議論はあるが、しかし、視床下部に直接人間の生命を保つ自律神経、即ち植物神経の諸作用の本部があり、内臓等のはたらきを調節しているという点では、学界の意見はほぼ一致している。だが、それ以上の詳細なことになると、植物神経の中の交感神経と副交感神経の中核部位に関しても、また、個々の作用、たとえば、水分代謝とか、体温調節等々の中枢についても、まだ最後の意見の一致はない。



脳中枢と身体末梢とを結ぶ主要な神経環

- 1 末梢—視床—大脳皮質—末梢
- 2 末梢—視床—大脳核—末梢
- 3 末梢（内臓）—視床下部—末梢（内臓）

a 皮膚,      b 筋（骨格筋）,      c 内臓（胃）,      Cc 大脳皮質,  
 Ht 視床下部,      Nc 大脳核,      S 思考中枢,      T 視床  
 ○ 神経細胞の変わる部位（但し3の神経環ではまだ正確にはわからぬ）

第10図 身体末梢部と脳中枢との間の神経環（模式図）

すでに述べた如く、間脳は、自然の状態では、その底面の一部を除くほかは外から見えぬが、その上部たる視床脳は、皮膚知覚、視覚、聴覚、および、おそらくはなお味覚等の大脳皮質中枢に至る中間中枢として重要な部位であり、下方の視床下部は、植物神経の最高中枢、および、ホルモン分泌のリーダー格として、生命繊維には絶対に必要な部位であり、結局、肉体的生命の維持ということになると、終脳よりも、より以上に重要な部位である。

### 視床性動物と皮質性動物

さて、間脳を見て特に感ずることは、人間の生活と動物の生活との相違である。動物の生活では、その神経環は末梢（皮膚、筋、内臓等）から間脳に達し（第10図）、この間脳を頂点として、内臓等の中枢たる視床下部か、あるいは、反射運動の中枢たる大脳核に達して、再び身体末梢部（筋、内臓等）にかえるようになっている。しかし、大脳皮質のよく発達した人、および、哺乳類等では、この神経環は身体末梢から間脳に達し、動物が高等になり、大脳皮質の発育がよくなればなるほど、ますます多く大脳皮質へ達し、ここから更に間脳、および、大脳核等を通して、身体末梢部に連絡するようになる。身体末梢からの興奮が、視床を頂点として再び末梢へかえるか、更のぼって大

脳皮質まで行くかは極めて大きな相違で、大脳皮質経由の場合には、人間の如く、皮質の発育が良好で、ここによく発育した思考中枢があるときには、神経環はここを通り、その行動は思考性となるが、間脳からそのまま末梢へもどるような神経環では、決して反射行動以上にはならぬのである。視床が、身体末梢と神経中枢とを結ぶ神経環の頂点となるような動物を**視床性動物**、その神経環の頂点が大脳皮質となるような動物を**皮質性動物**とよぶことが出来るが、動物の中でも、哺乳類より下等の動物はすべて視床性動物であり、哺乳類と人だけが皮質性動物である。しかし、この皮質性動物のうちでも、人間には、その思考中枢の発育が特別によく、動物に比し、人間は特別の位置にあるが、人間にして人間にあらざる視床性生物にならぬようにしたいものである。

---

〔筆者紹介〕 医学博士、京都大学名誉教授、日本学士院会員、第19回日本医学会 総会 会 頭、新学社総裁、財団法人日本教材文化研究財団理事。

〔略歴〕 明治33年、新潟県に生まれる。大正13年、京都帝国大学医学部卒業、同大学解剖学教室助手、助教授、新潟医大助教授を経て、欧米に留学。昭和5年、新潟医大教授。21年、京都大学教授、附属医学専門部長、教養部長及び医学部長を歴任。26年、日本学士院賞（錐体外路系の研究による）。28年、武田医学賞。32年、京都大学総長。38年退任、名誉教授。42年、日本学士院会員。42～43年国際ロータリーガバナー。45年、勲一等瑞宝章。52年、医学教育功労賞。

# 時務の感想



## 保田與重郎

先人の遺業を後に傳へるといふ積み重ねは、教育の主たる目的の中でも第一のものである。それは民族の願望の現れだからである。先人の残したものは、大切なもの、立派なものや、見事なもの、さらに云へば尊いものがある。

平穩な社會生活をしてゐる地域に、何かの關係で、急に新しい文物や有力な機器が入つてくると、舊來の生活を變へようとする考へ方が人人の間に起り、舊いものを破棄するといふ例が少くない。變化を求める氣分世代が、さういふ變革の勢力となる。それは一概に不可とは云へない。さういふ過激な暴力が、ほどほどに必要なことは、歴史の進展や民族の更生のうへでの現實である。しかしさういふ場合の暴力に、教養が伴つてゐない時は、忽ちに崩壊となる。これは輕薄な破壊である。教養とはつねに一代以前のものを底邊とする。

破壊の小規模のものは、うらみや、ねたみのやうなものが引金となつて起ることが多いが、それらはつまらないのである。歴史的に大なる破壊といふものがある。大なる破壊は時々偉大な破壊とも云へる。我國の歴史を通じて見ると、殆ど大破壊はない。戰國時代末期の英雄の中で織田信長は、多少さういふ呼吸に通じてゐたが、世界史的に見れば、人を殺し、過去の遺物を焼却した點では、とてもものに大悪大破壊の人とは云へない。しかし大破壊が我國史になかつたといふことは、文明の點から云へば有難いことである。この有難さのよるところは、

すべてが國土の秀麗に歸すのである。我國の歴史のあとを見ても、意識の破壊は小さく、修理再興の方に力をつくしてゐる。世界の歴史の上で、まことにつつましい態度である。明治新政の始めに過去の封建の遺風を一新せんと、封建の象徴と考へた各地大名の城閣を多數うちこぼつた。しかし格別に美しい天守閣は、あちこちで残つた。それを残すについて大した理窟など考へず、何となく残つたといふやうな例である。文化財保存などいふ近頃の理窟は、あとづけの理窟だから、大たいをかしく、間違つてゐる。わが國では、何の理窟もないところの、體についたやうな氣持で判断してきた結果が、文化の保存となつた。血が通つてゐるといふものである。このもつて生れたやうな感情や、情操や情緒を、論理的に説明することは出来ないわけでないが、わが國の風流の中には、さうしたことをわづらはしく、愚なことだとする別の思ひがある。この思ひの大切さを見おとしてはならない。わが國の特に近世生活の上で大切にされてきた、わび、さび、幽玄、いき、などといった、今も多くの人が、これこそ日本的と思つてゐる觀念を、近昔からこの方、西洋に學んだ學問を應用して説明しようとしたことであるが、それらの近來の學問には、そのものにいきもわびもなかつたのである。正反對のゆとりのない理窟をつくつたり、正反對のぎこちない生き方をしてゐた。これは不幸な矛盾である。それらが何であるかといふことをしみじみと知ることが、



教育の上の問題である。知とともにしみじみといふ情態が大事である。

我国の封建期の家庭では、宗教上の教義教學を教へることはなかつたが、日本の母の風儀には、生活として宗教のなつかしい雰囲気があつたといふことを、明治以來第一の基督者だつた内村鑑三が云つてゐる。人のくらしの気持の中で、なつかしさがなくなることは、我々が古を失ひ、他界を失ふことであつて、さういふところから生れる宗教も道徳も、ただの現世利益に結びつくだけである。そこには美がない。

我國に大破壊がなかつたのは、國土の秀麗と、その島國の環境の衛りにあつたが、この秀麗の島國では、大地震や颱風が、大破壊をしたのである。人の生涯に一度はあるといふのが、わが古人の傳へだつた。それは一生に一度といふ、やさしい話である。現世一切皆苦などとは云はない。

わが國の神々は、和魂と荒魂をもたれてゐるといふ、古人の信仰は、印度の土着神の善惡共在の性質にも相似する。漢字のうち抽象的な思想を現はす言葉には、時々善惡といつた全く正反の語義を一つの文字がもつてゐる例がある。漢字はアルファベット式の記号でなく、その究極に到ると、一字で即ち天地陰陽の眞理を現はすやうな意味をもつものがある。一つの思想や深い哲學を一字で現はすのである。それらも發生的には象形だつたのである。象形が神話を描いて一字となつてゐることがある。その思想や意味は、いつの時代にならうとも、その時代のことばで云ひかへると、その時代の思想として十分の生きたものとなる。わが國の神話の典型は、古事記の冒頭の文である。漢字の壽の象形の解義で、この神話の思想をあらかた表現してゐることを知り得る。

人の中の英雄の場合には、その一身に善神と悪神を内蔵してゐるといふことは、最も尋常の理解である。神々のもたれる和魂と荒魂と同形式

である。皇大神宮は天照らす日の大神で、萬物生産の慈母なることは、日本人のもつてきた古來よりの信實だが、その皇大神宮の荒魂は、颱風を起したり、もろもろの禍の源となるといふことが、大祓のもととなる思想である。大祓詞では、諸々の禍を拂ふ役をする神々は、みな皇大神宮の魂の働きとなつてゐる。禍のために祓ひがされるのであるが、禍の原因は皇大神宮の荒魂にあつたから、その禍を祓ふのも、皇大神宮の別の魂の役だといふのは、全くの道理である。どうして、何故に、そんな考へ方が出たかといふことを云はず、さういふ事理を傳へてきたといふことが重大の事實である。

この地上には、ある一時期に榮え、そのあと全く地上から消滅したやうな民族や王國がある。異民族が侵入して、原住民族を滅したといふやうな例が多い。侵入した民族が、舊王國とその民を皆殺しにするのは、侵略だが、防衛の本能の發露とも考へられる。淺はかな考へ方である。この淺はかさが世界をいつまでも修羅の場としてゐる。我國は異民族の圧倒的の侵入をうけた史實がなく、異文明を同化する方に努めて進んだ。かういふ例は世界の古代史にない。多くの異民族が、一つに同化して一つの民族をつくつたといふことが、日本の歴史の特徴である。我國には皇室があつたからだといふのが、徳富蘇峯の説かれた歴史観である。我國の思想では、天皇陛下は天照皇大神の皇孫で、即位によつて、皇孫となられる。人の代とかかはりなく、いつも唯一人の皇孫であつた。我々人民の生命も亦、同じく高産靈神から續くものだといふことは、自覺として、我々の祖先の信としたところであつた。しかもその際に分があるということ、感情的に知つてゐたのも普通の日本人のおだやかな感覺であつた。我國の傳統の祭政といふのは、この意味から考へるべきである。古代中國傳統の禮樂の思想と相通じるものを、昔の日本人はさらに原始素朴の形で傳へて

ゐた。地上に天上の風儀を移すといふことが、  
我國の神國思想だつたのである。その方法は天  
上で神々のなされてゐるくらしのままを、地上  
でするといふのである。

我々の先祖の日本人は、自らを神の僕とか奴  
隸とは考へなかつた。天上の神々が天上でなさ  
れたことを、地上に於て為す、天上の神と同じ  
ことを、この地上でなすのが使命だと信じてゐ  
た。地上を天上の神の國と同じにするのが、人  
の勤勞だと考へた。これが天降りの時の神勅だ  
つた。自分らは神に対して何であるかといふこ  
とを考へて、ことを始めたのではない。歴史時代  
になつても日本と東洋には、奴隸といふ制度が  
現はれなかつた。祭政の思想は、地上で天上の  
神々と同じくらしをし、この國土に天上世界を  
つくるといふ考へを、最も素朴に傳へたもので  
ある。この素朴といふことから、この人生が神  
話に直結するのである。地上を天上と同じにし  
るといふのが、わが國の神國思想である。皇孫  
は天降りの時、天照皇大神から天上の稻の種子  
を授かり、これを地上でも植ゑ、天上で神々がな  
されてゐるやうに、地上でも米作りに働けよ、  
さうすれば地上も天上と同じになる、と教はつ  
た。天降りの神勅である。わが國の神々は天上  
で働かれてゐたのである。天上で營々と米作り  
をされてゐた。閑を弄してをられたのでない。

この神勅實行のために天皇陛下のまつりごと  
は、米を作り、その成果を天神に復奏すること  
が唯一のまつりとなる。これはおくらしと一つ  
である。皇后はそれに附隨して蠶を養ひ、機を  
織られる。天上で天照皇大神は機を織つてをら  
れたからである。皇孫の初代の皇后となられた  
木花咲耶姫は、笠紗の岬の海の大殿で機を織つ  
てをられた。その機を織る音が、非常に美しい  
ので、皇孫は御心よせられ後に選ばれる。この話  
には勞働が根本にある。河井寛次郎は、ある時、  
高砂族の機を織る音をきいて、この世の限りの  
美しい音楽を感じたと語られた。私はこの話の

眞實に感動した。

昭和の改元頃に小説家だつた兵本善矩は、西  
鶴以來の上方風戯作者の巧みさを全うに傳へた  
めでたい作者だつた。戦が終つてからは、小説  
を活字にすることをせず、手書きの草稿をもつ  
て知人を訪れ、その自作の小説を讀んで聞かせる、  
奇妙なことをしてゐた。戦後のまだ早い頃  
で、世の中は亂れ、人心はすさみ、ものの乏し  
い日頃だつた。私は彼のよむ彼の小説をきいて  
ゐた。南大和の村の風物を描いてゐるのである。  
よろこばしい春が來たといふうれしさを寫す  
のに、田畑の作物は青々と伸び初め、張り出  
してきた樹木の姿から、農家の家畜のよろこび  
のなき声、鶏の聲、犬の聲、牛の聲、山羊の聲  
も出てきた。その中で、家々で織る機の音を、  
すべて簡潔な短い言葉で寫し出す。擬音を入  
れたその文章が、村の生活を寫生してゐるだけ  
だが、全體として美しい音楽だつた。以前はあ  
たりまへだつた村の姿、一番あたりまへだつた  
くらしが、夢のやうに、天上のものやうにき  
こえる。これは天上の風景、他界の相であつ  
た。機を織る音がきこえてきたところで、私は  
感嘆して息をのんだ。その續きに拓聲がきこえ  
る。拓聲とは、石碑の拓本をとる、墨を叩く音  
である。春の日が永く暖くなると始まる中國の  
古風俗である。大和の宇智郡の農村に拓本を叩  
く風などなかつたが、ここで拓聲が聞えなくて  
は、風景が成立しないと、朗讀をとめて彼は慨  
然と云つた。文化國家などといふ聞くに恥しい  
類の言葉が、大臣や代議士の口から出ることの  
なかつた頃、これは文士の憧憬の風流觀念の虚  
構であつた。

その昔、中國が中國であつた昔、朝廷の政治  
の場で、百官の動作行儀に當り、佩玉の響によ  
つて、國のまつりごとの將來を察知した賢人の  
逸話に、私は深く感動した。わが朝では、木花  
咲耶姫の機織る手玉のひびきの美しさによつ  
て、この姫を皇后と定められた皇孫の故事と、

私は比較回想した。中國の史實は莊麗なまつりごとの場であつたが、わが國の機織る少女は、くらしの生産に従つてをられたのである。わが神皇不分の頃の神話は、生産の原始素朴の日に始まつてゐるのである。

わが祭政の傳統の考へ方は、この點で、禮樂の文明にくらべ素朴で稚い。稚いといふことは、神話の原始から距たること近いといふことである。この國の文明の稚さを卑下する傾向は、わが國の學者の一つの傳統にあつた。それはあつて不思議でないものである。異民族の人工文化に出會つて、自分らの稚さを卑下し、模倣に走り、自身の民族傳統を破棄し、自ら滅んだ民族や王國は、歴史の上で少くなかつた。今日でも、さういふ破滅は、地上いたるところで進行してゐるのである。気付いた時には、すでに一切が失はれてゐたといふ例がまた少ない。我國の歴史上では、さういふ危機が、三度、四度あつた。小さい形ではさらに沢山あつた筈である。個々の人の場合、家の場合、村や町の場合、などと分けると例は多い。それらが偏向の變革の暴力で行はれるだけでなく、喟嘆のしらべに即つて進行したやうに見える例もある。わが國の同化の風儀の進み方の中にも、さういふ形が時々ぞいてゐた。結果としては妥協のやうにも見られるが、我國の史實では寛容の風儀だつた。吉田松陰のつひの悟達となつた信念にも、私はふと喟嘆のしらべを感じた。それは大方に悠久の感情からくるものである。松陰の最後の決意として、維新完遂には、皇朝の御學風を恢弘するのが第一と言つた。この皇朝の御學風を、別の言葉で現はせば、天日の相の如き寛容の氣質である。これが皇朝の風儀である。偏向や一邊倒は不可だ。これが青年血氣の日、幕閣の大臣を暗殺せんとした人の、悠久に帰した感情である。わが國の大きい歴史の区切りを見ても、聖徳太子、大伴家持、紀貫之、菅原道眞、契沖、近くは西郷隆盛、かうした民族の歴

史の恩人たちは、私にとっては神の如き人である。かういふ神の如きといふ形容は、我國のものやうに私は思ふ。一系悠久といふ國柄から生れるものとを感じる。昔の中國の賢人の、その中華の感覺にこれと等しいものがあるか否か、私は無知にして知ししない。私は辜鴻銘の感慨に追従し、民國以後の大陸の人々は、中國人を稱してその實無き人種といふ感覺にゐた。中國歴史に於て、私の感銘深いのは前朝の遺臣といふ、文人の自称であつた。我も亦、郷國の歴史を身ながらに、久しく南朝の遺臣に他ならないが、これが文學の感覺と歴史の信實は、前朝の遺臣の觀念感情とは別箇の如くである。辜鴻銘は清朝最後の人、西洋近代の學問を修め、源流をたづねて、ギリシヤ・ローマの古典に通じてゐた。この誠實の人の本能は、近來無双の大儒にして、四書などの英語訳をなした。彼は頑迷固陋に旧時代の風儀を保持した。清朝の辨髮、蓄妾、さらに纏足さへ守るとした點は、理解して心術今一つ了し難い。

大伴家持が萬葉集を編んだ時、その卷頭を泊瀬朝倉宮雄略天皇の御治世より始めた。この見識は、上代の日本人の重大な歴史觀を明示して傳へられたものである。萬葉集は、上は天皇陛下を始め奉り、下は庶民遊女乞食の和歌、亦無名作者の地方民謡をも同座させた。このことは一文人の見識以上に、わが國のしきしまの道の思想を、事に當つて確立されたものである。東國人や防人の歌の記録に於ては、その地その人人の方言俗語を、一語一字で正確にうつされてゐる。この見識の最高のものは、誠実に發するのである。家持の時代は漢文學が隆盛を極め、地方の國學と都の大學では、漢學を専らとして、學藝家の官僚の育成に當つてゐた。一方造寺造佛の流行は、奈良の大佛を頂點とし、各地國分寺の建立など想像を絶した情熱を傾けてゐる。家持はこの時流に対して言擧げする代りに、萬葉集といふ文明の至高の現物を編んで殘

されたのである。この集に、畏き天皇と、身分低き庶民を、等しく列記されてある思想は、中國の文明時代に於て例なき見解にて、この萬葉集の精神は、次の時代に紀貫之の解明したわがしきしまのみちの大本である。しきしまのみちは、この世の権力や地位や、すべての現世的知性やその學藝といった、一切の虚妄とは別箇の、人間の生命の本性とそのものあはれ、即ち人に在る神ごころが、歌に啓發する所以を明らかにしたのである。いつの時代にも、当世風の知性といふ変化の怪物とたたかふことは、本來文人の一代の仕事だつた。それは聖者の仕事と同一であつた。聖者は危険な場所を行き、無数の化物と出會つてこれを退治した。目的を達するまへに、身を滅すかも知れない冒険を避けるといふ判断をしなかつた。この世のものなる冒険や危険に身を滅す程度では、大望の目的を達し得ないと悟達し、かりに失敗ありとも、止むなしと、安心の立命を考へたやうに思はれる。

明治から大正時代に入り、人心は變化した。教養の基礎が大きく變つたのである。明治の文明開化の担当者には、封建の教育の中で育つた意識人がなほ少くなかつた。往年の志士壯士は、開化の學校教育は受けてゐないが、少年の日に漢籍に聖人の學を學び、古今集を誦し、唐宋の名家の文や、唐詩楚辭の類を暗んじてゐた。維新前期の志士は漢詩を作り、幕末に近づくに従つて和歌をつくるのが、一般となる。明治の文明開化は、この身についての保守の節操によつて、逸脱から防がれた面が多いのである。当時の文壇でも、鷗外、漱石は、いづれも最新の西洋學の大家にして、なほ封建の氣質教養の濃厚な文士であつた。このことは學藝界理學界にも共通し、特に奇妙なところは基督者の英雄たちにそれを見ることである。大正時代の文壇では、文明開化の學校教育で育つた者が漸く時代の先端主導者となる。この大正時代の知

性では、一般的に前代の封建的な氣風が薄れる。後の大坂城の英雄薄田隼人の前身なる岩見重太郎傳を講談した旧時代の大眾作家たちは、重太郎が親の仇を討つといふ大目的を持つた旅の途次に、妖怪魔物と戦つてゆく物語を作つた。大正時代の知性派的作家は、重太郎が大目的の旅にして輕擧盲動の振舞と批判する。岩見重太郎は人身御供にされる少女のためには、魔物退治に赴く。決死の冒険である。しかし舊時代の大眾作家の考へでは、魔物を退治することは、英雄の必須の修行であり、それにうち勝ち得なければ英雄とならない、英雄とならねば大望は達成出来ない。かういふ論理が、その作品を貫くのである。さらに義を見てせざるは勇無き也、勇無きは英雄でない。勇とは身を殺して仁をなすことである。西遊記の法師がその旅行中に出會ふ次々の化物の話は、その出會が少し違ふやうに描かれてゐるが、一步心術に立入つて考へると、同じ形のものである。封建時代の教養の眼目は、文明開化成熟期の大正時代に入つて稀薄となるのである。學校教育の一つの成果である。國民全般の問題でなく、その時代を主導する新しい體制的な知性が、舊時の氣節から衰退するのである。元和の時、大坂城へ入つた英雄たちは、多少とも心に義を思つた人達である。冒険を生甲斐とした人にも、爽やかな何かがある。ただ利を思つて入つたのだと専らに考へるやうな者は、当節の品性卑しい者たちである。さういふ心術の者は、歴史の信實をよむことが出来ない。生成の歴史は、さういふよみ方から發動しない。歴史は未來のための創造源泉である。人が古事記をよみ、萬葉集をよむ時、その古を慕ひ、今によるこびを味ふのである。そのよるこびと、うれしさをもととしなければ、楽しいうれい學問も生れない。よるこびとうれしさを味ふことは、心を大きくし魂を太くすることである。この心と魂を大きく太くすることが、未來性の根源となる、創造生産の原

因となる。未來や創造は、人工の方法から生れるのでない。悠久の神代からうけついで生命の産びにある。教育の初心で、本の読み方を間違へてはならぬ、これは所謂創造教育の根本となる事実である。

今日の傾向の中で、古來の傳承を簡単に否定したり、淺はかな思ひ付で奇矯な解釋をして、得意となり、世間的にそれをもてはやすき風がある。これはその人のいびつな知性の満足にて、誠實の欠けた状態である。今日の輕薄功利の人心をもつて、昔の人の思ひをおしはかるやうなことは正しくない。松永貞徳は亂世の文人だつた、その戰國の虎狼の如き人心の間を生き長らへた。はかない繪草紙にすら、回向してから相對すと述懐してゐる。

古人はかりそめにも文を草し、後世に残すといふことのうへでは、誠意をもつてゐた。文人に節度があつた。普通、誰でも、神を怖れるといふことを知つてゐたのである。神佛を尊ぶことから特別の利益を得るわけではない。ただあたりまへに生命といふものを自覺し、人間の祖先を感ずることの出来る人は、神佛を尊ぶことを知つてゐる。それは現世の利得と何の關係もない心の働きである。これを良心のことと云つてもよいが、すべて今世の事理は全自然界に立つて大様に考へるべきである。現代は情報過多の時代と云はれる。情報が多いいふことは悪いことでないが、我國の報道機關では、情報が片よつてゐるといふことを、常識ある人は嘆くのである。良識が情報のうへで力弱いといふことをよく知つてゐる。この事情は我國で特別に甚しいのか、國際的にさういふ時代なのか、その點私はよく知らない。ただ云へることは、情報は多くもつことより、よく知ることが大事だといふことである。首都東京の人の中には、東京だけが意識にあつて、東京だけが日本だといふやうな錯亂に陥つてゐる人が少くない。何であれそのもの自體である人より、何かのやうな

人ばかりが多い時代である。

新しい世紀をつくるためにも、古のよきものと、今の正しい文明を後に傳へようとするのは、教育の願ひにて、人としての責務である。近來の新しい時代傾向を復古の時代と云ふ流行言もある。奇怪な表現だが、それらしい現象もある。しかしこの現象を別々の情報としてうけとるだけでは、教育上の意味は全くない。その根柢をよく知らうとすることが大事なのである。さうすることによつて、解答は出なくとも、創造につながる判断はうまれるかもしれない。世上の現象に、簡単な答への求められないのが普通だ。文明開化の始めに、封建の象徴として打ちこぼつた各地の城が再建されたのは、戦後の破壊から國土人民が少しよみがへつたといふ意識をもつた時である。經濟復興の始めだつた。それをなすに當つては、例へば觀光資源などといふ利益目的を考へたとしても、そんなことの外に形のない何かがあつたに違いないと私は思ふ。正月や七五三の神詣での賑はひにしても、戦後の現象である。わからぬものが澤山にある。わからぬままに、うすい知性解釋で、わかつたやうに通りすぎてゐる例が多い。當世風知性の作用である。昔から云ふ學者のさかしらである。過多の情報と輕薄な知性、これを複合した形で、現代風の知性といふ化物は、世界に充滿してゐる。知るといふことの意味を、三千年昔の東西の賢者たちのやうに、眞劍に考へねばならない時である。

〔筆者紹介〕 当財団理事。国学、文明評論家。主な著書、「日本の橋」(昭和10年第一回池谷信三郎賞)、「戴冠詩人の第一人者」(昭和13年北村透谷賞)、「後鳥羽院」(14年)、「萬葉集の精神」(17年)、「現代時人伝」(39年)、「山の辺の道」(48年)、「大和長谷寺」(40年)、「日本の美術史」(43年)、「日本の文学史」(47年)、「保田與重郎選集」(46年)、歌集「木丹木母集」(46年)等がある。



# 数学教育の問題点

立教大学教授 赤 攝 也

## 1. 数学と計算

数学とは計算技能のことだと思っている人が非常に多い。私は数学の教師である。そのために、これまでに、何度計算の名人だと思込まれたことか、数え切れない位である。しかし、実情を言えば、私の計算能力はきわめて低い。100g 120円の肉を450g買えばいくらになるか、私にはすぐにはどうしてもわからない。ところが、家計をあずかる女性なら、そんな計算など簡単なものである。暗算で一瞬のうちに答を出してしまう。だが私は、紙を出して実際に筆算をやって見ない限り絶対にだめなのである。それでも、数学者仲間の中ではこれで結構計算の達人な方だと思う。もっとだめな人がはるかに多いのである。数学と計算技能とは、それほどかけはなれたものだと言って良いであろう。

しかしながら、世間には、冒頭にも述べたように、数学とは計算技能のことだと思われている。これは、上述のことからもわかるようにまったくの誤解である。

では、何故そのような誤解が起こるか。私は、その最大の原因は、初等中等教育における算数・数学教育のあり方にあると思う。

現在行われている算数・数学教育は、計算技能の訓練だと言っても決して間違いではないようなものである。もちろん、算数・数学教育ではそれ以外のことも行われる。だが、計算技能の訓練に比べれば、それらは、至って影がう

すい。

このことは、計算技能の高低と、算数・数学の点数とがきわめて高い相関を示すことから明確に立証することが出来る。

最近有名なK式という算数・数学の塾のチェーンがある。ここでは、徹底的に計算技能を訓練する。私達専門家は、困ったことだと眉をひそめる。だが、注目すべきことは、それが意味で極めて大きな成功を収めているということである。すなわち、そこで訓練を受けている児童・生徒の学校での算数・数学の点数はいちじるしく向上する。それらの児童・生徒はそれによって自信をもつ。そしてそれが、他のすべての教科の成績の上昇につながって行くのである。

これは、算数・数学教育の重点が、意識するにせよしないにせよ、計算技能の訓練におかれていることを明白に物語るものであると思う。

また、最近「電卓」や「レジ」と言われるものの普及がいちじるしい。これらは、いずれ世の中を大きく変えてしまうであろうほどのすばらしい機械である。しかしながら、小学校の教育現場では、これの算数教育への影響を真剣に心配する人がある。教えることがほとんどなくなるのではないかと言うのである。これも、算数教育が計算技能の訓練に大きな比重をおいていることの一つの重要な証拠であろう。

もちろん、必要最小限度の計算技能はあたえてやらなくてはならない。どんなに電卓やレジ

が普及したところで、これを使うことのできない場面が必ずある。つまり最小限度の計算技能はどうしてもなくてはならないものである。算数・数学教育は、少なくともその程度には、この問題について責任を負わされていると言わなければならない。だが、算数・数学教育は、その他に教えなければならないもっともっと大きなものをかかえているのである。

よく、「分数の計算も出来ない大学生がいる」と言ってなげく人がある。そういう大学生がいることは事実である。だが、彼等は、基礎的な計算技能をまったく欠いているかと言えば決してそうではない。お金の勘定ぐらゐは立派にやってくる。彼等に欠けているのは「分数の計算の原理」についての理解である。これは計算技能ではない。そして、これさえあれば、彼等のもっている基礎的な計算技能で十分分数計算をこなして行くことが出来るはずなのである。にもかかわらず、現に分数計算の出来ない大学生がいるということは、算数・数学教育が計算技能の訓練にかたより、「原理」の理解その他がやらないがしろにされている何よりの証拠であらう。

上に私は、算数・数学教育は、計算技能の訓練以外にもっともっと大きな仕事をかかえていると述べた。いろいろの「数学的原理」の理解は、その「もっともっと大きな仕事」の一部分なのである。

そもそも算数・数学教育の目標は、児童・生徒に、社会人、文化人としてどうしても欠くことの出来ない数学的な素養をあたえることである。そして、数学的な素養とは、数学的な概念・原理などの知識、数学的な技能、それからいろいろの問題を数学的に考え、解決して行く態度、などの総体のことである。したがって、技能一点張りの教育は、算数・数学教育としてきわめて偏ったものだと言わなければならないであらう。

## 2. 四則応用問題

考えてみると、算数・数学教育は、上述のような点で、ここのところ、次第しだいに悪くなっているように思われる。

昔の算数の中には、「四則応用問題」という大きな領域があった。例の「鶴亀算」「旅人算」「流水算」、等々と呼ばれるものがそれである。

**問題** 鶴と亀とが合わせて16匹いる。足の総数は44本である。鶴、亀はそれぞれ何匹か。

**解答** 16匹すべてが鶴であったとすれば、足の総数は32本となるはずである。ところが問題には、足の総数は44本だと書いてある。つまり、足が(44-32)本、すなわち12本だけ足りない。ということは、亀が6匹混じっていて足を12本だけふやしていることを意味する。よって、鶴は10匹、亀は6匹である。

これは大変しゃれた考え方である。この解答の理屈がわかると、誰でも成る程と感心する。

ところが、このような考え方こそ数学的な考え方なのである。旅人算、流水算などについてもまったく同じことが言える。それらの算数的解法には、すばらしい数学的な考え方が含まれているのである。

しかしながら、このような考え方は、誰にでも「すぐに」理解できるものではない。時間さえかければ誰でもわかるものではあるけれども、個人差が非常に大きいのである。

他方、小学校で取り扱う内容は、当然中学校の入学試験に出題される。ところが、入学試験は選抜試験であるから、誰でも出来るやさしい問題では意味がない。或る程度点数に開きが出るようなものでなくては存在理由がない。

このことは、小学校の四則応用問題の扱い方に強く影響する。入学試験に出る程度の問題なら、どんなものが出ても良いように、ということで、児童達に部厚な問題集をあたえ、「しごく」ことになる。そうすると、中学校の方では、問

題のレベルを固定しておくわけにはいかない。どうしても、もう一段階上げざるを得なくなる。子供を選抜しなければならないからである。

子供が可哀そうだ。——大方の人がそう考えるようになった。ただでさえじっくり考えなければわからないものを、それこそ山ほどやらせるわけであるから、これはごく自然な感想だと言ふべきであろう。

ところが、このような感想を強力に応援する事情が他にもあった。すなわち、算数の四則応用問題は、「代数」を使えば、何ら頭を使うことなくたちまち解けてしまうのである。

上の鶴亀算の問題について言えば、次の通りである。

鶴を  $x$  匹、亀を  $y$  匹としよう。総数は16匹であるから

$$x+y=16 \quad (1)$$

他方、鶴の足は  $2x$  本、亀の足は  $4y$  本、総数は44本であるから

$$2x+4y=44 \quad (2)$$

(1)の両辺を2倍すれば

$$2x+2y=32 \quad (3)$$

(2)、(3)の辺々を引けば

$$2y=12$$

$$\therefore y=6$$

これを(1)に代入すれば

$$x+6=16$$

$$\therefore x=10$$

答 鶴10匹、亀6匹

何と簡単ではないか。

代数を使えば何でもないものを、使わないで解かせて子供の頭を痛めつける。可哀そうではないか。——これは大きな世論となった。

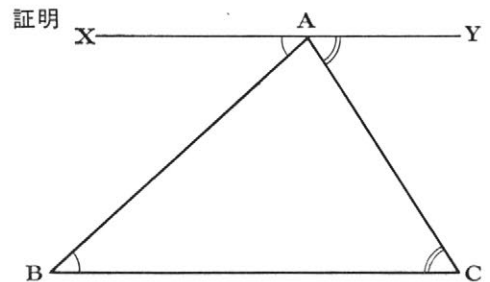
こうして、算数から次第に四則応用問題が姿を消して行くことになる。考えてみれば残念なことと言わなくてはならない。これはちょうど、飛行機で行く方がはるかに早いから、汽車

に乗るのをやめる、と言うようなものである。汽車の旅——四則応用問題の算数的解法——のもつさまざまの効用は、まったく失われてしまうこととなった。じっくり考えるかわりに計算をするというわけである。

### 3. ユークリッド幾何

昔の中等教育には、「幾何」という大きな内容があった。これが迎った運命も、算数の四則応用問題が迎った運命とまったく同じである。

**問題** 三角形の内角の和は二直角に等しいことを証明せよ。



$\triangle ABC$  の頂点  $A$  を通って底辺  $BC$  に平行な直線  $XY$  を引く。すると、 $\angle XAB$  と  $\angle ABC$  とは錯角であるから等しい：

$$\angle XAB = \angle ABC \quad (1)$$

また、 $\angle YAC$  と  $\angle ACB$  も錯角であるから等しい：

$$\angle YAC = \angle ACB \quad (2)$$

(1)、(2)の辺々を加えれば

$$\angle XAB + \angle YAC = \angle ABC + \angle ACB$$

この両辺に  $\angle BAC$  を加えれば、左辺は二直角となるから

$$\text{二直角} = \angle ABC + \angle ACB + \angle BAC$$

ゆえに、 $\triangle ABC$  の内角の和  $\angle ABC + \angle ACB + \angle BAC$  は二直角に等しい。証明終り。

すばらしい考え方である。この解答をはじめて見た人は、必ず或る種の感動を覚える。そして、大切なことは、このような考え方も数学的な考え方の一つの典型だということである。

幾何の問題には、こうした数学的な考え方を



必要とするものがきわめて多い。しかしながら、この種の考え方が出来るようになるのには、かなりの修練が必要である。たとえば上の証明では、Aを通してBCに平行な直線XYを引く、と言うことが鍵になっている。しかし、初心者には、そのような線を引くという考えは決して浮かばない。このような考えが浮かぶようになるには、かなり場数をふまなければならないのである。さらに、いかに場数をふみ、修練をつんでも、早く解けるか解けないかは「運」によって左右される。これは、すべての数学的な考え方についてまわる宿命のようなものである。

ところが、中学校で扱う内容は上級学校の入学試験に出る。これは、小学校の四則応用問題の場合と同じことである。

こうして、中学校の幾何教育は、不必要にエスカレートし、世間の非難のまともとなった。

また、四則応用問題は代数を使えば計算で解けた。ところが実は、これとまったく同じような事情が幾何にもあるのである。つまり、座標やベクトルといった知識を使えば、幾何の問題は計算だけで解けてしまうのである。

計算で解けるものを論理だけで解かせて子供の頭を痛めつける。可哀そうではないか。——こうして、中等教育から幾何が次第に姿を消して行くことになる。現在では、中学校の2年生と3年生の段階にその切れはしが残っているが、これは到底幾何とよべるような代物ではない。

これはきわめて残念なことである。四則応用問題に含まれる数学的な考え方はごく素朴なものであり、そのタイプもごく限られている。だから、これがなくなることはたしかに惜しいことではあるけれども、まだ我慢が出来る。しかし、幾何の証明には、実は、可能なあらゆるタイプの数学的な考え方が現れる。そして、初等中等教育で教える数学には、これ以外にその

ようなものは一つもないのである。したがって、幾何のない数学を教わる生徒達は、ついに「数学らしい」ものにふれずに終わってしまうことになるであろう。また、数学とは「計算」で答を出すものだという誤った印象を強くもつに至るであろう。

#### 4. 算数・数学教育の問題点

私は長い間大学で数学を教えて来た。そして、最近痛感することは、数学科の学生諸君の中に、出来る人、有望な人がめっきり少なくなったと言うことである。このような感想をもつのは決して私一人だけではない。有名大学の教授にも、そうでない大学の教授にも、同じような感想をもっている人が非常に多いのである。

数学に才能のある人の比率はそう変わらないであろう。また、そのような人のうち、数学科へ行こうと思う人の比率もそう変わらないであろう。これといった、変わる要因が見当たらないのである。

昔は、数学科を出ても、教師になるか、保険会社のアクチュアリーになるか、道はどちらかであった。しかし、今は違う。数学科の出身者には、きわめて広い門戸が開かれているのである。したがって、数学科の志望者の比率は、昔にくらべ格段に上がっていると言ってよい。だから、数学に才能ありと自負する人が数学科を敬遠するようになる理由はとくに見当たらないのである。

とすれば、数学科の学生の中に有望な人が少なくなった原因は、数学に才能ありと自負する人が本当は才能がなく、逆に本当に才能のある人がそうと自覚しないにいるからだとしか考えられない。

前にも述べたように、世の中の人達の数学に対する印象は、初等中等教育で教えられる数学によって形づくられる。ところが、初等中等教育で扱われる算数・数学は、めっきり数学らし

くなくなって来ている。したがって、世の中の人達の数学に対する印象がより偏ったものになるのは当然のことである。数学は計算技能だとする偏見は昔からあった。しかし、昔は、学校で教わる算数・数学を真面目に勉強し、理解した人は決してそうは考えなかった。だが今は、ほとんどすべての人がそう考えてもおかしくはない状況にあるのである。大学の数学科の学生に有望な人が少なくなったのは、きっとこのせいであろう。

もちろん、算数・数学教育の目標は、何も数学者を育てることではない。前にも述べたが、算数・数学教育の目標は、社会人、文化人としてどうしても必要な数学的知識・技能をあたえること、および考え方・態度を育てることである。しかし、当然のことながら、このような目標は、真に「数学らしい」ものを感得させなければ到底達成できるものではない。

私は、四則応用問題と幾何を捨てたことは、算数・数学教育界の大失敗であったと思う。

しかし、学習指導要領を変えることは、一般的に言ってなかなか難しい。上級学校の入学試

験の問題がからむとなればなおさらのことである。

だとすれば、算数・数学教育にたずさわる教師の自覚を促す以外に途はない。たとえ数学らしい教育内容は失われても、彼等に数学らしいものを伝えようという強い意志さえあれば、何とか方法はあるはずだからである。

だが、ここにも悲観的な要素がある。中学校や高等学校の数学教師はよい。大学で「数学らしい」ものにふれて来ているからである。しかし、小学校の教師、とくに短期大学出身の小学校教師は、初等中等教育における算数・数学教育以上の教育を受けていない可能性が強い。したがって、児童にあやまった観念をあたえる危険が大きいのである。

私は、上に述べたような算数・数学教育の欠陥を広く訴えると同時に、とりあえず短期大学における初等教育課程の改善に努力することが急務であると思う。

(筆者・東京教育大学教授を経て、現在、立教大学教授。当財団評議員)



# 家庭教育の問題点

上越教育大学学長 辰野千寿

家庭教育の重要性は、いつの時代にも認められているが、最近、子供の登校拒否、非行などの増加に関連して、家庭教育の重要性、その役割などが再びいろいろの立場から述べられている。もちろん、子供の問題は、家庭教育だけではなく、学校教育や社会教育とも関係しているが、子供の性格、行動の基礎をつくるのは、やはり家庭である。そこで、ここでは、家庭において考慮すべき問題点をあげてみよう。

## 1. 基本的な生活習慣の形成

教育相談などでよく経験するのは、勉強に対してやる気が起こらない、注意散漫である、生活がだらしない、などという親や本人の訴えである。このような場合、よく聞いてみると、基本的な生活習慣が身につけていないことが多い。朝起きるのも、夜寝るのも不規則であり、食事でも気ままに、好きなものだけ、好きなときに食べる、好きな遊びやテレビに熱中して、他のことを忘れるというように、気ままな生活をしていることが多い。そうすると、自分で計画を立て、それを実行するという習慣もつかない。そこで、勉強のように、つねに新しいこと、むずかしいことへと進んでいかなければならない場合には、努力しないで、あきらめてしまったり、始めても根気が続かず、あきてしまったりすることになる。

したがって、家庭のしつけでは、生活を規則

正しくさせ、わがままをなくし、苦しいこと、きらいなことでも努力するという意志の力を養うことが大事である。

## 2. 心身の健康の増進

子供にとって健康が大事だということは、よく知られている。例えば、からだが弱くて、学校に遅刻したり、欠席したりすると、頭のよい子供でも勉強が遅れる。また、胃腸や心臓の調子が悪いとか、頭や歯が痛いとかいうときには何をやる気も起こらない。

したがって、日常の生活を規則正しくさせたり、勉強の能率をあげさせたりするためには、身体的健康の維持増進をはかることが必要である。そのしつけとすれば、①規則正しい生活をする、②適度に運動をする、③栄養を十分にとる、④睡眠を十分にとる、などに注意することになる。夜ふかし、朝寝坊で、朝食もとらないで登校するようでは、運動においても学習においても、その能率はあがらない。

また、性格についてのしつけも大事である。頭はよくても、意志が弱かったり、消極的であったり、のんきすぎたり、神経質すぎたり、競争心が強すぎたりする子供は、その力を発揮できず、勉強の能率もあがらない。

そこで、子供の能力を十分に発揮させるためには、子供の性格をよい方向に変えるようにしつけることも大事である。今日、知育偏重にな

らないで、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな子供に育てることが強調されているが、この意味においても、よい性格の子供、精神的に健康な子供に育てることは、家庭のしつけとしても大事である。

そこで、性格のしつけとして、家庭で注意すべき点をあげてみよう。

(1) **自発性・自主性を伸ばすこと。**最近、何事に対しても、やる気のない子供、意欲のない子供、無気力な子供がふえたといわれる。特に、親の悩みは、「勉強する気がない」ということである。そこで、自発性、自主性を伸ばすとか、自主的学習態度を身につけさせるとかいったことが強調されているが、そのためには、日常生活の中で、親が過保護にならず、身のまわりのことをできるだけ自分でさせることが大事である。そして、子供の能力、性格を考え、それに応じたことをさせ、適度に成功感、満足感を味わわせることが必要である。

(2) **注意力を伸ばすこと。**注意の集中ができるかどうかは、子供の性格と関係する。おちつきのない子供は、あちらこちらに気が散るし、神経質の子供は、ちょっとしたことにも気を使い、勉強にも注意が向かなくなる。このような子供には、ふだんからおちついた生活をさせ、またいやなことでもがまんするような生活をさせて、注意を集中できる性格に変えていくことが必要である。

(3) **根気強さを養うこと。**自分のやり始めたことは最後までやりぬく、いやなこと、むずかしいことでも、ねばり強く努力するといった根気強さは、子供にとって大事な性格である。これは、学習にとっても大事である。

これを養うためには、やはり、日常生活を規則正しくすることが必要である。根気のない子供は、わがままなところがある。そこで、規則正しい生活をさせることによって、わがまますを押さえる習慣をつけようにする。起床、登校、

食事、入浴、就寝など、予定どおり、きちんとさせる、いやなこと、苦しいことでも、また単調なことでも、がまんしてやるようにしつける。それによって意志の力も養われる。

(4) **社会性を養うこと。**幼稚園や学校に行くようになると、子供の生活は、学級という集団の中で行われる。そこには、教師と子供、子供と子供といった人間関係が生じ、また、学級のふんいきもできる。社会性のある子供は、このような集団生活の中にうまく適応し、学習の能率をあげることもできるが、社会性の発達していない子供は、不適応をおこし、学習もうまくいかなくなる。

社会性を育てるには、ひとりひとりの子供の生活態度、性格などを理解し、利己的にならず、相手の立場を考えて行動するようにしむけることが必要である。

### 3. 学習習慣の形成

今日、進学問題に関連して、勉強が過熱状態になり、子供の発達に悪い影響を及ぼすというところから、その反動として、家庭学習を軽視し、家庭で勉強するのを避けるような傾向もみられる。確かに何事でもゆきすぎは問題であるが、今日勉強しすぎているのは、ほんとうに何人いるであろうか。学校から帰ってから塾にしている、家庭教師について勉強しているなどが勉強の過熱ぶりを示す例としてあげられているが、それがほんとうに子供に苦痛になっているであろうか。むしろ、塾にいけば、友だちもいるということで、塾を楽しみにしている子供もいる。したがって、塾や家庭教師などの問題だけみて、勉強が過重になるので、家では勉強しなくてよいなどというのは、大部分の子供にはあてはまらない。

むしろ、大部分の親や子供が問題にしているのは、勉強しようと思ってもすぐあきてしまう、やる気が起こらない、勉強のしかたがわか

らないといったことである。したがって、むしろ、勉強のじょうずなしかたを習慣づけることが子供にとって大事であり、そのほうが子供にプラスになるであろう。

そこで、なるべく早めに、次のような習慣を形成することを考えるべきであろう。

(1) **自発的・自主的学習** 自分から進んで、人に頼らないで勉強するようにしむける。そのためには、次の点に気をつけるのがよい。

① **具体的目標を立てる。**小学生では、「毎日1時間ずつ勉強する」「毎日5ページずつ本を読む」といった身近な目標を立て、中学生では、高校進学を目標とするなどによって勉強の意欲が高まる。何でもよいから、手近なところに目標をおき、それに向かって努力するのである。

② **好きな教科から始める。**家庭で自分で勉強するときには好きな教科、得意な教科の予習、復習から始める。気分がのってきたところで、きれいな教科、不得意な教科の勉強に進むがよい。

③ **結果を知る。**自分がどのくらいできるようになったか、あるいは、どのくらい学習したかを知ることは、勉強の意欲を高めるのに役立つ。自分で採点したり、勉強時間をグラフに表したりするのも効果がある。しかし、結果が期待はずれになると、逆にやる気をなくすこともあるので、初めにあまり大きい期待を持たないようにすることも必要である。

④ **競争する。**友人と競争することによって自発的に勉強することもある。しかし、相手の力が自分よりかけ離れてすぐれていると、いつも失敗感ばかり持つことになるので、自分と力が同じくらいの者を目標とするのがよい。

また、友人との競争だけでなく、自分の前の記録を破るように努力するのもよい方法である。

(2) **計画的学習** 勉強の能率をあげるためには、自分で勉強の計画を立て、それを実行することが大事である。

家庭で勉強するとき、気の向くままに勉強し

ていると、好きな教科だけ勉強したり、テレビをいつまでも見たりして、勉強の成果があがらないものである。家庭学習においては、毎日、同じ場所で、同じ時間に勉強することが大事である。自分のできる範囲の計画を立て、それをきちんと守るように努力している間に、計画的に勉強する習慣が身につく。これは、低学年から身につけさせたい習慣である。

なお、計画を実行するには、病気でもない限り、毎日勉強すること、予定した時間どおりに勉強すること、机に向かったならば、すぐ勉強にとりかかると、などは大事なことである。

(3) **能率的勉強法** 勉強においては、知能が重要な働きをする。勉強の習慣をつけるときには、頭の働きをよくするように習慣をつけることが大事である。つまり、注意を集中して、全力を出して勉強することはもちろん必要であるが、覚え方や考え方を工夫したり、適度に休養したりすることも必要である。近年、学び方の学習ということが強調されているが、じょうずな学び方を身につけることは、子供の将来に対しても役に立つ。

(4) **学習環境の生かし方** 家庭で勉強するにせよ、学校で勉強するにせよ、その環境を積極的に活用する習慣をつけることも大事である。子供は、勉強の成果があがらず、成績がよくならないと、すぐ、「環境が悪いからだ」といいがちである。確かに、環境が悪いと、勉強の能率もあがりにくいだが、しかし、与えられた環境をよりよく整備し、それをできるだけ活用するような積極的な態度をもつようにしむけることも大事である。

家庭における勉強の環境とすれば、勉強部屋の位置や広さ、机の置き方、明かりのとり方、温度、湿度、装飾、騒音などの物的環境と、親の教育に対する関心、態度、家庭のふんいきなどの心理的環境とが考えられる。

親としては、これらの環境をよりよく改善す

るように努めることは当然であるが、子供に対しても、家庭に対して積極的、好意的態度をもつように指導することが必要である。それには、わがままを押さえ、相手の立場をよく考えて生活するようにしつけることが大事である。自己中心的で、自分の考えや立場ばかり主張していたのでは、家庭環境に不満を抱くだけで、勉強には役立たない。

#### 4. 教育についての考え方

今日の教育では、子供の能力、適性を考え、それにふさわしい教育をし、それぞれの子供のもつ可能性を最大限に伸ばすことを目指している。この考え方に対してはだれも異論はないが、子供の能力・適性についての考え方にはいろいろの立場があり、それに応じて教育に対する考え方にも違いが出てくる。

例えば、子供の能力や適性の発達さらには行動の発達は、遺伝的に規定されており、子供の内からひとりでに現れるものであり、環境とか教育とかいったものは、発達に対し、わずかな影響しか与えないという考え方がある。

この考え方に立つと、親や教師は、庭師の役割を果たすことになり、種をまき、育てることになる。究極の結果（生産物）は、子供の内から現れるのを待つことになる。教育では自由教育を考え、子供は学習しようとする生得的欲求をもっているので、子供が学習に興味をもつときだけ学習させて、学習を強制しないときに、学習の能率はあがると主張する。新しいことを学習させるときには、その学習に対し適切な成熟状態に到達するのを待つことが必要で、その時期は経験を豊かにすることによって促進することはできないと考える。

これに対して、もう一方には、子供の発達は、子供の内からひとりでに現れるものではなく、環境の影響をうけて現れると考え、学習が発達を規定すると考える立場がある。この立場

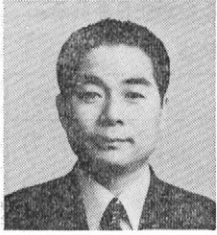
では、親や教師は、陶工の役割を果たし、陶工が粘土から一定の考えに基づいて陶器を作ると同じように、子供に計画的に学習経験を与えて、究極の結果（生産物）を積極的に作り出すことになる。つまり、子供は学習に対する生得的な可能性をもっているが、しかし、適切な経験が与えられたときだけに学習が起これと考え、計画化された教育を考える。学習に対する準備も、自然には起これないで、子供がそれまでに何を学習したかにかかっている。したがって、学習や練習によって、学習の時期を早めることもできると考える。もちろん、たいていの教育者は、両者の結びつき、あるいは中間を考えるが、気持の上ではどちらかに傾いている。

例えば、幼児期には、読み・書き・計算の教育は無理であり、時期がくるまでは教えない方がよいというのは、前者の立場に近い。また、子供の能力には限界があるから、高望みしてもだめだと考えるのは、この立場に近い。

これに対して、子供の無限の可能性を信じ、教育によって子供はどこまでも伸びると考え、幼児期から才能教育、英才教育をしたり、幼児教室、体操教室などに通わせたりするのは、後者の立場に近い。また、幼児期からよい幼稚園、よい小学校に入れようとするのも、この立場である。しかも、子供の生得的な能力差を認めず、どんな子供でも教育によって同じように伸びると考えるようになると、能力差、個人差に応じた教育を認めないことになる。

親とすれば、極端な考えに立たないことが大事である。子供の発達は、やはり、遺伝と環境（教育）の両方の影響をうけるので、それぞれの子供の現在の能力、適性を考えながら、それぞれの子供に適した教育を考えることが必要である。つまり、平凡な表現ではあるが、個性に応じた指導をし、その個性を最大限に伸ばすことを目指して努力することが大事である。

（当財団理事）



# 育児としつけに関する意識調査

—東京都内の一私立幼稚園における—

宝仙学園短期大学教授 岩野 武志

## 目次

### はじめに

#### I 調査方法

1. 調査地域
2. 調査対象
3. 調査期間
4. 調査方法
5. 回収標本数

#### II 調査回答者の諸属性

1. 子どもの年齢と性
2. 母親の年齢×母親の学歴
3. 父親の職業
4. 父親の学歴×母親の学歴

#### III 調査結果

1. 母親の職業の有無  
(1) 母親の職業の有無と学歴

- (2) 母親の職業の内容
2. 乳児栄養
3. 食事習慣
  - (1) 食事時間
    - ① 朝食
    - ② 夕食
  - (2) 食事(夕食)はだれといっしょか
  - (3) 食事時のテレビの視聴
4. 就学前教育(保育)に対する考え方
  - (1) 幼稚園・保育所の必要性
  - (2) 幼稚園(保育所)に期待するもの
5. 子どもの性格・行動についての評価と期待
  - (1) 現在備わっている性質
  - (2) 今後身につけてもらいたい性質
6. 生活行事の実施状況
  - (1) 各項目別の実施状況
  - (2) 母親の学歴との関連において
  - (3) 年齢との関連において

### まとめ

### はじめに

昭和54年度、財団法人日本教材文化研究財団は、家庭教育に関する基礎的調査研究を進めるための必要な基礎資料を得るために、「育児としつけに関する意識調査」を実施した。この調査は、近畿圏の市町村を調査対象地域に指定し、住民台帳よりの無作為抽出によるサンプリングを行い、15歳以下の子どもを、少なくとも一人もっている母親を対象として実施された。この結果は、近畿圏という地域の限定に対する若干の問題点はあるにしても、サンプリング、調査方法等は極めて適正に行われているので、相当の普遍性をもつものとして評価される。

筆者は、これと同内容の調査を同じ調査用紙を使って東京都内の一私立幼稚園を対象にして実施した。上記の調査に対して普遍性には欠けるが、特定の条件下

にある対象に対する調査結果という点である意味をもつものと思われる。以下、その概要について報告したい。ただし、この調査用紙は対象児の年齢が0～15歳であり、それに基づいて作成されたものであるので、3～6歳児を対象とする本調査には年齢的に不適当な質問項目があった。そこでここでは、適当な質問項目の幾つかについて集計考察することとする。

#### I 調査の方法

1. 調査地域 東京都中野区(ほぼ住宅地、一部商業地)
2. 調査対象 東京都内の一私立短期大学(保育科を有する)付属の幼稚園の年少組(3, 4歳)、年中組(4, 5歳)、及び年長組(5, 6歳)の園児の母親。
3. 調査期間 昭和54年9月10日から9月30日まで(これは上記の調査の期間と同じ)。調査時点が9

月であるので、いずれもその学年のほぼ半ばを過ぎた後の子どもの母親が対象となった。

4. 調査方法 調査の趣旨についてそれを印刷物にして、調査票と共に、園児（母親）に持ち帰らせて母親自身に記入してもらい、園児より担任に提出、それを回収した。すべて無記名回答である。

5. 回収標本数 在籍者数 230 に対し、回収標本数 199。回収率は 86.5% であった。

## II 調査回答者の諸属性

### 1. 子どもの年齢と性

幼稚園の在籍者数のうち、男子がやや多いのでそれが反映している（表 1）。

表 1 子どもの年齢と性

| 年齢<br>性別 | 3 歳         | 4 歳          | 5 歳          | 6 歳          | 計<br>(%)      |
|----------|-------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| 男        | 8           | 26           | 47           | 25           | 106<br>(53.3) |
| 女        | 7           | 24           | 40           | 22           | 93<br>(46.7)  |
| 計<br>(%) | 15<br>(7.5) | 50<br>(25.1) | 87<br>(43.8) | 47<br>(23.6) | 199<br>(100)  |

### 2. 母親の年齢×母親の学歴

母親の年齢×学歴については表 2 のようになっている。

表 2 母親の年齢×母親の学歴

| 年代<br>学歴 | 20代         | 30代          | 40代         | その他         | 計<br>(%)     |
|----------|-------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 中        | 0           | 1<br>(0.6)   | 0           | 0           | 1<br>(0.5)   |
| 高        | 6<br>(28.6) | 48<br>(31.1) | 9<br>(60.6) | 2<br>(22.1) | 65<br>(32.7) |
| 短大       | 8<br>(38.0) | 47<br>(30.5) | 0           | 1<br>(11.1) | 56<br>(28.0) |
| 大学       | 5<br>(23.8) | 51<br>(33.1) | 5<br>(44.4) | 4<br>(44.4) | 65<br>(32.7) |
| その他      | 2<br>(9.5)  | 7<br>(4.5)   | 1<br>(6.7)  | 2<br>(22.2) | 12<br>(6.0)  |
| 計<br>(%) | 21<br>(100) | 154<br>(100) | 15<br>(100) | 9<br>(100)  | 199<br>(100) |
| %        | 10.6        | 77.4         | 7.6         | 4.5         | 100          |

年齢分布は、30代が全体の 8 割近くを占めている。

学歴については、高校、短大、大学卒がほとんど同じでそれぞれ 3 割前後である。また、年齢、学歴をクロスしてみると、20代では短大卒がとびぬけて多く、高校、大学の順であるが、30代においては、高校、短大、大学卒がそれぞれ 3 割を占めている点、40代では高校卒が 6 割、短大卒 0、大学卒 3 割という点が対照的である。全体的に高学歴といえる。

### 3. 父親の職業

父親の職業は表 3 のとおりである。専門・自由業・管理的職業が約 4 割を占めているのが注目される。

表 3 父親の職業

| 職 種                         | 人 (%)     |
|-----------------------------|-----------|
| 1. 専門・自由業, 管理的職業            | 79 (39.7) |
| 2. 一般公務員, 事務従事者, 教員, 販売サービス | 44 (22.1) |
| 3. 自営業                      | 49 (24.6) |
| 4. 技師等                      | 5 (2.5)   |
| 5. 技能業                      | 1 (0.5)   |
| 6. その他・不明                   | 21 (10.6) |
| 計                           | 199 (100) |

### 4. 父親の学歴×母親の学歴

まず、父親の学歴で大学卒が 7 割強いることが注目される。次に両者をクロスしてみると、(表 4) 父母が共に大学卒が 30%、大学・短大卒が 26%、大学、高校卒が 15%、共に高校卒が 13% の順になっており、両親が共に大学・短大卒以上が 55% を越している点が特色といえよう。

表 4 父親の学歴×母親の学歴

| 父<br>母   | 中          | 高            | 短大          | 大学            | その他        | 計<br>(%)     |
|----------|------------|--------------|-------------|---------------|------------|--------------|
| 1. 中     | 1<br>(0.5) | 0            | 0           | 0             | 0          | 1<br>(0.5)   |
| 2. 高     | 0          | 26<br>(13.1) | 9<br>(4.5)  | 29<br>(14.6)  | 1<br>(0.5) | 65<br>(32.7) |
| 3. 短大    | 0          | 1<br>(0.5)   | 2<br>(2.0)  | 52<br>(26.1)  | 1<br>(0.5) | 56<br>(28.1) |
| 4. 大学    | 0          | 4<br>(2.0)   | 1<br>(0.5)  | 60<br>(30.1)  | 0          | 65<br>(32.7) |
| 5. その他   | 0          | 1<br>(0.5)   | 1<br>(0.5)  | 5<br>(2.5)    | 5<br>(2.5) | 12<br>(6.0)  |
| 計<br>(%) | 1<br>(0.5) | 32<br>(16.1) | 13<br>(6.5) | 146<br>(73.4) | 7<br>(3.5) | 199<br>(100) |

## III 調査結果

### 1. 母親の職業の有無

#### (1) 母親の職業の有無と学歴

「あなたは現在、家事以外のなんらかの収入を得るような仕事についていますか」という質問に対して、「持っている」と答えたひとは全体の 31%。高校卒の 42%、短大卒の 20%、大学卒の 22% が有職者である（表 5）。

#### (2) 母親の職業の内容

「家で家業」「家で内職」を合わせると、有職者の 6 割が家の中で育児に携わりながらの仕事に従事して





ここで注目されるのは、多くの家庭で「父親ぬき」の食事であるという点で、それが全家庭の5割強に及んでいる(表11)。しかし、母親の学歴の上からみると、高学歴になるほどその傾向は強まっており、その

表 11 夕食はだれといっしょか

| 内容              | 学歴         |              |              |              |             | 計<br>(%)      |
|-----------------|------------|--------------|--------------|--------------|-------------|---------------|
|                 | 中          | 高            | 短大           | 大学           | その他         |               |
| 1. 全員いっしょ       | 1<br>(100) | 31<br>(47.6) | 19<br>(33.9) | 22<br>(33.8) | 3<br>(25.0) | 76<br>(38.1)  |
| 2. 父親ぬき         |            | 30<br>(46.1) | 31<br>(55.3) | 38<br>(58.4) | 8<br>(66.6) | 107<br>(53.7) |
| 3. 母親ぬき         |            | 0            | 0            | 0            | 0           | 0             |
| 4. 両親以外の<br>の人と |            | 0            | 2<br>(3.5)   | 0            | 1<br>(8.3)  | 3<br>(1.5)    |
| 5. 子どもたち<br>だけ  |            | 2<br>(3.0)   | 4<br>(7.1)   | 5<br>(7.6)   | 0           | 11<br>(5.5)   |
| 6. 不明           |            | 2<br>(3.0)   | 0            | 0            | 0           | 2<br>(1.0)    |
| 計<br>(%)        | 1<br>(100) | 65<br>(100)  | 56<br>(100)  | 65<br>(100)  | 12<br>(100) | 199<br>(100)  |

父親の忙しさが想像される。また、「全員いっしょ」は全体の4割弱であるが、高校卒では5割弱、短大・大学卒はほとんど同じ3割強で大きな差がでている。さらに、「両親以外の人と」「子どもたちだけ」が高校卒3%、短大卒11%、大学卒8%という数字を示しており、「父親ぬき」を含めると、高校卒5割、短大卒・大学卒共に6割5分を越えており、子どもの人格形成上の影響を見逃すことはできない。

(3) 食事時のテレビの視聴

「いつもつけている」約2割5分、「ときどきつけている」約3割5分、「ほとんどつけていない」約4割で、テレビをみながら食事をしている家庭はどちらかというとな少ない。母親の学歴別の比較では、高校・短大卒ではほとんど変わらないが、大学卒はきわだってはっきりしており、テレビをつけない方に大きく傾いている。

表 12 食事時のテレビの視聴

| 内容        | 学歴         |              |              |              |             | 計<br>(%)     |
|-----------|------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|
|           | 中          | 高            | 短大           | 大学           | その他         |              |
| 1. つけている  | 0          | 17<br>(26.1) | 14<br>(25.0) | 11<br>(16.9) | 7<br>(58.3) | 49<br>(24.6) |
| 2. ときどき   | 1<br>(100) | 26<br>(41.0) | 23<br>(41.0) | 17<br>(26.1) | 2<br>(16.6) | 69<br>(34.7) |
| 3. つけていない | 0          | 22<br>(33.9) | 19<br>(33.9) | 37<br>(56.9) | 3<br>(25.0) | 81<br>(40.7) |
| 計         | 1<br>(100) | 65<br>(100)  | 56<br>(100)  | 65<br>(100)  | 12<br>(100) | 199<br>(100) |

4. 就学前教育(保育)に対する考え方

(1) 幼稚園・保育所の必要性

「ぜひとも必要」が約6割、「どちらかといえば必

要」が3割5分を示し、ほとんどが就学前教育(保育)の必要性を認めている。母親の学歴からみると、

表 13 幼稚園・保育所の必要性

| 内容                | 学歴         |              |              |              |             | 計<br>(%)      |
|-------------------|------------|--------------|--------------|--------------|-------------|---------------|
|                   | 中          | 高            | 短大           | 大学           | その他         |               |
| 1. 必要             | 0          | 41<br>(63.0) | 41<br>(73.2) | 34<br>(52.3) | 5<br>(41.7) | 121<br>(60.8) |
| 2. どちらかとい<br>えば必要 | 0          | 23<br>(35.3) | 13<br>(23.2) | 30<br>(46.1) | 5<br>(41.7) | 71<br>(35.7)  |
| 3. 必要ない           | 0          | 0            | 0            | 0            | 1<br>(8.3)  | 1<br>(0.5)    |
| 4. まったく必<br>要ない   | 0          | 0            | 0            | 0            | 0           | 0             |
| 5. 不明             | 1<br>(100) | 1<br>(1.5)   | 2<br>(3.6)   | 1<br>(1.5)   | 1<br>(8.3)  | 6<br>(3.0)    |
| 計<br>(%)          | 1<br>(100) | 65<br>(100)  | 56<br>(100)  | 65<br>(100)  | 12<br>(100) | 199<br>(100)  |

その必要性についての率には差がないが、その程度の問題になるとかなりの違いがみられる。すなわち、「ぜひ必要」が高校卒63%、短大卒73%、大学卒52%で、「どちらかといえば必要」が高校卒で35%、短大卒23%、大学卒42%で短大卒と大学卒とはその必要性の程度において大きな意義の差がみられる(表13)。

(2) 幼稚園(保育所)に期待するもの

(1)で「ぜひとも必要」「どちらかといえば必要」と答えたひとに、つぎにあげたようなことがらに関して、どの程度幼稚園、保育所に期待するかをきいた。内容は、(ア)文字や計算をおぼえさせること、(イ)集団生活になれさせること、(ウ)ことばづかいをよくすること、(エ)自主性や積極性などの行動面の向上である。「大いに期待する」「まあまあ期待する」としたものを集計したものが次の表14である。

「集団生活」「自主性・積極性」の集団生活への適応や性格・行動面の向上を期待する声が圧倒的でほとんど100%に近い。「ことば」は4割弱、「文字・計算」は2割強にすぎない。ただし学歴別にみると「文字・

表 14 幼稚園(保育所)に期待するもの

| 内容             | 学歴     |              |              |              |              | 計<br>(%)      |
|----------------|--------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
|                | 中      | 高            | 短大           | 大学           | その他          |               |
| ア. 文字・計算       | 0      | 14<br>(21.9) | 22<br>(40.7) | 7<br>(10.9)  | 3<br>(30.0)  | 46<br>(24.0)  |
| イ. 集団生活        | 0      | 63<br>(98.4) | 54<br>(100)  | 64<br>(100)  | 10<br>(100)  | 191<br>(99.5) |
| ウ. ことばづ<br>かい  | 0      | 27<br>(42.2) | 19<br>(35.2) | 23<br>(35.9) | 5<br>(50.0)  | 74<br>(38.5)  |
| エ. 自主性・<br>積極性 | 0      | 61<br>(95.3) | 54<br>(100)  | 61<br>(95.3) | 10<br>(100)  | 186<br>(96.9) |
| 実人数<br>(平均%)   | 0<br>— | 64<br>(64.5) | 54<br>(69.0) | 64<br>(60.5) | 10<br>(70.0) | —<br>(64.7)   |

計算」においては短大卒が40%、大学卒が10%と極めて対照的である。保育内容の期待度の%の平均値を比べても、高校卒65%、短大卒69%、大学卒61%で、短大卒と大学卒の期待度の違いが著しい。この結果は、大学卒の母親が家庭で子どもに準備ができるためなのか、この年齢における教育（保育）内容にこのことが不適當、あるいは最優先すべきものではないと考えているのか、どちらなのであろうか。

### 5. 子どもの性格・行動についての評価と期待

#### (1) 現在備わっている性質

現在子どもに備わっていると思われる性質についての母親の評価は表15のような結果になっている。

表 15 現在備わっている性質

| 性質               | 学歴           |              |              |             | 計<br>(%)     |
|------------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|
|                  | 高            | 短大           | 大学           | その他         |              |
| 1. 自分の主張を押しとおす強さ | 26<br>(40.0) | 26<br>(46.4) | 25<br>(38.4) | 2<br>(16.6) | 79<br>(39.7) |
| 2. 親への思いやり       | 24<br>(37.0) | 27<br>(48.2) | 27<br>(41.5) | 5<br>(41.7) | 83<br>(41.7) |
| 3. 弱い者に対する思いやり   | 29<br>(44.6) | 22<br>(39.2) | 24<br>(36.9) | 5<br>(41.7) | 80<br>(40.2) |
| 4. 思慮深い慎重さ       | 8<br>(12.3)  | 15<br>(26.7) | 10<br>(15.3) | 2<br>(16.6) | 35<br>(17.6) |
| 5. がまん強さ         | 19<br>(29.2) | 18<br>(32.1) | 16<br>(24.6) | 5<br>(41.7) | 58<br>(29.1) |
| 6. 男（女）の子らしい態度   | 7<br>(10.7)  | 9<br>(16.0)  | 8<br>(12.3)  | 4<br>(33.3) | 28<br>(14.1) |
| 7. 他人との協調性       | 20<br>(30.7) | 17<br>(30.3) | 18<br>(27.7) | 2<br>(16.6) | 57<br>(28.6) |
| 8. ユーモア          | 19<br>(29.2) | 19<br>(34.0) | 21<br>(32.3) | 4<br>(33.3) | 63<br>(31.7) |
| 9. 自主性や独立性       | 16<br>(24.6) | 12<br>(21.4) | 17<br>(26.1) | 1<br>(8.3)  | 46<br>(23.1) |
| 10. てきぱきした行動力    | 10<br>(15.3) | 9<br>(16.0)  | 10<br>(15.3) | 2<br>(16.6) | 31<br>(15.6) |
| 実人数<br>(平均%)     | 65<br>(27.4) | 56<br>(31.0) | 65<br>(27.0) | 12<br>—     | 198<br>—     |

「弱い者に対する思いやり」「親への思いやり」「自分を押し通す強さ」などは比較的高く評価されている項目であるのに対し、「男（女）の子らしい態度」「てきぱきした態度」「思慮深い慎重さ」などは低く評価されている項目である。つまり、情緒的側面や人間関係に対する内面性については一応の評価をしているが、実際の行動面では不備な面が多いというのが一般的な母親の受けとめ方ではなかろうか。しかし、それらも発達段階からいって、必ずしも不自然なものではなかろう。10項目の%の平均点を母親の学歴によって検討すると高校卒27%、短大卒31%、大学卒27%と、短大卒の母親はその子どもに現在備わっている性質に

ついて高い評価をしているが、大学卒はかなり下回っている。各項目別にみても、短大卒は、1, 2, 4, 5, 6, 8の6項目において他より高い評価をしている。しかし、9の「自主性や独立性」についてはただ一つ一番低い評価をしていることが注意をひく。

大学卒においては、「がまん強さ」においての評価が他より極めて低い。「弱い者に対する思いやり」は学歴が高くなるにつれて、%は下がっている。これは、親の生き方と関連があるのであろうか。

#### (2) 今後身につけてもらいたい性質

現在に対する不満が、将来への期待となってあらわれているのが「てきぱきした行動」で、現在備わっていないという点ではそれほど低いものでないにもか

表 16 今後身につけてもらいたい性質

| 性質               | 学歴           |              |              |             | 計<br>(%)     |
|------------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|
|                  | 高            | 短大           | 大学           | その他         |              |
| 1. 自分の主張を押しとおす強さ | 15<br>(23.1) | 7<br>(12.5)  | 18<br>(27.7) | 4<br>(33.3) | 44<br>(22.1) |
| 2. 親への思いやり       | 2<br>(3.1)   | 4<br>(7.1)   | 4<br>(6.2)   | 2<br>(16.6) | 12<br>(6.0)  |
| 3. 弱い者に対する思いやり   | 19<br>(29.0) | 21<br>(37.5) | 24<br>(36.9) | 3<br>(25.0) | 67<br>(33.6) |
| 4. 思慮深い慎重さ       | 21<br>(32.0) | 21<br>(37.5) | 15<br>(23.0) | 2<br>(16.6) | 59<br>(29.6) |
| 5. がまん強さ         | 30<br>(46.0) | 23<br>(41.1) | 25<br>(38.5) | 4<br>(33.3) | 82<br>(41.2) |
| 6. 男（女）の子らしい態度   | 25<br>(38.0) | 23<br>(41.1) | 11<br>(16.9) | 4<br>(33.3) | 63<br>(31.6) |
| 7. 他人との協調性       | 22<br>(33.8) | 21<br>(37.5) | 22<br>(33.8) | 5<br>(41.6) | 70<br>(35.1) |
| 8. ユーモア          | 11<br>(17.0) | 16<br>(28.6) | 8<br>(12.3)  | 2<br>(16.6) | 37<br>(18.5) |
| 9. 自主性や独立性       | 33<br>(50.8) | 24<br>(42.6) | 34<br>(52.3) | 5<br>(41.6) | 96<br>(48.2) |
| 10. てきぱきした行動力    | 31<br>(47.7) | 32<br>(57.1) | 30<br>(46.2) | 5<br>(41.6) | 98<br>(49.2) |
| 実人数<br>(平均%)     | 65<br>(32.1) | 56<br>(34.3) | 65<br>(29.4) | 12<br>—     | 198<br>—     |

わらずあげられているのが「自主性や独立性」「がまん強さ」である。これらは将来にわたって大切なものとして認識されなおいっそう身につけてもらいたいという願いのあらわれであろう。その点でいえば、「親への思いやり」は現在ある程度（4割）備わっているとした母親が多いが、今後身につけてもらいたいとした母親が極端に低い点が注目される。

母親の学歴による10項目の%の平均点をみると、高校卒32%、短大卒34%、大学卒29%で、今後への期待が相対的に高いのが短大卒、大学卒が一番低い。

短大卒は「思慮深い慎重さ」「てきぱきした行動力」において高い%を示し、「自分の主張を押し通す強さ」「自主性や独立性」において低い%をマークしている

のが注目される。

大学卒は「自主性や独立性」に高い期待を示し、「男（女）の子らしい態度」「ユーモア」については低い期待に終わっている。「男……」については現在ではそれほどの重要性をおいていないのか、あるいは将来にわたってもそうなのかは不明である。「ユーモア」についても同様である。

「がまん強さ」については、学歴が高くなるにしたがい、その％は落ちていっている。

(1)・(2)を大ざっぱに比較したのが表17である。

表 17 (1)・(2)の比較

|                         | 学 歴  |      |      |
|-------------------------|------|------|------|
|                         | 高    | 短大   | 大学   |
| (1) 現在備わっている性質10項の平均%   | 27.4 | 31.0 | 27.0 |
| (2) 今後身につけてもらいたい10項の平均% | 32.1 | 34.3 | 29.4 |

短大卒は(1)においては高い評価をし、(2)でも高い期待度を示している。大学卒は(1)においては低い評価をし、(2)でも低い期待度を示している。高校卒はその中間である。(1)において、子どもの実態がそのままあらわれているのか、親の見方の甘さ辛さによるものなのか、また、(2)においては発達段階をおさえての数字なのか、母親の意欲を示す数字なのか、検討を要する問題であろう。

## 6. 生活行事の実施状況

伝統的に家庭で行われてきた年中行事や通過儀式が、現代の家庭でどの程度行われているかを示したのが表18である。

これらの伝統的な生活行事に加えて、現在では多くの家庭で「誕生日のお祝い」や「クリスマスのお祝い」が行われているのでこれらもその中に加えた。

今回の調査では、家庭の宗教的ふんいきや情操教育の現状を、生活行事の実施状況の面からとらえようとした。一般的に、日常生活に密着した一定の宗教をもたないわが国では、家庭や地域のなかで伝承されてきた、さまざまな年中行事を通じて、子どもたちの宗教教育や情操教育が行われてきた。今日では、おけいこごとなどを通して、情操教育を行っているという意識が一般に多くなっていると思われるが、感性や精神の豊かさは、幼時からの日常の家庭のふんいきや、成長の筋目ともいえる通過儀式や、四季の節目や、宗教的な意味あいを含んだ、日々に行われる年中行事を行うことによって、培われていくものであろう。それは即座にできるものではなく、長い年月をかけて醸成されていくような性質のものであろう。感受性の強い幼児期に、このような生活体験をするか否かは、その子ども

表 18 生活行事の実施状況（「いつもする」）

| 行 事                 | 学 歴           |              |              |               |               |
|---------------------|---------------|--------------|--------------|---------------|---------------|
|                     | 高             | 短大           | 大学           | その他           | 計<br>(%)      |
| 1. 七夕               | 39<br>(60.0)  | 31<br>(55.4) | 39<br>(60.0) | 9<br>(75.0)   | 118<br>(59.3) |
| 2. 節分               | 57<br>(87.7)  | 50<br>(89.4) | 55<br>(84.6) | 8<br>(66.7)   | 170<br>(85.4) |
| 3. お盆               | 35<br>(53.8)  | 37<br>(66.1) | 31<br>(47.7) | 6<br>(50.0)   | 109<br>(54.8) |
| 4. はかまいり            | 41<br>(63.0)  | 33<br>(58.9) | 33<br>(50.8) | 7<br>(58.3)   | 114<br>(57.3) |
| 5. 神棚や仏壇をおがませる      | 26<br>(40.0)  | 25<br>(44.6) | 18<br>(27.7) | 4<br>(33.3)   | 73<br>(36.7)  |
| 6. お祭               | 57<br>(87.7)  | 52<br>(92.9) | 43<br>(66.2) | 10<br>(83.3)  | 162<br>(81.4) |
| 7. クリスマス            | 57<br>(87.7)  | 52<br>(92.9) | 59<br>(90.8) | 11<br>(91.7)  | 179<br>(89.9) |
| 8. 誕生日              | 65<br>(100.0) | 55<br>(98.2) | 63<br>(96.9) | 12<br>(100.0) | 195<br>(98.0) |
| 9. ひなまつり            | 43<br>(66.2)  | 41<br>(73.2) | 42<br>(64.9) | 9<br>(75.0)   | 135<br>(67.8) |
| 10. こいのぼり           | 35<br>(53.2)  | 29<br>(51.8) | 24<br>(36.9) | 6<br>(50.0)   | 94<br>(47.2)  |
| 11. 教会・神社・お寺に行く     | 9<br>(13.8)   | 9<br>(16.1)  | 12<br>(18.5) | 1<br>(8.3)    | 31<br>(15.6)  |
| 12. 門松              | 40<br>(61.5)  | 32<br>(57.1) | 33<br>(50.8) | 9<br>(75.0)   | 114<br>(57.3) |
| 13. お月見             | 18<br>(27.7)  | 16<br>(28.6) | 21<br>(32.3) | 5<br>(41.7)   | 60<br>(30.2)  |
| 14. 七五三             | 61<br>(93.8)  | 53<br>(94.6) | 58<br>(89.2) | 12<br>(100.0) | 184<br>(92.5) |
| 15. 国旗              | 2<br>(3.1)    | 8<br>(14.3)  | 4<br>(6.2)   | 1<br>(8.3)    | 15<br>(7.5)   |
| 実 人 数<br>(15項目の平均%) | 65<br>(59.9)  | 56<br>(62.3) | 65<br>(54.9) | 12<br>—       | 198<br>—      |

の感性を育む上で大きな影響力をもつものであろう。

### (1) 各項目別の実施状況

まず、行事別にその実施状況をみると、その率の高さからみると、「誕生日」は「いつもする」が98%、「七五三」が93%、「クリスマス」が90%、「節分」が85%、「お祭につれていく」81%などが高率をあげているが、50%を越えるものとして「ひなまつり」68%、「七五三」59%、「おはかまいり」57%、「門松」57%、「お盆のおまつり」55%などがあげられる。思ったより全般的に高率のように思われる。率の低いものとしては、「祝日の国旗」8%、「教会・神社・お寺につれていく」16%、「お月見」30%、「神棚や仏壇をおがませる」37%などである。

「祝日の国旗」に代表される国旗に対する日本人の意識の低さはどこに起因するのであろうか。苦い戦争体験によって歪曲された国家観、国旗観をもち、祝祭日に国旗を掲げない習慣をもつようになった親や社会

に育てられた「現在の親」の意識のあらわれであろうか。あるいは、祝祭日をそれほど意識せず一般の休日と区別しなくなった最近の傾向の結果であろうか。

「教会……お寺」「神棚・仏壇」は、宗教に対する考え方、感じ方の変化の結果であろうか。また、後者の場合は核家族や狭い住居という要因が内在しているのであろうか。

### (2) 母親の学歴との関連において

次に、母親の学歴による比較をしてみると、短大卒において他よりもきわだって高率なものは、「お盆」「ひなまつり」「国旗」があげられる。また、大学卒においては、他よりきわだって低率なものが認められる。つまり、「神棚・仏壇」「お祭」「こいのぼり」などである。さらに、学歴の上昇に伴い、実施率が低下しているものに「墓まいり」「門松」などがあげられ、反対に上昇するものに「教会……お寺」があげられる。高校卒は短大卒・大学卒のおよそ中間の実施率である。また生活行事15項目の平均の実施率は表18にみるとおり、高校卒60%、短大卒62%、大学卒55%となっている。

### (3) 年齢との関連において

まず、母親の年齢が高くなるにつれて実施状況が高くなるものに「はかまいり」「門松」がある。前者は年齢の上昇に伴いそのような機会が多くなるとも考えられるし、また、人生観の変化からくるものとも考えられる。またその両方の事情からとも推察される。反対に低くなるものには「教会……お寺」「国旗」があるが、前者は極めてわずかな差であり必ずしもはっきりした傾向とはいえない。後者については40代において大きく落ちこんでいる。

次に年代別に他の世代と比較してみると、20代においては、他の世代より実施率がきわだって高いものではなく、半数ほどが他より低率である。30代で、他の世代より特に高率なものをあげてみると次の通りである。「七夕」「節分」「お盆」「お祭」「ひなまつり」「七五三」などであるが、これらは季節の節目に行われる行事とか通過儀式などが多い。この世代では各項目において最低率を記録しているものは全くない。40代で他の世代より特に高率なものは、「はかまいり」「神棚や仏壇」「こいのぼり」「門松」「お月見」などである。低率なものは、「お祭」「国旗」などがあげられる(表19)。

## まとめ

以上、東京の一幼稚園の園児(3~6歳)の母親が、家庭でどのような内容や方法で育児やしつけを行っているか調査の結果を述べてきた。最後に一つ二つ考察を加え「まとめ」としたい。

調査回答者の諸属性については、回答者の年齢は

表 19 生活行事の実施状況一年齢との関係  
(「いつもする」)

| 行事              | 世代 | 20代 (%)      | 30代 (%)       | 40代 (%)     | 不明 (%)     |
|-----------------|----|--------------|---------------|-------------|------------|
| 1. 七夕           |    | 45.0         | 59.4          | 53.3        | 66.7       |
| 2. 節分           |    | 75.0         | 86.5          | 80.6        | 88.9       |
| 3. お盆           |    | 50.0         | 55.5          | 46.7        | 66.7       |
| 4. はかまいり        |    | 50.0         | 57.4          | 73.3        | 66.7       |
| 5. 神棚や仏壇をおがませる  |    | 35.0         | 34.8          | 46.7        | 55.6       |
| 6. お祭           |    | 75.0         | 84.5          | 66.7        | 77.8       |
| 7. クリスマス        |    | 90.0         | 91.0          | 80.0        | 88.9       |
| 8. 誕生日          |    | 95.0         | 98.7          | 100.0       | 88.9       |
| 9. ひなまつり        |    | 50.0         | 71.6          | 46.7        | 55.6       |
| 10. こいのぼり       |    | 45.0         | 48.4          | 60.0        | 22.2       |
| 11. 教会・神社・お寺に行く |    | 15.0         | 14.8          | 13.0        | 33.3       |
| 12. 門松          |    | 55.0         | 58.1          | 66.7        | 44.4       |
| 13. お月見         |    | 15.0         | 29.1          | 33.3        | 66.7       |
| 14. 七五三         |    | 85.0         | 96.1          | 86.7        | 88.9       |
| 15. 国旗          |    | 10.0         | 9.0           | 6.7         | 0          |
| 実数計 (%)         |    | 21<br>(10.6) | 153<br>(77.4) | 15<br>(7.6) | 9<br>(4.5) |
| (15項目の平均%)      |    | (52.7)       | (59.7)        | (57.4)      | —          |

30代が77%を占め、そのほとんどが30代に集中している。また、母親の学歴は、「高校卒」33%、「短大卒」「大学卒」が61%と、極めて高学歴であり、父親になると、「高校卒」が16%、それ以上が80%におよび一段と高くなっている。父母が「大学卒」30%、「大学卒」「短大卒」26%となっていることも注目される。父親の職業は「専門・自由業、管理的職業」が40%、「公務員、事務等」が25%と、ホワイトカラーに片寄っている。全体として、大都市の一般的傾向より高い階層分布となっている。

調査の結果についてはすでに記した通りであるが、この調査のクロス集計を通じて、母親の学歴と各調査項目に対する反応にある共通する特異性があることが見出されている。すなわち、「短大卒」と「大学卒」の対照的な面である。すなわち、「短大卒」の特異性は、「積極性」「思考的外向性」「楽観性」「貪欲性」「予備性」などであろうか。これに対して「大学卒」は一般にこれとは全く対照的のように思われる。育児やしつけに対して、どのような行動様式、思考様式がよいかは一概に論ずることはできないが、もうすこし詳しい分析可能な質問項目の作成が望まれる。「高校卒」はこの両者の中間をいっているといえようか。以上は、それぞれの学歴を有する母親の平均像であるが、このような傾向がどのような理由に起因するものであるかについては、より詳しい調査検討が必要であろう。



## 視聴覚メディア断章

駒沢大学教授 神山 順一

—  
鈴木内閣が新しい閣僚名簿を発表したとき、私はひさしぶりに懐かしい人に会ったような感慨をおぼえた。自治大臣石破二郎さんの名前を発見したからである。そうはいっても、個人的に面識があるというわけではない。石破さんが鳥取県の知事をしておられたころ、ある場面で短い話をされた。私は大勢の聴衆のあいだにまじってそれを聞いた。それだけのことなのである。ただ、その印象があまりにも鮮明に脳裏に焼き着いているために、いつのまにか勝手に、石破さんを旧知の人のように思ってしまったのであろう。

それは、昭和47年度中国地方放送文化研究集会の開会式であった。会場が鳥取市だったので、石破さんは開催県を代表して、参会者に歓迎の辞をのべられたのである。わずか10分ほどの短い話だったが、私にとってそれは一つのショックだったといっている。それにつづいてまる2日間にわたったさまざまな研究発表や討議の中味はほとんどすべて忘れてしまったのに、ただ知事のあいさつだけがポカリと記憶のなかに浮かんでいるのである。

石破さんの話は、おおよそつぎのようなものであった。

—自分は、山陰の名山といわれる大山の麓に

生まれ育ったものである。現在もそこに住んで、朝夕大山を仰いで生活している。考えてみると、自分のこれまでの数十年の人生は大山とともにあったといってよい。ところで、こうして長い間一つの山とつきあっていると、山の表情がいかに複雑なものかということをつくづくと感じさせられる。山は一刻も休むことなく、時々刻々に表情を変えるのである。朝の山と夕べの山はちがう。晴れた日の山と曇った日の山はちがう。春夏秋冬でもそれぞれちがう。見る場所を移動すれば、それにつれて山は姿を変える。見る人の気分によっても、山はまったくちがった様相を呈する。少年時代に見た大山と現在の年齢になって見る大山にも微妙なちがいがあ

しかし、テレビに映った大山を見ると、それはたしかに同じ大山にはちがいないのであるが、映像の大山は、刻々に変化するその山のある一瞬をとらえたものにすぎない、と思う。つぎの瞬間の姿はもうテレビには出てこない。

また、テレビのなかの大山は、カメラの置かれた一つの地点から見た映像なのであって、それはあらゆる角度から見たさまざまな姿のなかの、たった一つのものにすぎない、と思う。

自分は放送や教育のことについては、まっ

たくのしろうとである。映像のことも専門的にはなにも知らない。ただ日頃感じているまを正直に述べたまでである。

石破さんの話の骨子は、およそこのようなものであったが、ややオーバーな言い方をすれば、私はその場で、躰が石のように硬直するのをおさえることができなかった。映像というものの本質について、それまで閉ざされていた新しい視野がにわかには広がってきたからであった。私はこの新しい認識に「現実の断片」という名を与えた。

これまでの視聴覚教育の理解では、映像の特性は、常にまず第一義的に活字との対比から眺められてきたのである。活字に欠けている映像のアクチュアリティやリアリティでことのほか強調され、活字は抽象的で映像は具体的だという見方が、すべての人の頭脳を支配してきたように思う。映像は直接的に人間の感覚に訴える性能をもつ。だから「百聞は一見にしかず」と誰しもが考えたのである。それはたしかにその通りなのであり、視聴覚教育について一通りの常識らしきものを身につけたつもりの私も、いわばその通念どおりの見解の枠の中にドブリンと身を浸していたわけなのであった。

だが、活字と映像との対比は、じつは映像の特性を考えるための盾の一面でしかなかったのである。映像は同時にもう一つの残された面、すなわち現実との対比によって浮かびあがる側面からも吟味されなければならない。石破さんがさりげなく提出された疑問は、このような示唆をふくんでいたのである。

われわれは、以後、(1)言葉(活字)、(2)映像、(3)現実、という3つの次元を、つねに同時に視野に入れて考えなければならない。映像は、いわば言葉と現実のあいだにはさまれた中間的な存在なのである。映像は言葉にくらべれば、たしかに感覚的・具体的である。が同時に現実の

事物そのものにくらべれば、感覚的ではあっても一面的・断片的・抽象的な性質をぬぐい去ることはできない。映像はあくまで、いわば「半具体・半抽象」ともいうべき中間的存在なのであった。

## 二

さらに映像は、ほとんど常に言葉とともにある。視覚の対象となる「画像」だけが一人歩きするような場面は皆無に近い、といつてよいであろう。映画の場合はトーキーの発明以来、テレビの場合はそもそも出現の最初から、映像媒体はつねにわれわれの前に、(1)画、(2)コトバ(音声としての言語)、(3)音(現実音・効果音)という三要素の合成物を提供してきたのである。

人はしばしばテレビすなわち映像という論じ方をするが、こうした論じ方は、ことによると正確なテレビ理解をいちぢるしくさまたげることになるかもしれないのである。うっかり、映像イコール画像、というふうに考えると、テレビ情報(映画も同様である)の重要な構成要素である「コトバと音」を無視する結果におちいってしまう。

ことにテレビについて、その技術の展開過程をふりかえってみると、まず電波メディアとしてのラジオが先行しており、ラジオ技術の普及ののちにはじめて画像をその上に乗せることに成功したのである。テレビはそのようにして実現したのであって、ラジオが先、テレビは後なのである。その順序を、けっしてサカサマに解釈してはならないと思う。

ラジオはいうまでもなく聴覚の世界である。コトバと音だけの世界である。そうしてそれだけで十分にマスコミ媒体としての機能を発揮することができた。だが、これに対して、こころみに画像だけのテレビ、コトバと音を完全に欠落させたテレビというものを想像してみたらど

ういうことになるか。おそらくこれによって伝達される情報は、ほとんど意味不明の光と影、うつり変わる色と形の行列にすぎないであろう。

わが身を実験動物にして、私はある日まる一日、完全に音を消したテレビの前に自分を釘付けにしてみたことがある。これは想像以上に苦痛であった。面白くないのである。退屈などという程度をはるかに越して、もはや肉体的苦痛に悲鳴をあげたのである。

実際にそれを経験してみて、実にいろいろなことに気が付いた。たとえば、画面に現われる視覚情報の中には、想像以上に多量の文字情報が入ってくる。テレビは単に「絵」を見せているだけではなくて、大量の「文字」を読ませているのである。コマーシャルのいろいろ、野球や相撲の中継番組などを考えてみるだけでいい。そこには極めて効果的に「文字」が用いられている。文字だけではなく、文字に準ずる各種の記号も混入してくる。(野球中継に出てくる「S・B・O」と、その数を示す星など)。したがってこの種の番組ならば、単に眼で視るだけでも、事態の意味が可成りの程度わかるのである。面白いかどうかを棚に上げれば、わかるだけなら、けっこうわかるのである。

しかしまた、たとえば、講演・座談会・ドラマ・音楽などの番組にチャンネルを回すと、音なしでは、ほとんど何をやっているのかわからない。経過も意味も五里霧中である。画面の中の人物は、やたらに口をパクパク開けて動き回るだけであり、オーケストラの指揮者は、ただ髪ふり乱して棒をふり回している操り人形のように見える。

私はいまつくづく「テレビもまた音のメディア」であるという認識に驚いている。テレビは画像の世界であると同時に、否、それ以上に音の世界であり、とりわけコトバの世界なのである。テレビは「お話」のメディアであり、む

しろしゃべりすぎるくらいおしゃべりなメディアなのである。

大相撲の見物に国技館に行ったとき、気が付いてみると、実に多数の見物人が携帯用の小型ラジオを持ち、レシーバーを耳にして観戦している。せっかく国技館まで足をはこび、ホンモノの相撲を目の前にしているのに、それでもやはり耳が寂しいのである。

勝負の最中であらうと合い間であらうと、テレビからは絶え間なしにアナウンサーと解説者の声が流れつづける。土俵上の力士について、これまでの経歴、得意と不得意、今場所の成績、今後の見通し、ふだんの稽古ぶり、身体の調子、肌の色つや、心理状態、親方と弟子、日常生活のあれこれ、趣味、故郷、親孝行、人気の秘密、結婚のうわさ……。

われわれはふだん、あまりにもテレビのおしゃべりに慣れてしまっているのである。それに慣れた現代人はもう、目の前の勝負を自分の肉眼で見ただけでは満足できなくなってしまった。眼は満足しても、耳が承知しなくなってしまった。

しかも目下のところ、テレビの技術開発の向っている方向は、視覚よりもむしろ聴覚の領域に傾斜しているように見える。「音声多重放送」がそれである。音声多重とは、一つの画面に対して、同時に二系統の音声を合わせるシステムである。たとえば、一人のアメリカ人が演説をしている画面に合わせて、右側のスピーカーからは演説者の英語をそのまま流し、左側のスピーカーからは日本語の同時通訳を流す。視聴者は、自分の好みにあわせて、どちらか一方の音声チャンネルを選ぶ、という方式である。

左右のスピーカーを同時に開く方式も考えられている。すでに実行段階に入っているものとしては、音楽番組のステレオ放送が最も典型的であろう。またたとえば野球中継にステレオ効果を加えることなどもすでに実験済みである。



一塁側と三塁側のスタンドにマイクを置き、両軍の応援席の熱狂と沈静をミックスする。このこと自体は、従来のテレビでも現にやっていることであるが、ただ、従来のテレビではそれを一本の音声系に流し込むことしかできなかった。だがステレオ放送なら、それをそれぞれ左右のチャンネルに分離することができる。テレビの音響効果は、これによって飛躍的な広がりを得ることになる。聴覚的空間にいちぢるしい深みと立体感が加わり、視聴者は、従来のテレビとは比較にならないほど緊迫した臨場感に包み込まれることになる。球場全体の巨大な呼吸が、肌に伝わってくるのである。

テレビは今ようやく成年に達したところである。ラジオに画面を乗せることによって誕生したテレビは、白黒の画面をカラー化することによって青年期に入り、さらに取材・録画・編集・伝達の各分野にわたる無数の改良をつみ重ねることによって、ようやく今日の段階にまで成熟してきたのである。だが、今あらためてこれまでの歩みをふり返ってみると、テレビはいわば「見る世界の拡大」という主題にほとんど全エネルギーを注ぎ込み、それに専念してきたように思われる。

しかし、見るものとしてのテレビは、いまや一応の成熟に達してしまっただけではないだろうか。あまりに断定的な予見を提出することはつつしんでおかなければならないが、ちょうど子どもの身長が発育がある一定の年齢で止まるような、そのような時期は、遅かれ早かれテレビにもかならず到来するものと考えなければならないであろう。

テレビは今後次第に聴覚的要素に力を加えるのではないだろうか。そしてそれにしたがって、次第に聴覚依存の度合いを強めるのではないだろうか。われわれは将来、テレビを視る、というより、テレビを聴く、という時代に入るかもしれないとさえ思うのである。

映画についても、私は同様のことを感じている。黒沢明の「影武者」を見て、私はあらためてそのことを思った。あの作品の聴覚的要素のすばらしさは、とりよによっては視覚的要素を上回っていたといっても過言ではない。音がすばらしかったのである。音が画面を説明している時代は終わった。いまや音が全体をリードし、画面はむしろ音の背景にひっこんでしまった、とさえ感じさせるものがあった。そのように実感させるいくつかの場面が印象的であった。

### 三

だが、それがどのように優れているにせよ、テレビや映画の提供する映像や音声は、ありのままの現実の再現なのではない。まえにも一度触れたように、それらはいわば「現実の断片」なのである。それは無限に持続し変貌する現実のある一瞬を切り取ったものであり、無数に選択できるアングルの中のたった一つの側面だけを写したものにすぎない。この点は何度でも確認しておきたいのである。

だからといってマイナスだといいたいのではないからである。むしろ逆なのである。映像や音声の存在理由は、むしろその断片性や一面性に依存しているのである。現実の断片とはいっても、目の前に無意味にころがっている石ころとはちがう。映像や音声は天然現象ではなくて加工品なのである。人間が作るものである。人間が価値ありと信じた要素を、混沌とした現実の中から掘り起こしたもののなのである。映像（音声）の作者は考古学者に似ている。考古学者は、地中に埋もれている価値ある文化財を掘り出し、そうしてそれを多くの人に見せるからである。ありのままの現実では永久に人の注目を集めない価値に照明を当てる、という点で両者は非常によく似ていると思われる。

その意味では、映像を「現実の断片」という

より「現実の切り抜き」と呼んだほうがより正確かもしれない。カメラは、現実の中から価値ある本質的な部分を四角に切り抜く道具である。マイクロフォンもまた不必要なすべての音だけを拾う。カメラもマイクもいわば価値あるものの「分離抽出」の道具なのである。

この分離抽出ということに関連して、こんな話がある。

ある商事会社に勤務する一社員が、仕事の必要から英会話の習得を志した。彼は、在日中の一アメリカ人に紹介され、そのレッスンを受ける契約を結んだ。二人は毎週定期的に出会い、レッスンは順調に進んでいった。ところが、なにかの事情でそのアメリカ人が急に帰国しなければならなくなったのである。アメリカ人は帰国に先だって、1冊のテキストを選び、そのテキストを音読して録音にとった。そして自分の生徒である商社マンに、そのテキストとテープを渡して国に帰って行った。商社マンはそれ以後、残されたテキストとテープを利用して独習を続けた、という話である。

とくになんの変哲もない、それだけの話である。しかし私は、とっさに「これだ！」と思った。マイクロフォンとテープレコーダーというものの性能について、この事例が物語る象徴的な意味はなかなか捨て難いものがある。

この場合の学習の中味は「英会話」である。その英語は、会話である以上、当然音声言語でなければならないが、その音声がどこに存在していたのかといえ、それは先生であるアメリカ人のナマミの身体と不可分のものだったというしかない。その英語は、先生の人格の一部だったといってよい。だからこそ、それまでのレッスンでは、先生と生徒は毎週定期的、一定の場所では会う必要があったのである。先生と生徒はそこで直接に顔を合わせ、先生の唇から出てくる音を生徒は模倣し、生徒の発音を先生は修正した。

ところが第二段階ではどうなったか。先生のナマミの身体はアメリカに帰ってしまった。そして、生徒の手元には先生の声の録音テープが残っている。先生の身体と音声の間には太平洋が横たわっている。これはどういうことか。先生の音声だけが、先生の身体から分離抽出されて日本に残った、ということではないか。マイクとテープは、学習に必要な要素を、先生の身体（現実）から切り取ったのである。切り取って保存したのである。

もちろんテープは、ナマミの先生とはちがって、生徒の学習をはげましたり、生徒の発音をなおしたりすることはできない。その点に関しては、テープは直接授業に遠くおよばない。しかしテープは、すべての点において不利なのではない。テープがもつ圧倒的に有利な点は、どこまででも生徒の自由に反復ができるということであろう。

30歳で世界の主要30ヶ国語をマスターしたという語学の天才に種田輝豊という人がいるが、この人の方法論は、新しい外国語を覚えようとするとき、まず徹底的にテープを利用するのだという。たとえばスウェーデン語をはじめた頃、「シンデレラ物語」の録音を手に入れ、それを五百回聴いた。そこまでやると、ストーリーそのものが音のまま頭に残る。永久的語感ともいうようなものになって覚えるという。

種田さんは「オウムがえし」に疑問をもって、先生の発言を一区切りずつ模倣するやり方は、あまりよくないという。それよりもただひたすら繰り返して聴くことをすすめている。最初は音に慣れるだけでよい。音の特徴をつかむのである。音だけに集中する。書く、見る、なども一切やらない。ただ繰り返しかえし、テープがすり切れるまで、黙って聴くだけだというのである。

一1本の録音を500回、すり切れるほど繰り返し聴くということ、それをやりとげた人はや

はり天才というべきであろう。凡人は、100回も繰り返さないうちへこたれるであろう。しかし、その方法論そのものは、なんと単純明快なことか。「繰り返しは学習の母」というが、やはり王道はそれだけなのである。

それにしても、テープレコーダーの発達はわれわれにどれほどの便宜を与えてくれたことであろう。その恩恵は測り知れないものがある。

どれほど親切な先生にめぐり会うことができたとしても、ナマミの先生では、とうてい500回も繰り返して読んではくれないであろう。

〔紹介〕 昭和29年、東京大学教育学部卒。NHKに入社。教養番組、報道番組の編成担当を経て、102の番組制作に従事。43年、放送文化研究所の研究員、番組担当部長。54年4月、駒沢大学教授。

最新刊

財団法人 日本教材文化研究財団 監修

(9月25日刊)

## 育児としつけに関する意識調査

当財団では54年度以降の継続事業として「家庭教育に関する基礎的・総合的調査研究」を進めるに当たり、その基礎的資料を得るために関西・関東の両委員会に委嘱して独自の実態調査を実施した。その結果をまとめたのがこの中間報告書である。広く関係者のご参考となれば幸いである。

〔関西グループ〕委員長・鏝坂二夫、委員・蜂屋 慶、和田修二、二関隆美、藤原英夫、池田 寛。〔関東グループ〕委員長・辰野千寿、委員・渋谷憲一、岩野武志。

A5判・98頁 定価 380円 送料 120円

家庭教育の実践記録と提言 入選作品

## 文集・わが子と共に

A5判 350頁  
定価 1,000円  
送料 250円

家庭・学校・社会を通じて教育上の新たな問題が提起され、しきりに論議が交わされるおりから、現に育ちざかりの子をもつ父母の皆さんは如何に考えておられるか。その真実の声をと、全日本家庭教育研究会の会員家庭に呼びかけたところ、北は北海道から南は九州鹿児島に至る各地の会員から多数の記録が寄せられたが、その中から下記の選考委員の熱誠によって選ばれたのが、この文集34篇である。人は、この個性ゆたかな文集を読了したあとでは、「理論は灰色だ、しかし人生の樹は緑だ」との感を深くするにちがいない。

〔選考委員〕 平澤興理事長、平塚益徳、鏝坂二夫、辰野千寿、保田與重郎、林部一二、奥西 保、堀場正夫、各理事。勝部眞長、木原健太郎、各評議員。中谷孝雄(作家)、野長瀬正夫(児童文学)、平林英子(作家)、山川京子(歌人)、柳井道弘(詩人)。

編集／発行 財団法人 日本教材文化研究財団

東京都新宿区砂土原町1-2  
振替東京 154685番



## 浮世の慈悲と見返り如来

(遺稿)

北島織衛

吉川英治さんの『鳴門秘帖』に見返りお綱という女性が登場する。粹でいなせで気が強くて、それでいて、やさしく美しく、どこかさびしい陰のある女。運命が女賊まがいの苦難の道を歩かせても素性のよさは失わず、情は人一倍あつい。最後には美男の剣士にかけた熱い恋を、薄幸の妹に譲って去ってゆき、どこかで静かに独り泣く。女というものが、ほんとうに生き生きと描かれている感じで印象に残る人物だ。

永観堂の「見返り如来」を初めて見たとき、私はふとこのお綱のことを思い浮かべた。

というのは、ニックネームが似ているというだけでなく、この仏像が、吉川さんのお綱のように、浮世の慈悲をたたえた仏の表情を、生き生きと描きだしているような気がしたからである。

永観堂、正しくは禅林寺、浄土宗西山派の寺である。南禅寺境内東北の極門をでて北につうずる道をしばらくいくと右手にある。平安中期にこの寺を再興した永観律師の名をとってそう呼ぶ。京都には有名な寺が多いゆえか、京の古寺巡りといった類の案内書には落ちていることが多いが、緑と紅葉が美しくして私の好きなおところである。情熱の歌人と謝野

晶子も、よくこの寺にきたと佐藤春夫氏が『晶子曼陀羅』に書いている。このあたりから若王子社、真如堂、吉田山、銀閣寺と疏水の清冽な流れに沿った東山山麓の径は、京都に住んだ人々が必ず逍遙する思い出のコースである。古くは高浜虚子の『俳諧師』の三蔵が客を案内して歩いたのもここだし、哲学の道、青春の散歩道などと名づけた人もあって、和辻哲郎博士その他もここを散策した折の楽しさを語っておられる。そうした静かで明るい環境に見返り如来は鎮座している。

この永観堂の仏像は、阿弥陀像としては数少ない立像のひとつで、しかも、首を左にまげて後ろをふり返っている。他に例をみない型破りの阿弥陀さまである。由来によれば、永観が永保2年2月15日の夜半、本堂で念仏を唱えて行道していると、本尊が台座からおりてともに行道した。あまりのおそれ多きにためらっていると、本尊は、後ろをふり返って《永観おそいぞ》といわれたという。いまの本尊は、そのときの御姿を現わしたものと説明されている。ことの真偽はともかくとして、民衆を見返って招かれている形の阿弥陀さま、というので、見返り如来、顧名阿弥陀と呼ばれている。

竹山道雄さんが『京都の一級品』という著

書のなかで、

「この阿弥陀は平等院のそのように、崇高な姿で瞑想にふけているのではなく、むしろ人間に近い」

とっておられたのに心惹かれた。

仏門にも仏像芸術にも無縁に近い私だが、数年前、あの永観堂の本堂で坊さんのつけるあかりを受けて金色に浮かびあがった、この変わった姿の阿弥陀如来像を見たときの驚き、私は、この仏さまは生きているのではないかと思ったほどだった。

ニューヨークのオルブライト美術館に有名なブランクーシの磨き真鍮の代表作「ボガニー嬢」がある。ロダンに続いて彫刻芸術を近代から現在に展開させた大作家ブランクーシの作風は、一部の批評家からは、ヨーロッパと異なった東洋の血、仏教思想を感じさせるといわれているが、永観堂の阿弥陀の顔は、私にはまた、この大胆にデフォルメされたブランクーシの真鍮像の表情に一脈つうじているように思えてならなかった。偉大な芸術は、門外漢の私たちにさえ、こんな感じを与えてくれるのだろうか。

「見返り如来」という名も好きだ。ややもすれば冷たい感じの仏像が、この名でどれほど暖かい血がかよっているように感じられることだろう。人はときには後ろを振り返ってみることも大切で、そうした教訓のよすがにもなる。

若い人たちに、京都にいったら永観堂を訪れたまえ、そしてあの阿弥陀像のやさしく気高いお顔を見てきたまえ、と私はすすめている。



(遺影)

## 追悼

当財団の設立発起人の一人であり、以後引續いて理事であった北島織衛氏が、去る4月27日、心不全にて逝去されました。享年74歳。

氏は、明治38年、元大日本印刷社長・青木弘氏の三男に生まれ、仙台の第二高等学校を経て東京帝国大学法学部を卒業。直ちに大日本印刷の前身である秀英舎に入社。昭和10年、日清印刷と合併後は、大日本印刷の常務取締役、専務取締役を経て、昭和30年、取締役社長に就任。以後24年にわたりその座にあって社業の発展を期し、自社をして世界第一位の総合印刷企業に育てあげると共に、わが国の印刷・出版業界の地位の向上と技術の進歩に貢献されました。その間、全国の印刷・製本・紙製品業者を総合した全国紙工業協会会長をはじめ、日本印刷工業会、教科書協会会長等、関連する公共団体のために常に率先して尽くされた功績は枚挙に遑がありません。その功績がみとめられて昭和51年春、業界最高の勲二等瑞宝章を受章されたことはまだ記憶に新しいところであります。

かくて、戦後のわが国の産業経済界に太い一線を貫いた氏は、若い日より気骨ある文人墨客と深く交わり、自からまた「文」の人でもありました。晩年なおゲーテの「ファウスト」の終章を語って若人を励まされる温容は、さながら懐しい浪漫派のそれにて、聴く者を深く感動に誘いました。そういう氏の知られざる一面をこの遺文はよく伝えて永遠のものと思います。記してご冥福を祈りまつる。

合掌・堀場正夫

# 文書による教育相談の内容と統計

—昭和54年度の集計から—

調査部 土屋昭枝・朝倉典子

## まえがき

日本教材文化研究財団では、当財団の賛助会員の組織である全日本家庭教育研究会の要請により、昭和49年4月から全国各支部に教育対話主事を委嘱し、会員の教育相談に応じるとともに、本部では全国の会員家庭に「教育相談カード」を配布して、文書による教育相談を実施しているが、会員の増加とともに年々その相談件数が増える傾向にある。54年度の財団本部受理件数は、①幼児教育に関する相談 40件、②小学生に関する相談 389件、③中学生に関する相談 228件、合計647件であった。その領域別、相談事項の分析・統計資料にもとづく概要をまとめたのがこの報告書である。

ただし、上記の受理件数の中には、1件で二つ以上の領域、即ち「学習」「進路」「生活」「健康」のいずれかにわたることがあるので、この報告書に見える回答処理上の件数と受理件数とは必ずしも一致するものでないことを予め承ねがたい。

因みに、全日本家庭教育研究会の組織ならびに会員普及状況をみると次の通りである。(55年5月現在)

全国の支部数 301支部。各支部所属の教育対話主事 298名。支部所属の教育モニター 20,800名。会員数 811,200家庭。

このうち、財団本部の「文書による教育相談」受理件数が54年度647件というのは、必ずしも多いとは言えない。むしろ案外に少ないと言える。その理由としては次の二つのことが考えられる。

- ① 小、中学生の相談事項については、その家庭のおかれた地域・環境を背景として家族構成や生活習慣とも有機的に深いかかわりがあることであり、その指導・助言については、各支部担当の対話主事および教育モニターとの対話によって概ね充足されていること。(その実状については、別項の教育対話主事および教育モニターの記録を参照ねがいたい。)

- ② したがって、「文書による相談」が寄せられるのは、支部の所在地から離れていて連絡が不便であるとか、その他何らかの特殊な事情によるものであること。

ただし、中学生の場合は、進学等の問題について本人からの相談が多いので、上記の例には当てはまらない。

また、小学生の「いじめっ子による登校拒否」とか「非行のめぼえ」等については、家庭・環境・地域性等を十分に考慮し、母子とも面接してよく話し合ったうえで、総合的にアドバイスするのであれば、実効が伴わないと思われる。そういう場合には、その地域の自治体(県・市)の児童相談所等の所在をたしかめて、できるだけその施設を利用するとか、または、担任の先生に相談されるようすすめることに努めた。

かつて、こういう事例があった。8歳になる女兒だが、箸を持つ右手の小指を、いくら注意しても曲げないで、立てたまま食事をする。この「くせ」を直すにはどうしたらよいか、という相談である。これを単なる「くせ」と判断してよいかどうか、その辺のところが文面では不明であったので、直ちに相談者の母親に電話を入れ、詳しい事情を訊ねてみた。ところが、明けてくれ子どもに接している母親自身の観察がきわめてあいまいである。これでは回答のしようがない。そこで本部としては相談の受理以前の問題として、いちど最寄りの病院で診てもらうことを極力すすめ、その結果によって、もういちど相談を寄せられるように申しそえたことがあった。すると、それから1週間ほどして、例の母親から電話があり、「少しも気がつきませんでしたがおすすめによって近くの公立病院へ行き、外科で診察してもらったところ、右手の小指の第2関節が無いことがわかりました。別に健康上の障りはないそうですから、安心しました」という報告であった。

これによって考えられることは、相談の内容にもよるが、文書による相談には自から限界があるということである。たとえば、健康上の問題にふれるとき、医

師は先ず聴診器をとり、皮膚の色をはじめ、諸器管の機能状態を調べながら、しかも何気なさそうに本人との対話を重ねたうえで健康か否かを診察し、必要とあれば適切な治療をほどこす。「学習」や「生活」に関する相談だからといって、本来これとは全く別だと考えるわけにいかない。人はそれぞれ個別的な存在であり、ちがった個性を有するものとすれば、やはり医師がするように面接相談による診断・治療の手だてを構わない必要があると思われる。そこに、文書による相談のむずかしさがある。しかし、それにもかかわらず極めて懇切な指導をたまわった次の専門委員の先生がたには並々ならぬご苦心があったことと思われる。ここに記して厚くお礼を申上げる次第である。

- ① 学習に関する相談 辰野 千寿先生
- ② 進路に関する相談 大石 勝男先生
- ③ 生活に関する相談 玉井美知子先生
- ④ 健康に関する相談 林 富士馬先生
- ⑤ 幼児に関する相談 堀合 文子先生

なお、この相談内容の分類、統計資料の作成については、調査部の土屋昭枝、朝倉典子の両君が担当して下記の通りとりまとめた。また、本号に執筆された辰野千寿先生の「家庭教育の問題点」は、これらの相談内容を総括して特に学習指導上の要領を示されたものである。各支部の教育対話主事、並に教育モニターの各位の日々の対話活動上の参考となれば幸いである。

堀場 正夫

### 1. 学年別相談数

小学生では、学年がすすむにつれて相談者数が減少しているのに対し、中学生では、学年がすすむにつれて増加している。(図一)

その理由は、小学校低学年では、子どもが初めて学校生活を経験するため、親子とも不安やとまどいを感じての相談が多いが、学年がすすむにつれて減少するのは、学校生活に慣れてきたことによるものと考えられる。また、中学校で相談数が増加したのは、高校受験が身近になり、進路決定・受験勉強などを意識したことと考えられる。したがって、本人からの相談が多い。

### 2. 月別相談者数

7～8月・12月に寄せられる相談が多かった。(図二)

これは、相談カードが4月・8月・12月の3回配布されることと、学期末および長期休暇の時期であるため、教師からその学期の諸注意をうけて、そのことを反省したうえで、長期休暇中に改善をはかりたいとの

図1 学年別相談者数

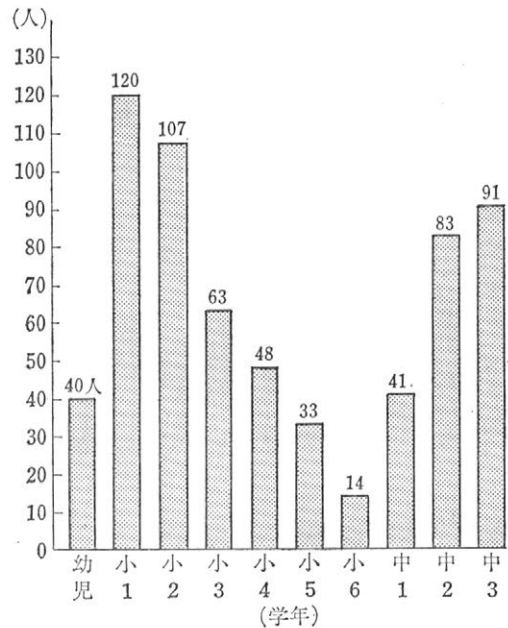
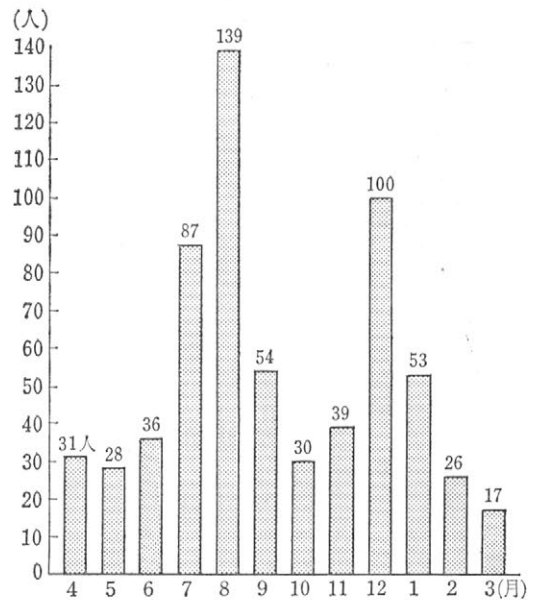


図2 月別相談者数



願いから寄せられる相談が多くなったものと考えられる。

### 3. 相談者およびその性別について

男女別相談者数については、幼児から中1まで男子

図3 男女別相談者数

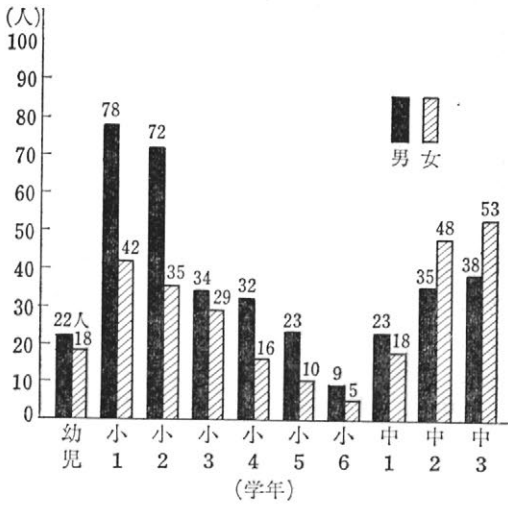
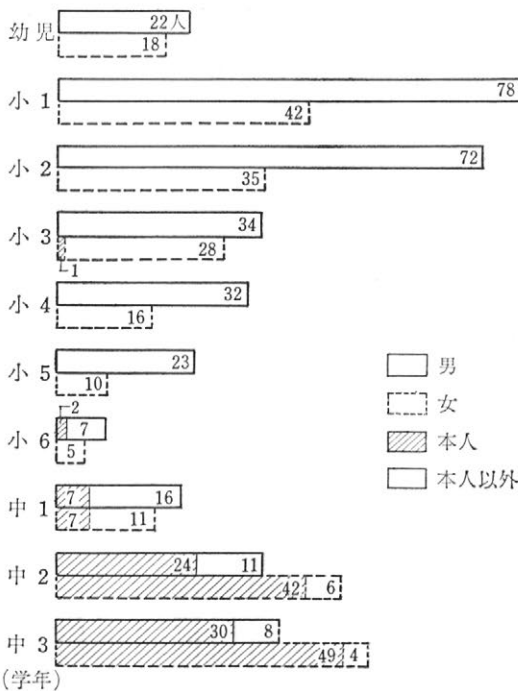


図4 相談者について



の方が多く、逆に中2・中3は女子の方が多くなっている。(図一三)

相談者については、小学生はほとんど本人以外(大部分母親)からの相談であるが、中学生になると、本人からの相談が多数を占めている。特に、女子中学生からの相談が多い。(図一四)

これらをもとめ、中学生になると自己を見つめる芽

が育ち、自我の発達の様子がうかがえる。

#### 4. 相談者の家族構成について

各学年とも、祖父母のいない親子4人だけの典型的な核家族家庭が半数以上を占めている。(表一・2)

表一 家族の人数

| 学年  | 人数 | 2人 | 3人 | 4人 | 5人 | 6人 | 7人以上 | 不明 |
|-----|----|----|----|----|----|----|------|----|
| 幼児  |    | 0  | 15 | 54 | 13 | 10 | 5    | 3  |
| 小1  |    | 1  | 6  | 48 | 21 | 13 | 8    | 3  |
| 小2  |    | 1  | 9  | 44 | 24 | 13 | 9    | 0  |
| 小3  |    | 0  | 19 | 28 | 24 | 10 | 16   | 3  |
| 小4  |    | 0  | 4  | 50 | 28 | 6  | 6    | 6  |
| 小5  |    | 0  | 0  | 46 | 30 | 12 | 12   | 0  |
| 小6  |    | 0  | 0  | 43 | 43 | 7  | 7    | 0  |
| 中1  |    | 0  | 5  | 53 | 27 | 15 | 0    | 0  |
| 中2  |    | 0  | 11 | 47 | 19 | 12 | 6    | 5  |
| 中3  |    | 0  | 4  | 57 | 26 | 9  | 4    | 0  |
| 平均% |    | 0  | 8  | 47 | 24 | 11 | 8    | 2  |

(%)

表二 祖父母の有無

| 学年  | 有無 | 両方なし | 祖父だけ | 祖母だけ | 両方いる | その他 | 不明 |
|-----|----|------|------|------|------|-----|----|
| 幼児  |    | 75   | 2    | 8    | 13   | 0   | 2  |
| 小1  |    | 67   | 3    | 8    | 17   | 2   | 3  |
| 小2  |    | 60   | 4    | 18   | 18   | 0   | 0  |
| 小3  |    | 62   | 2    | 11   | 22   | 0   | 3  |
| 小4  |    | 80   | 0    | 6    | 8    | 0   | 6  |
| 小5  |    | 70   | 3    | 9    | 15   | 3   | 0  |
| 小6  |    | 65   | 14   | 14   | 7    | 0   | 0  |
| 中1  |    | 83   | 5    | 12   | 0    | 0   | 0  |
| 中2  |    | 71   | 1    | 10   | 12   | 1   | 5  |
| 中3  |    | 84   | 4    | 3    | 9    | 0   | 0  |
| 平均% |    | 71   | 3    | 10   | 13   | 1   | 2  |

(%)

きょうだい数については、2人きょうだい全体の50~70%を占めている。(図一五)

相談も、一番上の子どもに関してのものが全体の60%を占めている。(図一六)

これは、初めてのもでも、親も心配や不安が多いにもかかわらず、核家族のため身近に育児の先輩や助言者がいないから、こちらに相談してくる者が多いのではないかと考えられる。

本人からくるものについても、上に教えてくれる人がいないから、どうしたらよいかかわからず、こちらに相談する者が多いのであろうと考えられる。ただし、ひと



図5 きょうだい数

|        | 1人 | 2人 | 3人 | 4人以上 | 不明 |
|--------|----|----|----|------|----|
| 幼児     | 17 | 67 | 13 |      | 3  |
| 小1     | 9  | 69 | 18 |      | 3  |
| 小2     | 13 | 65 | 21 |      | 1  |
| 小3     | 19 | 52 | 21 | 5    | 3  |
| 小4     | 8  | 51 | 31 | 4    | 6  |
| 小5     | 3  | 55 | 42 |      |    |
| 小6     | 7  | 57 | 29 | 7    |    |
| 中1     | 7  | 62 | 29 |      | 2  |
| 中2     | 13 | 54 | 28 | 5    | 不明 |
| 中3     | 7  | 64 | 25 | 4    |    |
| 全体(学年) | 11 | 61 | 24 |      | 2  |

(単位：%)

りっ子の相談が思ったより少ないのが意外であった。

### 5. 両親の職業

相談者の父親の職業を自営業か勤めかにわけてみると、自営業が全体の24%を占め、勤めが76%を占めている。勤めのはほとんどが会社員である。(表-3)

図6 相談者本人のきょうだい内の位置

|        | 一人っ子 | 一番上 | まん中 | 末っ子 | 不明 |
|--------|------|-----|-----|-----|----|
| 幼児     | 17   | 50  | 3   | 27  | 3  |
| 小1     | 9    | 63  | 8   | 17  | 3  |
| 小2     | 13   | 64  |     | 8   | 17 |
| 小3     | 19   | 52  | 10  | 16  | 3  |
| 小4     | 8    | 53  | 8   | 25  | 6  |
| 小5     | 3    | 58  | 15  | 14  |    |
| 小6     | 7    | 50  | 14  | 29  |    |
| 中1     | 7    | 71  |     | 12  | 10 |
| 中2     | 13   | 44  | 10  | 28  | 5  |
| 中3     | 7    | 65  | 8   | 20  |    |
| 全体(学年) | 11   | 59  | 8   | 20  | 2  |

(単位：%)

母親については、各学年とも無職で家事従事者が最も多い。(図-7)

強いて言えば、比較的手のかかる幼児・小1・小2をもつ母親は、家事のみであるが、子どもが大きくなれば自分の仕事をもつ傾向があるとみられる。

表-3 父親の職業

| 学年  | 自営業主か家族従業者 |         |        | 勤め  |     |     |     |     | 無職 | 父親不在 | 不明 |
|-----|------------|---------|--------|-----|-----|-----|-----|-----|----|------|----|
|     | 農林漁業       | 商工サービス業 | 専門・自由業 | 管理職 | 専門職 | 会社員 | 労務職 | 公務員 |    |      |    |
| 幼児  | 0          | 7       | 3      | 3   | 0   | 80  | 0   | 7   | 0  | 0    | 0  |
| 小1  | 1          | 20      | 1      | 3   | 4   | 50  | 8   | 8   | 0  | 2    | 3  |
| 小2  | 4          | 18      | 7      | 4   | 1   | 50  | 13  | 13  | 0  | 1    | 0  |
| 小3  | 3          | 8       | 13     | 3   | 5   | 40  | 10  | 10  | 0  | 2    | 6  |
| 小4  | 2          | 19      | 2      | 4   | 8   | 47  | 8   | 8   | 0  | 4    | 0  |
| 小5  | 3          | 29      | 0      | 0   | 9   | 49  | 6   | 6   | 0  | 0    | 6  |
| 小6  | 0          | 21      | 0      | 0   | 0   | 44  | 21  | 21  | 0  | 0    | 7  |
| 中1  | 2          | 15      | 5      | 5   | 2   | 52  | 7   | 7   | 0  | 0    | 2  |
| 中2  | 1          | 16      | 6      | 2   | 5   | 46  | 12  | 12  | 1  | 1    | 5  |
| 中3  | 3          | 30      | 0      | 2   | 4   | 40  | 12  | 12  | 0  | 0    | 2  |
| 平均% | 2          | 18      | 4      | 3   | 4   | 49  | 10  | 10  | 0  | 1    | 3  |

(%)

図7 母親の職業

|        | 無職 | 定職 | パート | 家業 | 不明   |
|--------|----|----|-----|----|------|
| 幼児     | 80 | 12 | 3   | 5  |      |
| 小1     | 67 | 13 | 15  |    | 不明3  |
| 小2     | 65 | 17 | 4   | 14 |      |
| 小3     | 56 | 22 | 3   | 11 | 不明6  |
| 小4     | 58 | 19 |     | 21 |      |
| 小5     | 55 | 15 | 21  | 6  | 不明6  |
| 小6     | 57 | 7  | 29  | 7  | 不明7  |
| 中1     | 54 | 22 | 10  | 10 | 不明2  |
| 中2     | 63 | 13 | 4   | 13 | 不明5  |
| 中3     | 56 | 7  | 18  | 4  | 不明13 |
| 全体(学年) | 62 | 16 | 3   | 14 | 不明3  |

(単位：%)

## 6. 相談内容について

小学校3年生までは、生活に関する相談の割合が最も多いが、4年生からは、学習に関する相談がぐんと増え、相談件数のうち最も大きい割合を占めるようになっていく。6年生に至っては、約80%が学習の相談であった。

また、進路についての相談は、小学生では、学年がすすむにつれて増加の傾向にあるものの、その数はわずかであった。しかし、中学生では、かなりの割合を占めるようになり、中3では45%と相談件数の最も大きい割合を占めている。(図-8)

相談内容をもう少し具体的にみてみると、小学校低学年では、「根気がない」「落ちつきがない」「集中力がない」「消極的」など、学習態度をも含めた生活全般についての子どもの様子を訴えてくるものが多いのに対し、学年が進むにつれて、「自主的に学習させたい」「家庭学習をどのように指導したらよいか」など学習に焦点を絞ったものが多くなる。さらに中学生になると、「家庭学習の計画のたて方」「各教科の勉強のしかた」が中心となり、自分で自分を「集中力がない」「すぐ眠くなる」と反省するものが多い。中2からは、やはり高校入試に向けて受験勉強のしかたを問うものがぐんと増え、中3では、将来の進路に関する相談もか

図8 相談内容の割合

|        | 進路   | 学習   | 生活    | 健康     |
|--------|------|------|-------|--------|
| 小1     | 0.7  | 40.6 | 58.3  | 0.3    |
| 小2     | 0.4  | 39.8 | 57.1  | 2.7    |
| 小3     | 2.0  | 42.7 | 51.3  | 4.0    |
| 小4     | 5.2  | 63.5 | 29.2  | 2.1    |
| 小5     | 3.8  | 66.3 | 28.8  | 1.1    |
| 小6     | 6.1  | 78.7 | 15.2  |        |
| 中1     | 10.0 | 67.1 | 20.0  | 2.9    |
| 中2     | 5.8  | 24.8 | 66.9  | 2.5    |
| 中3     |      | 45.0 | 38.0  | 15.0   |
| 全体     | 10.9 | 55.9 | 31.2  | 2.0    |
| 幼児(学年) |      | 94.4 | 生活・一般 | 健康 5.6 |

(単位：%)

りの数にのぼる。

以上のことから、小学校の低学年では、親の意識の中で、生活と学習がそれほどはっきり分かれていなかったのが、小学校も後半になると、学習が生活から分化して、日々の暮らしの中で大きな位置を占めるようになってきた、と考察することができる。そして、中学生になると自ら学習を生活の中心に据えて意識するようになり、さらに将来の進路へつなげるものになってくるのがうかがえる。

## 7. 学年別相談内容について

### (1) 幼児に関して

幼児では、相談内容を「生活一般」と「健康」の2つに分け、小・中学生の場合のように「学習」に関する相談を特に区別して項を設けることはしなかった。

また、相談者数がわずかなこともあって年齢別に分けることはせず、「幼児」として一括してみていくことにした。

〔生活・一般〕 男52件・女38件；計90件

相談内容のうち、「動作が遅い、反応が鈍い」が9件で最も多い。わが子のことを、いわゆる「グズ」だと訴える親が最近増えていると聞かすが、ここでも、やはり、その傾向が表れているようだ。

次いで、「飽きっぽい、集中力がない」が7件。「憶

病、消極的、自信がない」と「外で元気に遊ばない、遊んで遊ぼうとしない」が各6件と続いている。

これらを見ると、「テキパキしていて、元気で積極的な、しかも根気強く何かをやりとげる」という、親の願う子ども像がうかがわれる。

また、男女別でみると、「外で元気に」という相談6件のうち5件までが男児をもつ親からの相談である点が注目される。「やんちゃ坊主」「どろんこになって遊ぶ」といったイメージが、男の子の望ましいイメージとして親の中にあるのではないだろうか。

相談内容のうち学習へとつながっていくものに、「文字や数字の指導について」の相談が3件あった。その他「他人のものや商品をだまて持ち帰る」という習癖について訴える相談が3件あったことが目についた。

〔健康〕 男5件・女0件；計5件

「身長が低い」ので大きく育つためにどのようなことに注意したらよいか、という相談が男児の親から2件あったことが注目された。

〔全体のコメント〕

相談のべ件数は90件。そのうち男児の親からのものが52件、女児の親からのものが38件であった。

月別では、7・8月が多く、11月にもうひとつのピークがみられる。小、中学生では、相談カードが配布される時期と、学期末や長期休暇という二つの要因が作用して相談数が増えるが、幼児の場合は、相談カードの配布された直後が最も多い。

幼児の場合は、成績を明示される、ということがないので、当然、ほとんどの相談が子どもの性質や遊びに関することであり、しかも子どもの行動が具体的に訴えられている点が特徴といえる。

## (2) 小1に関して

〔進路〕 男1件・女1件；計2件

内容は、「有名私立小学校への編入について」の問い合わせと「将来の職業に向けての指導法」の助言を求めるものである。

〔学習〕 男76件・女37件；計113件

相談内容のうち、「自主的学習意欲をつけたい」とするものが13件で最も多く、次いで、テストなどで「問題の意味がわかっていないようだ」と訴えるものが12件、「家庭学習のしかた」を問うものが9件、「ポピーの使い方」に関する助言を求めるものと「ケアレスミスが多い」との相談がそれぞれ7件と続く。

学校という場での新しい生活が始まり、学習に対して、親の不安と大きな意欲を感じさせる。反面、子どもはまだ勉強することやテストの様式などに不慣れで、親の期待との間にギャップがあるようだ。

〔生活〕 男108件・女54件；計162件

相談内容のうち10件以上のものをあげると、「集中力がない」17件、「動作がのろい」16件、「ハキハキしない、消極的」15件、「根気がない」14件、「落ちつきがない」12件、友だちがいない、いじめられやすい等「友人関係」に関する相談10件となっており、これらは件数の上で他の相談項目をかなりひきはなしている。

学習態度に関連した面が多く見つけられる。やはり、「小学生になったから」という親の期待に比べ、子どもは急にはその期待どおりに変わっていかない、というところから生じる心配が多いようだ。

〔健康〕 女1件・男0件；計1件

微細脳機能不全に関する相談であった。

〔全体のコメント〕

相談件数は278件で、この数は全学年を通して最も多い。そのうち、生活に関する相談の最も多いことが特徴的である。

初めて学校生活を始めた子どもに対する親の期待と不安が伝わってくる。しかし、子どもの成長過程は連続的なものであり、小学生になったからということで一足とびに変わるものではないことを心にとめておく必要があるだろう。つまり、子供の発達段階におけるそれぞれの特徴を知ってわが子を観る目が大切ということ。例えば、7歳くらいになると運動神経の基礎が一応できあがり、伸びようとする体力のために、よく動きまわるのが自然であるし、感情の起伏もかなり強い関係から、時折かんしゃくも起こしがちである。したがって、無心に動きまわる子どもを落ち着きがない、集中力がない、と一概にきめつけるのではなく、むしろ、その発達段階に応じて良い方向へみちびいてやるのが大事である。高度のしつけやむずかしい道徳教育をしようとしても失敗するだけだろう。

男女別に見ると、学習・生活ともに男児をもつ親からの相談件数が、女児のそれよりも2倍ちかく多くなっている。この年頃の男児は特に動きが活発であるとともに、学習に対しても男児に期待することの方が女児に比べて多いのであろうか。

月別では、8月・12月が多い。やはり相談カードが配布される月であることが大きい理由になっているようだ。そのうち、学習では12月、生活では夏休みとなる8月が最多となっている。12月の中でも後半に学習の相談が集中していることから、2回めの成績表を手にし、小学校での勉強にも慣れてきて、新年を前に新たに意を決して何かを始めさせようとする親の意欲がうかがわれる。

## (3) 小2に関して

〔進路〕 男1件・女0件；計1件

私立中学への進学に関する相談であった。

〔学習〕 男62件・女41件；計103件

相談内容のうち、「授業中の態度」に関する相談が11件と最も多い。この中では、先生の話聞いていない、私語が多い、という訴えが多く、中には、授業中席をたつなど好き勝手なことをする、という相談も2件あった。次いで、「学習のしかた」を問うもの、「自主的学習意欲をつけたい」「読解力をつけたい」が各10件。「ケアレスミスが多い」9件と、小1と同様に多くなっている。その他「本を好きにさせたい」という相談も比較的多くみられた（7件）。

〔生活〕 男118件・女30件；計148件

相談内容のうち、10件以上のものを挙げると、「落ちつきがない」「消極的、授業中発表できない、内気」といった相談が各14件。「自主性がない、やる気がない」が13件。「動作が遅い」「友人関係がうまくいかない」という相談が各11。次いで「根気がない」9件、「整理・整頓ができない」「運動が苦手、鈍感」が各8件、「すぐ泣く」「集中力がない」各7件の順となっている。

〔健康〕 男4件・女3件；計7件

内容は、「夜尿症」「夜驚症」「おもらし」「下痢をしやすい」「風邪をひきやすい」「肥満」についての相談が各1件ずつであった。心因性と考えられるものが多いようだ。

〔全体のコメント〕

相談のべ件数は259件で、小1に次いで多い。そのうち生活に関する相談が、小1の場合と同様、最も多くなっている。さらにその中でも、男児をもつ親からの相談が、女兒に比べ3倍以上と多いのが目立つ。このことは、学習に関する相談は、男児が女兒の1.5倍の件数しかないことを考えあわせても特徴的だといえる。やはり、男児の方が活発で、落ちつかないようにみえるためであろう。

8歳児は、体力がつき手足の運動機能も発達して、精神的にも身体的にも旺盛な活気があふれ始め、活発な遊びも多くなる時期である。急にきかん坊になったり、宿題をいいかげんにして急いで遊びに行くのも、この年頃である。このような発達過程における特徴も、これら相談内容によく反映しているといえる。

また、学校での生活にも慣れて緊張も解け、学習に対する姿勢や学校生活の様子に、それぞれの子どもの個性や特徴がだいぶ明確になってきたことがうかがえる。個人面談などで先生から注意を受けたことがもとになって、相談をしてくる場合も多くなっている。

#### (4) 小3について

〔進路〕 男1件・女2件；計3件

中学進学や入試に関する問い合わせが2件、受験勉強の指導法の相談が1件であった。

〔学習〕 男38件・女26件；計64件

相談内容のうち、「自主的学習意欲をつけたい」とするものが8件で最も多い。次いで「読解力をつけたい」が7件、「家庭学習のしかた」を問うもの、「字が乱雑」と訴えるもの、「読書を好きにさせたい」がそれぞれ5件となっている。自主的に勉強する子になってほしい、という願いは、やはりどの学年においても共通するもののようだ。

3年生の学習相談について気づくことは、その多くが、ただ成績がよくないというよりも、各教科ごとの状態を訴えてきたり、例えば、文章題ができない、考える力がない、書き表わす力がない、という具体的な問題をあげて相談してくるようになってきていることである。

〔生活〕 男46件・女31件；計77件

相談内容のうち、「友人関係」が8件で最も多く、次いで「根気がない」「落ちつきがない」「自主性、やる気がない」「集中力がない」の4項目がそれぞれ7件となっており、これら上位5項目で30件を占める。

社会性の発達という観点からみると、8歳台の後半から9歳台にかけては、外向的になりはじめ、集団を組んで行動する、いわゆるギャングエイジの始まる時期といわれる。大人に対する従属関係よりも友だちとの関係が深まり、友だちの批判を気にしはじめたりする。

小1、小2ともに友人関係の相談は多かったが、小1では、友だちがいないという訴えが多いのに比べ、学年が進むにつれて、グループ行動がうまくできない、いじめる、あるいは、いじめられる、という相談が増えてきている点は上に述べたことに関係していると考えられる。

〔健康〕 男2件・女4件；計6件

「夜尿症」の相談が2件、「てんかん」「ぜんそく」「吃音」「自律神経失調症の疑い」に関する相談が各1件であった。

〔全体のコメント〕

相談件数は150件で、小1、小2と同様生活に関する相談が最も多かった。しかし、小1、小2に比べ、生活に関する相談件数と学習に関する相談件数の差が縮まってきたことは、学習に対する関心が高まってきたことを反映しているとみてよいだろう。

月別では、8月、12月が多く、他学年と同様である。

#### (5) 小4について

〔進路〕 男4件・女1件；計5件

内容は、いわゆる有名校を希望しているので、その中学校、入試および受験勉強のしかたを問い合わせたものである。

〔学習〕 男43件・女18件；計61件

相談内容のうち、「自主的学習意欲をつけたい」というのが16件で最も多かった。特に男子について顕著である。4年生になったのだから、学習の自立をはかりたいという親の気持がうかがえる。その他、成績が思わしくないので、家庭学習のしかたや、各教科の勉強法についてなど、学習方法について回答を求める相談が多かった。

〔生活〕 男19件・女9件；計28件

いろいろな方面についての相談であるが、際立ったものは特になかった。「根気がない」「落ちつきがない」「集中力がない」「反抗的である」など親の目からみて困った生活態度についての相談であった。

〔健康〕 男2件・女0件；計2件

「夜尿症」「てんかん」に関するものであった。

〔全体のコメント〕

相談件数は96件で、学習に関する相談が多く、月別では、8月・12月が比較的多かった。

#### (6) 小5について

〔進路〕 男1件、女2件；計3件

進路に関するものは少なく、内容も小4の相談とほぼ変わらない。

〔学習〕 男39件、女14件；計53件

小5でも「自主的学習意欲をつけたい」というのが最も多く、高学年になると、学習の自立が大きな課題であるように思われる。小4と同様「成績が悪いので、どうすればよいか」という相談も比較的多かったが、その他で際立つものは、あまりなかった。

〔生活〕 男20件、女3件；計23件

特徴的なことは、女子に比べ男子をもつ親からの相談がきわめて多いことである。内容は「友人関係」についてのものや、「落ちつきがない」「わがまま」などいろいろであった。

〔健康〕 男1件・女0件；計1件

「夜驚症」に関するものであった。

〔全体のコメント〕

相談件数は80件で、小4と同じく学習に関する相談が多かった。また、月別では、7月・9月・12月が多かった。

#### (7) 小6について

〔進路〕 男1件・女1件；計2件

相談件数も少なく、内容も小5とほぼ変わらない。

〔学習〕 男16件・女10件；計26件

小6でも同じく「自主的学習意欲をつけたい」という相談が最も多い。子どもの学習の自立をはかることに親が苦勞していることが、これを見てもわかる。その他、「家庭学習の具体的やり方」を尋ねてくるものも多い。

〔生活〕 男4件・女1件；計5件

相談内容は、小5とほぼ変わらなかった。

〔健康〕 計0件

健康に関してのものは無かった。

〔全体のコメント〕

相談件数は33件で全学年を通して最も少なかった。学習に関する相談が大部分を占めており、生活に関する相談が少なくなったことが特徴と言える。

月別では、4月・7月・8月・9月・1月が比較的多かった。

#### (8) 中1について

〔進路〕 男4件・女3件；計7件

内容は、在住地周辺の高校状況の問い合わせや他中学編入の試験に関してのものであった。

〔学習〕 男27件・女20件；計47件

内容は、「自主的学習意欲をつけたい」「家庭学習のしかた」についての2項目があいかわらず多かった。ただし、「学習のしかた」については、国語・社会・理科など教科ごとに問い合わせるものが目立ち、教科の得手・不得手ははっきりしてきているように思われる。

〔生活〕 男10件・女4件；計14件

「集中力がない」という相談が比較的多かった。その他、「動作がのろい」「根気がない」「反抗的である」などの相談であった。

〔健康〕 男1件・女1件；計2件

「チック症」「身体に関する悩み」の2項目であった。

〔全体のコメント〕

相談件数は70件で、月別では、7月・8月・9月と12月が多かった。

相談内容については、「編入試験の問い合わせ」「教科別の勉強方法」の相談が特徴としてあげられるが、その他は、小学校高学年の相談と大差なかった。

#### (9) 中2について

〔進路〕 男11件・女19件；計30件

内容は、「受験勉強のしかた」が14件で最も多く、「高校入試」「高校選択」に関するものが次いで多かった。

また、11月頃から進路に関する相談が多くなった。来年度いよいよ中3で、受験を身近に感じ不安を抱いている様子がうかがえる。

〔学習〕 男26件・女55件；計81件

「家庭学習のしかた」についての相談が27件とあいかわらず多かった。しかし、「自主的学習意欲をつけたい」という相談は、小学生に比べて少なくなり、中学生の後半になると、比較的自ら勉強するようになる

のではないと思われる。

教科別では、「数学の勉強法」についての問い合わせが多く、特に女子に多くみられた。この時期になって、数学を苦手科目にする者が増えてくるのがうかがわれる。

〔生活〕 男4件・女3件；計7件

内容は、「集中力がない」「イライラする」などが多かったほか、「友人関係」「家族関係」など人間関係についての相談が特徴的である。

〔健康〕 男1件・女2件；計3件

「身体についての悩み」「どもり」「不眠症」の3項目であった。

〔全体のコメント〕

中1までと比較して、進路に関する相談が増え、生活に関する相談が減ってきた点、および、女子からの相談が多くなった点が特徴と言える。

受験を意識するようになるからだと思うが、「不得意科目を征服したい」「受験勉強のしかたを教えてほしい」など、勉強に対して積極的になっている様子が見え始める。

月別では、10月と3月を除いて毎月10件前後の相談があった。特に、12月は26件と最も多く、学習に関する相談がほとんどを占めていた。

#### ⑩ 中3について

〔進路〕 男33件・女30件；計63件

「高校入試」「高校選択」に関する相談が27件で最も多く、「一応志望高校は決めているが、偏差値が低いので、志望校を変更した方がよいかどうか」を問い合わせるもの「今の成績で志望校に合格するか」「入

試にはどんな問題が出されるか」などが、主な相談であった。

これらの相談をみると、志望校決定に偏差値が大きく関与している点が見え始める。

その他、「受験勉強のしかた」について尋ねるものも多かった。さらに、「将来の進路・職業」に関する相談も12件と多く、相談者のほとんどが、将来やりたい職業を具体的に決めていて、その職業につくにはどのような高校・大学を選び、どんな進路をたどればよいかという内容であった。

以上の点から、高校受験が将来の進路を決定するひとつの重要な節目になっているように思われる。

〔学習〕 男16件・女37件；計53件

やはり、「家庭学習のしかた」に関する相談が最も多かった。その他、「能率的な勉強ができない」と悩んで相談にくるものも多く、受験を前にして勉強に対するあせりが出ていることが感じられる。

〔生活〕 男11件・女10件；計21件

友人・家族・異性などの「対人関係」に関する相談が12件と大部分を占めているのが特徴としてあげられる。特に、今までみられなかった「異性」に関する相談が4件あり、異性への関心が芽生えてきたことがうかがえる。

〔健康〕 男3件・女0件；計3件

すべて「視力が低下して悩んでいる」相談である。

〔全体のコメント〕

相談件数は140件で、4～8月・10月・12月が多かった。やはり、進路に関する相談が圧倒的に多い。初めて経験する高校受験が、彼らに大きな影響を与えているように思われる。

(以上)

# 教育対話・その指導と実践

5

東京・京都・四国・九州に設置された全家研本部を軸に、全国の各支部に所属して教育対話業務を担当される主事は、現在 298 名に及んでいます。この数多い教育対話主事は、殆どすべて、その地域の小学校もしくは中学校の校長の職歴を有たれる方々にてその豊かな経験と人望とは、会員家庭をはじめ、普及活動の第一線に活躍する賛助会員(モニター)の信頼を集め、全家研運動の力強い推進力となっています。家庭における教育上のさまざまな問題に対応して、親しく語りかけるその指導と助言の実践活動は、ともすると画一化されようとする今日の教育事情の中で、現に育ちざかりの子を持つお母さんと子どもの閉ざされた心の目をひらき、明るい希望へととぎやう、大きい役割を果たしておられます。

## 私の対話活動

—教育相談—



鈴木庄五郎

(東三河支部)

### これからの対話活動

私の今までの仕事は、集会、セミナー、ポピーの使い方教室、講演会と支部の月行事的なことが中心で、大通りをトラックがかけぬけて行くような仕事が多かったが、これからはこれを縦糸としていきたい。今は大通りから横丁裏町の巾狭い道路も走り入らなければならない時にきている。大通りは商店街でお客様は裏町横丁の人が大部分になってきている。お客を待つような教育相談でなく自分で出向いていく、支部にもモニターにも迷惑をかけない集会なり教室なり相談なりの対話活動が他面に横糸として行われなければならないと思う。縦と横の特徴を生かした織物、織りなせる綾に、活動によって会員に或る程度の満足を得てもらえるのではないかと思ひ、小まわりのきく、きさくな主事になりたい。特に近頃三谷地区蒲南地区のように全児童の20%以上が会員となっている地域は、様々な会員とその父母をもち、また多くの会員をもっているモニターにとっては対話のことと退会者との関連についても大変困っていると会議の話題になっている。実際の対話活動も、裏町に退会しそうな会員に、薬をも掴む気持でポピーっ子になった会員とその父母を思うと対話活動の日常化に向かって進むべきであり、待つ教育活動でなく、自分から出向いて行く教育対話活動があつてしかるべきだと思ふ。

### 対話の失敗談

小学時代は母親のいうことも素直に聞いたり、実践

したりして学習成績も割に優秀でよい子でしたが、中学に入学5月の中頃からさっぱり勉強しなくなり、私のいうことも聞かなくなってしまつて困っています、一度相談にのつてほしいと母親から電話で直接に要請があつた。

訪問して3人で話し合いをしようと思つてK子をやんだら、私の顔を見てしぶしぶ坐つたが、母親が何を言つても一言も口を開こうとしない。これでは相談どころではない。こうした所まできてしまつている親子の間に何かある、どうしたら親子でなんでも話しあえる空気にならないかと考えた。そこで私は子どもの心を十分にぶちまける機会を持つと思つて、親子別々に話を聞くことにしました。ほんとに大失敗であつた。中学生の心理も考えたが、甘くたかをくくりすぎたようだ。母親にK子にはあまりしつこく、怒らないでほしいと注文をつけて帰宅した。K子は私が保育園に勤務してつた時の園児で、母親はPTAの役員、祖父はロープ製造業で裕福な町の有力者。父は支部長と一緒に青年会議所、海洋少年団の指導者として活躍される穏健な人。母は家つきの娘であつたが教育熱心で、漁師町特有のざつぱらんの性格であつたが、稍神経質気味のような気がした。

### K子の言い分

① 4月末に担任の家庭訪問の時K子のいる前で子供の悪いことばかり全部話してしまつた。

私はほんとうに困りました。中学生になつて一生懸命にやろうと決心し、努力してつた矢先に母親にいわれて、恥ずかしいというより、先生に信頼されない子になつてしまつたというショックの方が強かつた。

② 5月に入つたある土曜日にクラブ活動のために弁当が必要であつたが、忘れたので母親に届けてくれるように電話で頼んだら、持つてきてくれた。母は校長に挨拶に行つたその場に教頭氏がいて、私は今からあの教室の方に行くから渡してあげましようというよ

うなことで彼も深い考えもなく授業中に担任に弁当を渡し、担任から本人に渡された。その時、組中の子の目が一斉に教頭氏と私に注がれ、私はほんうに恥ずかしさで穴に入りたい気持でした。母親の仕方に怒りました。母が直接私に手渡ししてくれたら感謝したでしょう。クラスの皆がどんな目で私を見たか、それを考えるとむやみに母への腹立ちが強くなった。

こんなことがあって反抗的になって勉強もしなくなり、母の云うことは一切聞かなくなり、つとめて母に近づかないようにした。

母親は少しヒステリーのようにになり私の機嫌をとるようなことを云うようになり、父とヒソヒソ話をするようになったことに気がつき、少し母が可哀想だなと思うようになってきました。と、K子は保育園の時分から知っている私に気軽にこう話をしてくれました。

次の日父母にK子の話を伝えたら、少しもそんなことに気がつかなかった。私はまだ小学校時代のままだと思って何気なくやったことです。子供は子供でなくなっていくところがあるんですね、これが子の成長ですね。娘心は知っていましたが私は娘の立場に立つてものを考えたり、見たりしなかったから。

帰って来たら私の方がK子に頭をさげます。

漁師町の育ちらしくあっさり自分の非を認めてくれて、私はホッとしました。父親は一言「なんでも話しあえる親子、対話のある親子とは口でいうほど簡単ではないですね」と。

こんな失敗があって私は親子3人で話し合いをする時には、問題の内容と学年によって子と親と一緒にやったり、第一回に父母の話を十分聞き、第二回目に子の意見を聞き、次に三人で話し合うようにすることの二通りにわけて行っています。母親の中にはほんとうのことをいってくれない、かざっている人。子がうそをいう時もある。子供と親の見方考え方の相違もあるのでこの方法を私はとっている。この記事を書くにあたって思いだしたようにK子の家に電話をしたら、母親は朗らかに、K子の来春の高校入試について相談したいから、休中の日曜の父のいる日に一度遊びに来るように誘われた。

### ある子のポピー学習

この子の家庭学習はどうかえていったらよいだろうか、一度見てやってほしいと4月はじめに小学校6年生の男子の母親からの要請で訪問した時のことである。その時5年生のポピー学習を見せてもらった。字は乱雑であるが大体やってある。

母「この子は根気がなくやり始めたと思うと30分位でキャッチボールにとんでいってしまう。もう少し落ちついて丁寧に何事もしてくれるといい子ですがね」算数の所々に落書きがしてある。「あほう」「ばか者」

「またやったな」

主「これはなんの落書きだね」

T「ぼく自分で怒ってきた時知らずに書いてしまったんだ」

主「またやったなは」

T「学校で先生にいわれたことをポピーでもまちがえてしまった時だったかな」

Tは気分よく何のためらいもなく短い言葉ではあるが自分の気持を記す。こんな素直さと努力がきつと、この子を向上させることでしょう、教材ポピーは、他人のものでも母親のものでもない自分のポピーである。こんなすばらしい反省と自分を自分ではげます態度は、隅から隅まできちんとやる、長時間やった、字がきれいに書いてあることよりポピー学習の質的内容は短い時間であっても豊富である。

勉強をしよう。これを覚えようという気持がいったいの子である。自分で自分の欠点を知り、自覚して自分で努力するこの子の姿は何ものにもかえがたいものです。

全家研の研究紀要に、5年生でしたか、自分で自分の頭をたたいて「コラ、おまえばかか、またまちがったな」といっていた子が、大変伸びた、お母さんの辛棒勝ちであったという記事を思い出して、同じようなことだと思ってこの記事のことを親子に話したら、子どもはニコリ笑っていたが、母親は、目がうるみ、満足そうな顔でうなずいていた。

## 教育対話活動管見

吉田市蔵

(福岡中央支部)



### 1. 父親と子どもの結びつき

私は月遅れの盂蘭盆に恒例の全国高校野球選手権大会の実況放送を楽しんでいた。試合は横浜高校と江戸川高校の試合であった。アナウンサーが横浜高校の足立選手を紹介した。足立選手は、「自分がこの晴れの甲子園に出場できたのはお父さんのおかげです。」と語ったという紹介である。父親は足立選手が左打ちができるようにと特訓したという。そして、「50歳の若さで死去し、この応援5万人のどこかで、母親が亡き人の遺影を抱いて応援しているだろう。」ということであった。

私の乏しい教育対話活動の経験ではあるが、現在の子どもたちは、父親の恩愛を強く感じている者が極めて少ないようだ。これは父親自身はもちろん、母親も反省しなくてはならないことでもある。この点に現在



の家庭教育の問題点があるようである。

「あなたのお父さんはどんなことをしているのですか。」という問いに対して、「会社」と答える。会社が何という名称かも知らず、会社がどこにあるかも知らず、まして、その会社で父親がどんな仕事をしているかを知らない子どもも相当いる。この点、まず父親はもっと反省して、父親のあり方を考えるべきであろう。子どもが成長していくためには、もちろん、母親の力は大きい。しかし、父親の存在を忘れてはならない。父親と子どもとの係りあいがあるべきかという具体化については、その子が女兒であるか男児であるか、また何歳であるか、祖父母も含めて、どんな家族構成であるかといった、具体的な場に応じたものでなくてはならない。ただ、子どもの心の中に父親がどれぐらいの座を占めているかということである。困難なことであろう。しかし、父親はもっとわが子を慈しみ、愛情こまやかにあるべきだという考えが、足立選手の紹介を聞いたとき深く考えさせられた。

## 2. 幼児のころから豊かな経験を持たせたい

数年前のことである。4年生の男の子の母親から、「算数ができないので何とか解るようにしてくれないか。」という相談があった。つまりきのところを調べていくと、3年生に出てくる「長さ」「重さ」のところであることがわかった。1メートルがどれぐらいかということはすぐに理解できたが、2キロメートルがどれぐらいの距離なのか、4.5キロメートルは家から考えてどのあたりかという実感がない。重さにおいても同じであった。これは目で見ることができないので、長さよりも一層抵抗があった。

このことから考えられるのは、小学校低学年の勉強は、机に就いて絵や文字を書くこともあろうが、それよりも、生活することの方が重要である。ところが一般の母親は、机の前に座ることを勉強と考え、他は遊びとしている傾向が強い。低学年の勉強とは、この有意義な遊びが大切である。相談に来た母親に買い物の行き帰りを歩測させたり、買った肉や果物の重さを量らせるように勧めた。それからは徐々にではあるが嫌いな算数が好きになってきたと言うまでになった。現在この子は名古屋市に転居しているが、数えるで中学3年生になっている。

なお、これは中学3年生の女生徒の例であるが、理科だけが得意な例もある。よく分析してみると、化学や物理や地学に関することは実によく理解している。ところが、生物I（動物・植物）に関してさっぱり理解ができていない。中学生の勉強は、机に就いて「覚える」ことが主軸になるが、小学校低学年の実験観察が基点となって発展していると思う。私は母親に、「おばあちゃんの花造りや養鶏のお手伝いをさせ

てみてはどうか。」と勧めた。この生徒には、この生活がどれほど役立ったかどうかは不確かだが、現在は有名高校に合格し、大学進学を目指してコツコツと意欲的に勉学に励んでいる。

総じて、都会の子どもは自然に接触する機会に恵まれていない。これを痛感するのは、中学生の教材に出てくる俳句の季語（季題）の指導の場合である。鶏頭がいつ咲くのか、山吹がどんな色でいつごろ咲くかほとんどの子どもが知らない。幼児のころから、自然に密着した豊かな生活経験を持つことの重要性をしみじみと考えさせられる。

## 3. 本を読む子を育てたい

先日出席した小集会は、夏休み中のことであったので、4人の母親と小学生6人であった。全家研の趣旨を話し、子どもの8月号を見ているうちに予定の2時間は経過した。子どもたちを屋外に遊びに出して個々の教育相談に応じていた。そのとき、ある母親から「うちの子は本を読まない。」という相談が出た。本を読む子を育てたいという願いは相当高度の願いである。他の3人の母親の考え及ばない問題であったようだ。眼を輝かして聞いてくれたことでそれが想像できた。

近ごろの子どもは、テレビの影響（それが一方通行であること）から来る被害者である者が多い。私が接した子どものうち、視聴時間が5時間を越している子もいた。これでは、親は何をしていたかと問いたくなる。子どもを自由に伸び伸びと育てるといふ名のもとに、子どもを放任しているのである。まして、両親が勤めに出ている都会の子どもの中には、公園・遊園地で遊ぶことも知らず、テレビに見入る子どもも存外多いのではなかろうか。

武将物語でもよい、小説でもよい、好きな空想物語でもよい、夢を育てる「読書」をすることの意味を痛感する。私はこの母親に、家族がそろそろ夕食後、家族みんなが読書することを勧めた。父は父の本を読み、兄は兄の本を読む。母と1年生の弟とは、絵本を回し読みするのもいいだろう。そうした読書の時間を設定するがよいと語った。これを聞いていた他の3人の母親も、「読書生活」の重要性を深く考えていたようであった。

## 4. 夢を持った子どもを育てたい

多くの子ども、多くの親と接して痛感することは、あまりにも目前の功利にとらわれていて夢がない、夢が小さいということである。「この宝飾店を継いでくれればよい。」「せめて私立大学でいいから合格できるようにしたい。」といった願いが多い。そして、それが子どもの願いになっていけばよいのだが、親の願いであり、与えられた夢である。親から勉強を課せられ、

親の発案で海水浴にも行くといった極めて消極的で意欲のない中学生が多い。幼い時期の過保護、溺愛がこんな子どもを作ったのであろうか。

私は、人の活力は「目標」をめざして進むところに生まれると思う。このことを考えると、ただ「ポピーをなさい。」という前に、その子のやる気がどれだけあるかということの方が大きな問題である。全国高校野球の放送を見ていると、選手たちは痛ましいほどの情熱で白球を追っている。この姿を通して、勝ちたいという意欲、監督の情熱に応えるという責任感、あるいはまた、スタンドの応援団と一つ心になって母校の名誉をけがすまいとする必死の願いを察することができる。夢は小さくてもよい。あるいはまた、手の届かないような大きな夢でもよい。夢に向かってファイトを燃やして生活する子どもであってほしいと願ってやまない。試験の結果、点差で親友より勝ったと喜ぶのもよいだろうが、自分の心の戦いに勝って喜ぶことの方が、もっと尊いもののように思う。

以上、私は4項目に亘って時に感じたことを述べた。このようなことを念じながら、今後も対話活動の道を歩み続けたい。

## 対話活動—実践の

### 一事例



伏木 栄子  
(旭支部)

小学校教育に40年余、この道一筋に生き甲斐を求めつつ歩んで来たが、愈々退職の時を迎え、ホッとした解放感と同時に、目標を失った物淋しさの日々を数日過ごした。このまま家庭の中に埋もれたくもなしと思案。退職直前から各方面から私に寄せられた好意的な要請に対し真剣に考えてみた。その結果、教育対話主事こそ私の性に合った生甲斐ある仕事であるという結論に達し、5月始めから参画させていただくことになった。以来1年数か月、ただただ五里霧中の歩みであるが、最近になって漸く軌道に乗つつあるように思われる。ここに実践事例の一端を記述して諸先生方のご指導を仰ぎたいと思う。

#### 個人差に応じたポピーの学び方学ばせ方

##### (1) モニターより電話相談 (S55・2・4)

「学力の一段と低い4年生男児のポピー指導について、親自身も落ちこぼれ児童であることに気付き、何とか普通児に引き上げたいとポピーによる家庭学習をはじめたが、どの教科もさっぱり解らず、母親もほとんど手を焼き、ポピーはたまる一方で仕方がないから

退会させてほしいという会員さんがいるのですが、何かよい指導法があったら教えて下さい」と。そこでモニターとよく話し合い、悩める親子をお互いの協力によってどこまで救い出せるか、能力に合ったポピー学習の定着を目指して努力してみることにした。

##### (2) K男並びに母親との面接懇談並びに考察

先ずK男の実態把握と現在に至るまでの要因をおさえて治療法を考えることにした。

○大病をした事は一度もなく極めて健康体、幼稚園時代は明朗快活で特に細かい点によく気付き、誰からもよい子だとほめられていた。

○第1子のため入学前の準備、特に必要な学力が解らず、1日入学時の先生の話に真に受け、自分の姓名が書け、10の数え方が出来る程度で入学、学校から帰宅すると、直ちに戸外遊びに熱中、夜は復習もせず疲れて眠るのみ。この連続で学習には興味を示さず、1年生前期から学習の習慣づくりが全然なされず、基礎学力が定着せず、これが先ず学力不振の第一の要因である。(親の放任・不注意)

○K男の下に弟が二人、男子ばかり三人かかえ、母親は子育てに忙殺。父親は小学生時代は大いに遊ばせる主義。能力さえあれば高学年になれば何とかなると、子供の力を過信したのが第二の要因であろう。

○学年が進むに従い能力を発揮するどころか差は益々広がり、友達関係も円満を欠き、次第に卑屈な性格となり、消極的な行動になりつつあるため、親自身もこれは大変とポピーによる家庭学習をモニターの指導により始めたが、4年生後半の学習には到底ついていけず、今回の対話主事への相談となった。時既に遅しの感が深く、低学年からの習慣づくりの重要性を母も子も認識したが、基礎不徹底のまま当該学年のものに取り組ませようとしたことが勉強嫌いの第三の要因のようである。

##### (3) K男についての観察と診断

○体格は小柄であるが骨格はしっかりして居り見るから健康そうである。知能指数は不明であるが極端に劣っているようには見えず。家庭学習の習慣化がなされず、毎日の復習を怠り基礎不徹底のまま学力不振児となったようで、九九不完全、加減計算速度極めて遅く、漢字の読み書きに抵抗あり、基礎能力2年生程度と診断した。

○性格は常に何かにビクビクしているようでおおらかさに欠ける。学力不振がKの性格をも変えていくようで実に心配である。能力に合ったポピー学習により、基礎力の育成に力点を置き、一步一步確実に、地味に急がず、母も子も忍耐強くやる気を持たせることが肝要。そのためには、ほめ言葉を出来る限り多く使うよう心掛け、自信を失わせる言葉を極力慎むよう親も周囲の者達も意を用い、本人に自信を持たせるように

導いていきたい。

#### (4) 個人差に応じたポピーの学び方学ばせ方

○母親の都合のつく土曜の午後K男と共に支部訪問、対話主事とポピー学習開始。K男にはポピーの学び方を順序をふまえて指導。低学年の基礎的なものを、1, 2枚勉強させ、出来た喜びを味あわせポピーの楽しさを体得させた。母親には家庭教育の重要性を説き、母親の熱意が子供の変容につながることを指導すると共に、ポピーのやらせ方を理解させた。

○遠距離のため対話主事がこの子一人にかかわって居るわけにゆかないため、好意あるモニターが対話主事に代ってK男の学習に協力。日曜日や春休みはモニターの子と一緒に勉強させてくれることになった。母親は心から感謝し、モニターにも礼を尽くし本腰が入った。

○K男の能力では当該学年の教材は無理な点が多いため、月遅れの漢字と計算問題を、2年生・3年生のものを送り、まず出来た喜びから学習への興味づけをしつつ、基礎力養成の学習を展開。出来たものには大きな丸と賞言を欠かさず、やる気を起こすよう仕向ける。

○家庭に於ては弟(1年生)を含め、学習の時間帯を決め、1日1枚の原則を破ることなく実行。母親の根気と努力、父親の協力によって子供の取り組みの姿勢を一步一步確実に育てていくように指導した。

○学習は初めは高度なものを的にせず、基礎に重点をおき、当該学年のポピーは、母親の学習指導の手引とし、宿題をやる時の参考に使ひ、専ら基礎の不徹底を補充することに努め、やる気のある時は2枚3枚と低学年のものからやらせ、徐々に当該学年へと移行させるように導いた。

○母子共学、母親の都合のつかぬ時は父親が協力、家庭内の雰囲気も和やかになる。出来が悪くても叱らず教えてやるようにした。

○石の上にも三年の諺があるが、3年がかりで頑張ろうと計画した。3か月目の6月頃から、5年生への進級をきっかけに自主学習に導き、そのために次のような約束をした。自主的にポピーをやった時は三重マル、勉強は、と一言でやった時は二重マル、2回以上うながされた時は一重マル、やらなかった時は△を暦の空白欄に毎日記入。1枚終わったら答え合わせ、出来ない所は手引で調べる。100点になるまで頑張ること。根気力を植えつけるためにも親の忍耐も一通りではないが、現在のところ懸命に頑張っている。

#### (5) K男の変容について

○こうした父母やモニターの努力がK男自身のやる気を育て、5年生になって先生の話がよく解り、学校が楽しくなった。

○モニター宅での勉強は以前より回数は減ったが気が

向けば出かけ、態度が明るくなった。

○然し親が気を許すと学習意欲が後退する。

○夏休み始め成績表を持参して支部訪問、4が一つ出来たことを大いに賞揚、母子の辛抱の大切さを強調、今後のポピー学習を約束した。

以上は1事例であるが、こうした対話主事、モニターの心づかいが退会防止につながり、他にもよい反響を与えていることは確かである。「退会希望の会員さんがあるのですが……」と、モニターから電話のあった時は、了解を得て直接その会員さんと話し合ったり、小集会を開いて子供の心理を把握したポピーの学び方、学ばせ方を細かく説明してやると、親自身が自分の学ばせ方を反省し、必ず続けてやってみますということになる。低学年は殊に母親の熱意が子供のポピー学習を左右し、この熱意こそポピー学習を成功させるカギである。低学年で放任状態におかれたK男の学習は、親の目覚めにより、ポピーの基礎力の育成から、ようやく学力不振児から救われつつある。

私は、今日も連絡の途絶え勝ちの母親に電話をして勇気づけ、その体験を貴重な人生経験として次の子のために役立てるよう励ました次第であるが、今後も全家研の趣旨を体し新たな生甲斐に燃え、モニターの育成に、ポピーの退会防止に、更に家庭教育の充実のために、対話活動の輪を広げようと及ばずながら努めている。

## 教育対話雑感

足立 富男

(西宮支部)

### はじめに

対話主事になったのが昨年の5月、やっと1年ばかりの短期間の経験でものをいうのはおこがましいことであるが……。

校長退職後どこか公的な施設で奉仕的に働くことが出来ればと考えていたが、先輩の勧めで全家研に対話主事として参加することになった。その際、唯一気にかかったことは、「ポピー」の普及を使命としている支部に所属することである。そのため営業活動の中に組み込まれてしまう恐れがないかということであった。普及や販売には関係しませんよと支部長に強くな念を押したものだ。

しかし、この心配は取り越し苦労であったようである。要は私自身の心構えの問題であることが、だんだんはっきりしてきたからである。大勢のお母さんたちが私に先生として敬意を払い、たいして魅力もない話

に耳を傾けてくださるのは、やはり全家研の組織の力である。そのお母さんたちに感謝しながら、それぞれの子どもたちが、たとえ僅かずつでも望ましい方向へ成長を遂げてくれることを祈り、そこに生甲斐を見出す毎日である。

### ポピーは道具

「せっかくポピーを買ってやったのに、喜んでやったのは最初の内だけ、近頃は殆ど手をつけなくて残ってしまうんですが……。」と訴えられるお母さんがいる。

このお母さんはポピーが道具であることを忘れている。ポピーを買って子どもに与えてさえおけば、学校の成績がひとりでもよくなるものと盲信しているのだ。しかしポピーは残念ながら、そんなすばらしい働きを具備しているわけではない。

ポピーは単なる学習の資料にすぎない。だからポピーを生かすも殺すも、指導する母親と学習する子どものくふうと努力にあることをわかってもらわねばならない。

本部のいう「ポピーの使い方の十四手順」も生かし方のくふうのひとつである。母親が協力して、その子に即した活用法を生み出していくことこそ大切である。毎日の積み重ねを重視し、しごとをなしたげた喜びを自分のものとするように、共に喜んだり励ましたりすることによってこそ、主体的な学習の習慣が子どもの身につくのである。

### 早期診断・早期治療

4年生になって、子どもが漢字を覚えるのが苦手であることに気づき、あわててこの夏休みに3年生の教科書に出ている漢字から復習を始めた話を聞いた。熱心なお母さんではあるが、なぜもう少し早くそのことに気づかなかったのかと悔やまれてならない。

早期診断、早期治療などという癌のことかと思われるかも知れないが、早期の発見と手当ては病気だけではなく、学習面でも読面でも肝要でゆるがせにすることはできない。

あるお母さんから聞いた話、3年生の娘が掛算の筆算で満点をとったことがない。やらせてみると計算方法はよく理解しているのに。

そこで最近のテストを引張り出して克明に調べてみた。その結果、六の段の九々のひとつを間違えて覚えていることがわかり、やっと満点をとれるようになった。

学級担任の先生が日常の授業の中で問題点に気づき、直してくださるのが当然であり、それこそ先生としての本領であると考えるのだが、近頃の先生はお忙しいのでそこまで手の及ばない場合も多い。

母親は学習指導の専門家ではないのだから診断や治療の方法については、小集会などで話題としてとり上げたいものだ。ポピーはこの面でもすぐれた資料として使える。

### 十人十色

とかく日本人は群衆心理にかられ易いといわれる。隣りの子がソロバンを習っているから、ピアノを買ってもらったから、というので右へならえをすることも少くない。自分の子を十分抱えないでいて、隣近所の子どもにばかり目を配り、心配してみたり、安心してみたりする人が多い。

もっとよく自分の子をみなさいと言いたい。

現実の社会は十人十色、それぞれ違った個性をもった人間のあつまりで、同じ人間は存在しない。顔かたちも考え方や能力もみんな異っているのである。もし世の中が全く同じような人間で構成されていたら、これほど面白くない社会はないであろう。

子どもがすばらしい可能性のもち主であることは全家研の主張である。しかし、すべての面で可能性を伸ばすことはまず不可能に近い。子どもの個性をみつけ、それを十分に育てていくことがまず要請されるのではあるまいか。

### 母親の心の安定を

「計算はまあできるんですが、文章題となるとからっきし駄目なんです。」というふうな学習のことから「うちの子は後始末が全然できないんです。」というような読の問題、はては健康のことや性格のことなど、お母さん方の心配の種は尽きない。

しかし、具体的に子どもの生活にまで立ち入って聞いてみると、その原因が家庭生活、特に母親の生活態度にあると思われることが意外に多い。驚くほどのスピードと振幅で変転する社会の中で、お母さん達が不安と焦燥にかられるのはやむを得ないことではあるが、これでは家庭教育がうまくいく筈がない。

やれ書取だ、計算だと問題点を追っかける対象療法だけに終始しては駄目である。問題の根本原因にメスをふるう勇気が必要である。

「先生のお話を聞いてなるほどと思い、実行を決意して家に帰るのですが、続くのはせいぜい1週間位で、あとはもとのもくあみです。」

とよくいわれる。社会生活の複雑さと人間の弱さを痛感させられるのだが、お母さんの愛情を信じ、その心の安定を願うばかりである。

### 井戸端会議式小集会

小集会に出かけると、世話役のモニターさんが出席者の少ないことを自分の責任のように詫がられること

がある。大勢集ってくださることは有難いことには違いないが、多いことが必ずしも良いこととは言えない。

私は懇談に入る前に、出席者に自己紹介と子どもの教育上問題点と考えていることを順に発表してもらっている。できるだけ具体的な真相にせまりたいからである。

ところが出席者が多いと、とかくうわべをとりつくりつらった発言が出易いものである。「私のところも同じようなことで……」

と似たようなことを述べてすまじ込んでしまう。適切な助言をするためには、問題の具体的な姿を掘りおこす必要があるのに。

人数が多くなると視野は広げられるけれど、話は抽象的になり易く、一般論や原則論にとどまることが多い。こちらは具体的な例をあげて説明しているのだが、それぞれの子どもの場合に引き戻して、うちの子どもに今日からどう指導したらよいかの判断は仲々つかないらしい。ひどい場合には話の趣旨が誤解されていることさえある。注意すべきことである。

それに人数が少いと井戸端会議的な雰囲気がつくられ、気軽に発言してくれるようになる。こちらがその家庭の状況を知るにも都合がよいし、お母さんたちの情緒の安定のためにも大きな効果がある。

#### おわりに

漢字の筆順がさっぱりの子どもに、学校で新しい字を習ったら、その日にお母さんにも教えてくれるようにとたのんで、子どもに教えてもらっているお母さんがある。

ちょっとしたくふうが子どもに学習への興味を起こさせ、自信を持たせるのである。

これは知育に限らず、徳育、体育の面でも同様である。

対話主事は直接子どもに接することは少い。結局はお母さんに教育の難しさをすこしでもわかってもらい、我が家、我が子の場合の具体的な方法をくふうしてもらうしかない。遙かな道ではあるが、希望をもって歩みたいものである。

## 教育対話主事としての自覚



長原 篤

(熊本支部)

### ○対話集会を通して家庭教育を考える

対話集会の際に、お母さん方から出る問題で、最も

多いものは、

学校の成績が悪いから何とかならないか。

勉強しようとしなさい。

勉強が永続きしない。

遊びや運動に熱中して勉強しない。

テレビ、まんがばかり見て勉強はしない。

毎日続けて勉強ができない。

机には着いているが集中できない。

などである。これを考えてみると、「計画をたてる。毎日続けてする。集中する。進んでする。努力する。」ことができないことの訴えである。

勿論、全部の家庭の子供がそうであるとは言わないが。なぜこのような問題が多く出るのか考えてみる必要があると思う。

その1は、

親や指導する側から考えると、1日1枚のポピーが何故できないだろうかと考えられるが、現在の子供達の環境を考えてみると、その責任は子供達だけに負わせることはできない。子供が小さい間は、「伸び伸びと自由に個性を伸ばすように」と言う考えで家庭教育をしている方が多い。勿論伸び伸びと自由に個性を伸ばすようにと言うのは賛成であり、そうあらねばならないと思う。しかしそのような教育の実践の場で、その言葉の持つ表面だけにとらわれて、真の教育がなされていないではないかと思う。即ち人間として、年齢に応じ、家庭の一員とし、社会の一員として、躰けなければいけない躰や教育が欠けている面が多い。

そこへもってきて、学校へ行こうとすると、学校へ行くようになったからと言って、急に、とってつけたように、子供に要求し、期待しても、なかなかうまくいかない。

その2は、

現在の社会は物質文明に酔っている。現在の子供の世界を考えてみると、日常生活に必要なものすべて何不自由なく生活していると言ってよいと思う。現在の親達は「子供の時代に不自由したので、子供達にだけは不自由させたくない」と言う気持ちからか、不相应に子供達に与えているのが現状である。

何でも、何処でも、何時でも手に入る生活、創意工夫しなくとも、努力苦勞しなくとも生活できる現在の子供達、「計画を立て、進んでする、続けてする、集中する、努力する」こととはほど遠い生活を送っている。

生活面で、もっと自分で創意工夫して生活する部面をとり入れてやる必要があるのではないかと思う。

玩具にしても、全く完成した精巧なものが多い。少し考えた玩具でも完成した部品を組立てたのであがる程度のものである。求める、必要な、欲しい玩具がある。それを作るのに材料は何にするのか、その材料は

どこにあるか、その場所探し、適当な材料を選択し、掘り出したり、切り出したりして持ち帰り、必要な用具を探して、どのような大きさに、どんなにして作っていくか創意工夫をはたらかせて、精魂をこめて、時間をかけて作る玩具や遊び道具は、唯買ひ与えたものとは家庭教育上その価値は大いに異なると思う。

前に述べたように、必要なものが、どこでも、何時でも手に入る生活を続けている子供達にとっては、自分で計画をたて、続けてする、進んでする、集中する、努力すると言う生活は苦痛であると思う。

#### ○親が真の家庭教育を理解してほしい

沢山のお母さん方に接して感ずることは、家庭教育に対して他律的であると言うことである。

ポピーを与えたら成績がよくなる。

ポピーを与えたら勉強しない子も、勉強するようになる。

対話主事やモニターさんが指導してくれる。

子供を集めて勉強させてほしい。

うちの子は一人で勉強しないから家に来て指導してほしい、等々、である。

どうしてこのように家庭教育も他人まかせ、他人に頼るような気持になるのか考えてみたい。

#### その1

日本では学校教育は非常に進んでいる。特に義務教育の就学率では世界最高であると言われている。また日本では教育と言ったら今まで学校教育に頼る風潮が強かった。「子供の教育は先生におまかせします」式の考え方が今まで支配してきた。学校では先生がいて、教育計画を立て、教材教具を整え、実践計画に従って子供達の学習がなされる。家庭教育も学校教育と同じように、親の他に指導者がいて指導してくれるものと言う錯覚をおこしておられる方々があるのではないかと思われる。

家庭教育についての理解が十分になされていない。親として子供を教育しなければならない義務と責任を自覚しておられないような考え方を持っておられる方が多いように感ずる。

#### その2

前に述べたように、日本では生活に必要なものが何時でも、何処でも、何でも手に入る時代である。食生活にしても、衣生活にしても、材料は豊富にあるし、創意工夫して作らなくともすぐ食べられる、すぐ着られるものが手に入る時代である。

材料を求めるのに苦労したり、こしらえるのに工夫をこらしたり、手に入らないから我慢する時代ではなくなった。

このような毎日の生活習慣から、家庭教育までも、自然と自分で教育することから、塾に通わせたり、家

庭教師にまかせたりする風潮が生まれてきたのかも知れない。

家庭教育だけは、自分達の子供として、どのような能力をもっているか、どのような性格をもっているか、どのような興味をもっているか、体力はどのくらいあるか、どんな長所があるか、また短所はどんなことかなど子供の実態に応じた、自分の家庭に合った、一人一人の子供の教育目標をもって、子供との話し合いにより、子供との結びつきによって、創意工夫をこらして根気強く努力していく手づくりの教育をやってほしいと思う。

たとえ、食べものはインスタントを食べても、衣服は既製服で間に合せても、子供の教育だけは、手づくりの教育をやってほしいと心から念ずる。

家庭教育について十分理解をもっていたら、ポピーと言うすぐれた家庭教育教材が本当に生きてくると思う。

#### ○真の家庭教育をみざして

全家研がかかげている目標は、「家庭教育の充実と向上を計る」にある。家庭教育では、親と子との対話と結びつきを通して、人間づくり、学力づくりがなされなければならない。しかし前に述べたように現在の社会の実態、各家庭の実態を眺めるとき、あまりにも歪みや障害が多すぎる。

対話集会や小集会、教育相談等を通して話し合い、理論では理解していただいたようでも、家庭での実際の教育に直面した場合、思うようにいかない場合が生ずることが多い。

しかし古今東西を問わず、親が子供の教育に熱心であることは歴史が物語っている。教育は物を造るように簡単にはいかない。子供に対する熱い限りない愛情と涙ぐましい努力と忍耐と根気によってなしとげられるものであろう。

私共教育対話主事は全家研の目標を十分わきまえ、家庭教育の本質を忘れず、現在の日本の社会の実態を適確に把握し、また各家庭の実態や子供の実態等も常にキャッチし、目標達成のため、根気よく、気長に、努力を重ねなければならない。そして、大きな全家研の理想が達成されるよう、子供を持つお父さんお母さん方と一体となって、真の家庭教育の輪を日本全国に広げ、明るい、平和な、楽しい、幸福な家庭と日本の国が開けて行くよう、全日本家庭教育研究会の教育運動に挺身したい。



誠

藤 波 駿

(埼玉県南支部)

### 1. 1カ年の経験

「いい話しあい、大変参考になりました。また、こうした会を開いてください。」

こういう言葉が聞かれると、「ああ、よかった。」と、自分なりに胸をなでおろします。「常にこういう状態を作らなければ、母親にあきらまれるぞ」と自分に言いきかせて1か年つとめてまいりましたが、果たして相手から見るとどうであったでしょう。

正直なところ、在職中は余り本を読みませんでした。ところが、この1カ年、自分でも驚くほど、本をよく読むようになりましたし、その内容は要約してノートにもとどめるようになりました。しかも母親に理解してもらうための方法や、掲示物等の資料も作り、緊張した日々を送ってまいりました。

「退職後の方が忙がしいね。」といわれますが、私にとっては、気苦勞の多い割に、結構はりあいのある日々を送っております。

### 2. 私の願い

「家の子は余り勉強しないで困るのです。」

小学校上学年の母親から、こういう相談を受けることが多いのです。生い立ちや家庭環境等を聞くと、幼時から過保護に育てられたとか、或は、これとは逆に1・2年の頃から放任というケースが多いのです。

この子達は、低学年の基礎学力が身につけておらないため、その後の学習が困難となり、興味も意欲も余りありません。世にいう、「おちこぼれ」なのです。特効薬はないし、基本からやり直す以外に方法はありません。

教師や親に大部分の原因があると言えましょう。かわいそうなのは子どもです。こうした子どもにしたくない。絶対にさせてはなりません。

低学年の親に、こうした点を指摘して、方策を具体的に話してまいりました。このため低学年の小集会を重要視して、優先させるようしむけてまいりました。

### 3. 1・2年生が最も大事

幼稚園で、父母の会の役員をなさった方が、「家の子も小学校に入学しましたので、〇〇へ勤めるようにしました。」といいます。在職中だったら「ああ、そうですか。」と軽く流したでしょうが、今では無性に

腹だたしくなります。子どもの立場から物事を考えるからでしょうか。

「お子さんが、1年生になられたのですから、1・2年間は、お宅において下さい。」と堂々と親に要求致します。

『子どもは、成育するに従い、いつかは親から離れ自立するようになります。自立してやっていけるようにするには、1・2年の頃が大事。子どもの意欲をおこさせるよう、ポビー等を使って働きかけ、母子共学の中で、学ぶ習慣をつけていく。その中で、子どものやった事を認め、ほめ、喜びを味わわせて、継続してゆく。こうすることによって、自然と自分からやるようになる。放任するととり返しがつきませんよ。』

このような話をいたします。

### 4. 親と子

低学年の小集会の折、私の話した後、ある母親から質問をうけました。

「先生、家の長男は中学1年生ですが、勉強の時、私がそばにいないと出来ないのです。教えるわけではありません。そばにいればいいのです。いつになったら離れられるでしょうか。」

集まったお母さん方も、一時きょんとしました。

『現在、私の家は、主人と中1の長男、小学3年の妹の4人家族です。主人は会社勤め。中1の子が4歳頃から現在の家に住んでおります。そこは〇〇会社の寮です。私はその寮に住み込みで賄い婦をしております。3度の食事の外に、掃除から寮の人の洗濯もしますので、結構忙がしいのです。』

長男が小学校に入学した頃は、妹が2歳位で、よちよち歩き、目がはなせません。私が仕事をしている手前、子どもに不行届きがあっては笑い物になると考え、「忘れ物はないか。」「宿題はやったか。」と、手のすいた夜、ランドセルの中を見ては、遺漏のないよう準備をしておりました。こうして1・2年たつうち、よくない結果が見えてきました。何事も自分から進んでやろうとしないのです。然し何とかついて行きました。

5年生のはじめ、泣き泣き帰るなり「あしたから学校へ行かぬ。」とだだをこねます。わけを聞きますと、5年生になって別班学習が盛んになり、それが班毎の競争にまでなったようです。家の子は、のろまで、余りよく出来ないもので、「H君が入るとだめだ。」と班の人は喜ばないのだそうです。「こんな恥をかいたのははじめてだ。もう学校に行かぬ。」と今までにないおこりようでした。

考えてみると、1・2年の時、私が過保護に育てたためと深く反省し、子どもにもあやまりました。そうして「今からでも遅くないから、最初からやり直そ

う。」と聞き聞かせ、その時から塾に通うようになりました。

私も考え直し、子どもがやり易いよう、又はげみになるよう心掛け、夜勉強している時「そばにいて。」といわれますので、ずっとついてます。週4日の塾通いも、1日として休んだことはありません。私も明るくくらすように努めておりますので、長男も明るい性格に育っております。』

私は「お母さん、もういいよ。僕一人で勉強できるよ。という言葉が出るまで、そばにいてあげて下さい。」と答えました。

『塾は上尾駅近くにありますので、往復に相当時間がかかります。寒い時等大変だなと思います。然しグチ一つこぼしません。私は長男が帰宅する時刻には、玄関の外に出て出迎え、労をねぎらうようにしています。』

先日、帰る頃になって、急に雨が降って来ましたので、傘を持って迎えに行きました。途中公園の所でありましたら「お母さん有難う、僕一人で帰れるから大丈夫だよ。」と言われました。私の気持ちが子どもに通じたのかと、本当にうれしくなって、目がしらがあつくなりました。』

自責の念から、何とかしなくてはと反省し誠意をつくす尊い母親の姿に深く感動しました。妹に二度と繰返さないようにと、こうした集会には参加するそうです。

『私は皆さんより相当年上です。若い皆様から見ると、何とだらしなないことよと笑われると思います。然し恥をしのんでお話したのです。と申しますのは、さきほど、先生から、1・2年生の時が最も大事ですよと、いろいろお話くださいました事に胸がつまり、我慢出来なくなって、今まで誰にも話したことの無い家のお話をしました。誰だって自分の子はかわいいです。どうか、私のような失敗は、しないようにして下さい。』

真剣に話されるこの母親、子どもに接する誠の姿勢、円満な生育を願わずにはおられませんでした。

## 5. 結び

多くの若い母親は、子育てについて、いろいろの知識を知っております。然し実行出来ないと申します。すぐに結果を出したがりです。「待つ」心と、やろうとする真の「誠」がないように思えてなりません。

そこで私は、母親自身の自己改造こそが先決であると常に申しております。

- ありがとうと素直に言える人になること。
- 人の良い点を素直にほめられる人になること。
- 常に明るい気持ちを持ち、人に接すること。

私自身の教訓でもあります。やり直すことのむずか

しい子育て、また、お母さん方と腹をわって話しあっていたこうと思います。

## ある教育相談から



花 木 賢 二

(浜田支部)

### I 教育対話活動

対話主事になって3年目を迎えた。この間実のある教育対話活動をお願いながら、教育モニター指導、教育相談、ポビー学習指導などを無我夢中でおし進めたが、これといった成果はあがらなかった。

家庭教育、家庭教育とせっかちに攻め過ぎたのではなかろうか、対話の間にユーモアがあったり、聞き役だけに回ったり、ベットや植木をほめたりするようなゆとりがなくてはいけないなといった反省をさせられている。

長い教職生活の中で一番充実していたのは教壇に立って直接児童生徒の指導にあたった時であった。今、対話主事として教育モニターや会員さらにはその子供と、ポビー指導や教育対話をしながらよもやま話に花を咲かせる時が最も楽しいのである。こうした生甲斐のある仕事にたずさわらせていただき、対話の喜びを味わえることをほんとうに有難いと思っている。

こうした対話活動の中で数多く聞かれることは、教育モニターや会員がなんとかして子供に学習習慣をつけてやりたい、根気の続かないあきっぽい子、集中力に欠ける子をなんとしても根気強い子に育てたいという願いが多いことである。これらの母親と膝を交えて対話することが全家研の願いである。そうした家庭教育の道を更に精進努力歩み続けたいものと思っている。

### II 小5年Y君親子との教育相談

「子供がポビーをやらないので一度先生に相談したいのですが……」というY君の母親からモニターを通じ連絡をうけY君宅を訪問。

① 美容院を経営している母親は「子供は少しも勉強してくれません。テレビを見たり、汽車の絵を描いてばかりいます。スポーツは余り好きではないようで友達と外で遊ぶようなこともありません。兄は高校1年で勉強はよくやるし、野球部で活躍しているのに……」と話してくれ、更に「私をもっと面倒を見てやればと思うのですがつい忙しいので」、「汽車の絵を描きはじめると、ご飯の時でもやめようとしなほほどです」、「頭が悪いとは思いません。ポビーをやってくれ



ればと願っているのですが、ここ2〜3か月やらないので、モニターさんをお願いしたのです」などとも語ってくれた。

② Y君の母親は仕事が忙しい余りかY君の行動を深く観察していないようだ。Y君の「汽車の絵」もつまらぬことにのぼせていると評価しているようだ。ポピーをやらないとって何一つ対策は講じていない。教育とは対話することである。特に家庭教育では親子の対話がなくてはならない。Y君の母親は多忙で暇に手が回らないだけでなく、Y君との対話は少ないようだ。ポピー会員になってもポピーを読むこともなく、ただ子供に与えただけで全くの人任せの態度だった。しかも、兄ちゃんはこうだと兄と比較したりで、真にY君の教育はなされてなかった。Y君が気ままな勉強ぎらいな子になったのも無理ないことと感じられた。

③ Y君に「家へ帰ってからはどんなことをするの」と勉強のこと、テレビのこと、漫画のこと、遊びのことなど聞いてみる。明快な返事は返ってこなかった。「汽車の絵を描くことが好きらしいが、先生にも1枚描いてくれないか」と話すと、早速紙と鉛筆を用意し、定規を使い実に精巧緻密な機関車と2車輦の絵を本も見ずに描きあげてくれた。ほんとうに感心させられた。「何を見て、どんな練習をするの」と聞くと、鉄道マン・機関車入門機関車大全科・特急大百科など沢山の本を持ち出し、毎日10車輦ぐらい各種車輦を描いているということで、小さく切った彩色豊かな「汽車の絵」を見せてくれた。

④ 私はY君がテレビの前で、つまらない番組をポケーッと見て、勉強もせずに漫然と無気力、無感動な毎日を過ごしているものと予想していたのだが、それはこの「汽車の絵」で見事にはずれた。私の「これは実にりっぱだ」の感嘆の声にY君は嬉しそうにうなづいた。「鉄道マンになるの」と聞くとはっきりうなづいた。Y君のポピー6月号を見せてもらった。汽車の絵はとがった鉛筆で緻密に描かれているのに、ポピーは間違ったところを消しゴムも使わず鉛筆で塗りつぶしてあるし、漢字も数字も乱暴である。好きな作業といやいやながらの学習とはこんなに開きがあるものかと二度びっくり。

⑤ 教室や家庭での教科学習では根気が続かず気ままな行動があっても自分で興味をもっている事には専心して継続的に注意集中を行う子供もいる。Y君はその典型のように思えた。従ってある種の作業にはあきっぽいというタイプの子供もいるわけで親の要求だけで根気が続かないとか、あきっぽいとか決めてかかってよいものだろうか。一方への根気を他の方へ転換することを考えるべきだと思う。「漫画の好きな子には漫画を大いに読ませる」という指導には反対の親が絶

対多数ではあるまいか。「野球の好きな子に野球をすすめて大いにやらせたならば、ますます野球ばかりして勉強しないだろう」という不安は大部分の親の心理だろう。Y君が「汽車の絵」に集中力を発揮する描画活動をつまらないものと思っではならない。Y君はこの活動に全生命を完全燃焼させているのだろう。こうした全人格の能力をフルに発揮して精神集中できる子供は、はじめは幼稚な価値の低い活動であっても、いつかレベルの高い水準に成長すると、その活動対象も自然に高いものになり必ずや将来価値ある仕事に没頭しうる人間に成長してくれるであろう。ただ、今のY君は自分をうまくコントロールすることができない。もう少し自己抑制できるよう指導することが必要である。「つらくてもがんばろう」という励ましで意欲をもたせるような指導が大切である。

⑥ 母親とこんな話をしたあと、私はY君と母親との3人で、これからの家庭学習について次のような約束をした。▷学校から帰ったら必ず教科書を出してポピーをしよう。▷ポピーで国語をする時は教科書の音読を、算数の場合は計算練習をもあわせてする。▷鉛筆をけずり、消しゴムなどを用意して机でする。という3か条だった。Y君はやれるかなあという不安顔だったが、しっかりうなづいてくれた。そして母親には、平塚先生の「家庭でどうしてもやっていたかねばならない教育の働きが6つある。その1つは『理性の教育』である。理性とは先ず約束を守ること、そして人から注意されることを喜ぶことである」という言葉を話して、この約束が実を結ぶようY君を暖かく見守ってほしいことをお願いし、Y君の成長を楽しみに、次回10月の訪問を約して別れる。

### Ⅲ 習慣形成への手だて

学習習慣の形成の基本は子供が学ばんとする自発的意欲である。この意欲を奮い起こさせるものは両親特に母親である。▷子供を信頼することである。▷誠実な親として、りっぱな家庭を築こうと努力することである。こうした姿勢で子供の教育（対話）にあたらねばならないと次の3点を常に強調している。

① 計画を立てさせ学習を努力し継続させる。計画は子供自身の約束であり、両親との約束でもある。子供の立てる計画には間違いや失敗もあるだろう。それを親子で検討修正しながら前進することである。

② 「つらくてもがんばろう」という内的に自己指導すること、と全力集中の勉強が学習の条件である。だから子供が何に専心しているかを見つけ「ほめ、はげまし」てやる。

③ 自発的意欲を引き出し習慣形成にまで導く手だてとして、計画的、全力集中の学習ができるポピーを使うことを納得するよう助言。

## 対話活動の間接的 な方法



金澤文四郎  
(東京練馬支部)

以下は、就任1年半の未熟な対話主事の、孤独な歩みの中での悩みの表白であり、先輩の方々の御教導を切望し期待して申し述べることであります。

### 対話活動の直接的な方法の限界

「対話」ということを、文字どおり、直接に相対して話し合うことに限定すれば、わたしの行っている対話活動の主なものは、小集会、モニター会議、教育相談、モニター訪問、会員訪問、使い方教室で、その相手となった者の数は大変少ない。対話実施者数が比較的多い小集会、モニター会議、使い方教室に限ってみると次の表のとおりである。

対話実施者数(55・4月～7月)

| 対象                   | 4  | 5  | 6   | 7   | 計   |
|----------------------|----|----|-----|-----|-----|
| (親)<br>小集会<br>モニター会議 | 70 | 55 | 43  | 76  | 244 |
| (子)<br>使い方教室         | 97 | 90 | 106 | 126 | 419 |

ポピー使用の子どもの数が約2,000であるから、その親の数を父母一体としてみて、子どもの数の75%として1,500、親子の計が約3,500である。上表の数は延べ人員であるから、実人員を考えると、直接に対話できた数は会員数に比して極く少ないということがわたしの実績である。

出発3年めに入ったばかりの支部という条件もあろうが、何よりも対話主事である自分の資質、能力、対話の方法技術に深くかかわるのがわたしの実績であることを思うと、熱意努力の増大を要することは勿論であるが、対話活動のやり方の改善も強く要求されるであろう。

わたしの実践を一般化するということではなく、主事ひとりが持つ時間的な面から考えて、毎月の直接対話実施者数を3,500の20%にするといったことは至難であろう。対話実施者数だけ考えて、会員多数を一堂に集めて講演会をしたり、一教室に多くの子どもを詰めこんで使い方教室をするといったやり方で、全家研がねらう対話活動の趣旨が十分生かせるものであろうか。直接的な方法の限界を考えることは、全会員に対して対話を保証している全家研の対話主事として、忘れてはならないことであろう。

### 対話活動の間接的な方法について

小集会や使い方教室を一そう魅力的なものにして、回数や参加者数の増加を図ることを怠るものではないが、広く会員との対話を行うという意味で、前述の直接的な方法の他に、間接的な方法を特に重視しなければならぬと考えた。モニターを通じて会員に、会員を通じて会員へ、子どもを通じて親へという、人をおしての方法と、文書をもって行う方法である。

本部から送られる各種の対話資料、研究物でいただく諸先輩の実践、対話主事の研究会での御教示に助けられながら行ってきた自分の実践について記してみたい。

#### ○ 対話主事の存在と仕事を知らせること

① 対話主事就任後1年半の間に、わたしの顔写真・略歴・仕事を入れた普及のしおりを4種類、約5万枚を印刷し各種の方法で配布してくれた支部長に感謝している。

② 「新会員の皆様へ」(A4版印刷物)に、▷教科書のきざみ入れ ▷ポピーの使い方 ▷お母さんの役割りの3項目について述べ、最後に、電話相談・教育相談室・使い方教室の利用を紹介する対話主事名ものを、新会員への第1回配本時に同封してもらっている。

③ 新入会者への挨拶状(支部長名、はがき郵送)に、使い方教室(支部主催・モニター主催)・教育相談の案内を記している。

④ 「ポピー」休会々員の方へ」というはがきを、休会3ヵ月後発送し、その中に、教育相談・小集会・使い方教室のすすめを記している。

#### ○ モニターとの接触を密にすること

① 「新人モニター会」に必ず主事の話しを入れている。

② 「モニター会議」は、毎月1回以上(出席が少ない場合に欠席者に対して日を改めて行うので2回が多い)あり、主事の話の時間を30分～1時間とってある。この話の目的は、「モニター能力を高めるため」ということを明言し、毎回手刷りの資料を用意して行っている。

③ 「モニター訪問」は暇さえあれば、いつでも自由に行うことになっている。連絡せず突然訪ねることが多く、留守のこともしばしばであるが、何かしら訪問のしるしをポストに入れてくることにしている。所属会員の状況、それに対するモニターの対話方法、小集会・使い方教室実施の約束、新会員の指導等、具体的な成果をあげることが多い。

④ 暑中見舞状、年賀状、まめに電話する、モニター

の子どもの指導など、労を惜しまないでしている。

### ○ 「ポピー母親通信『けやき』のこた

① 毎月1回、配本時に、ポピーに折り込まず一括モニターに渡し、一言そえて渡してもらおうよう頼んでいる。その一言は、モニター会議での話と、『けやき』の記事と関連あるようにしているので、その中から出てくる。『けやき』は対話専門の紙面づくりを主事としてよいことになっているのでありがたい。(B4版)

② 情報ずれしている母親はなかなか読んでくれないので、内容は勿論、みだし、割り付けのくふう、読後感の聞きとり、小集会でそれと関連した話し合いをするなど意を用いている。

<17号 55・5・15 発行の一部>

#### 新教育課程発足

#### 小学校はどう変わるか

##### 現場の先生方にお聞きしたこと

無理を承知で、「どう変わりますか？ ひと言でお答えください。」とお願いしてみました。どの先生のお答えも、「この変わる。」という断定よりも、「こう変えたい。」という願望が濃く出ているものでした。

その中から、6人の先生方のお言葉をとり上げさせていただきます。

#### ○ 練馬区内小学校の校長先生

「教育内容や時間数や行事といった形や量のことではなく、量の問題として考えたい。じっくり考えて答えを出すといった学習、子どもが楽しく満足した生活をする学校でありたい。」

#### ○ 中野区内小学校の校長先生

「校外でいろいろと心配される問題が起きているが、学校生活が楽しく充実したものでないということも原因の一つである。子どもにとって魅力ある学校をめざして教育計画を編成した。」

#### ○ 豊島区内小学校の若い女の先生

「急にこう変わるということはないが、子どもと一しょに居る時間が多くなるようでないと、よい教育は望めないと思う。教師がせかせかせした時間しか持てないようではいけない。」

(以下略)

紙面の都合もあり、項目だけ並んで内容が乏しく、その上尻切れとんぼになりましたが、ご教示よろしくお願いたします。

## 私の教育論

——教育対話における——



### 近藤 嘉男

(高知支部)

研究テーマにある指導と実践については、先に中四国ブロック会や、また文章でも発表をしていることもあり、事新しく申し上げるほどの進展もなく、むしろ低調にさえある最近のポピー学習について、また全家研の運動について同じことの繰り返しをするより、私なりに考えて居ることについて述べさせて貰うことにしました。

対話活動の本質からは、はずれた形のようなものとも思われますが、私は私なりに対話活動以前に考えなければならぬ、また、やらなければならないことがあると思うわけです。

それは現在の自分が務めている職場の命運にかかることであり、職場の一員としての立場として共に働き、共に生きて行く、といった考え方であり、その中での自分の仕事に対話主事としての活動であり、そのための仕事は勿論のこと、それ以外のことについても関係なく知らぬで通せるものでないことを痛感しています。

高知支部は専業でポピーの取扱い以外は、何も事業をやっていません。

そうした職場での私の心構えは、自分の立場存在が全体の中の一員であるといった考え方で仕事に当たって居るわけです。学校でも常に全体の中の一員であるといった自己の存在を認識するように強調し、「自己中心の考え方」「自分本位の行動」を戒めてきました。

勿論教育対話の中で出て来る私の話でもあるわけですが、心すべきことは話し合いの場を母親方に合わせて行くことです。普通によくこちらの都合のみで計画・日程を組み出掛けて行くことが多いようですが、連絡の時、常に先方の都合を聞き、それに合わせるよう努力することです。然しこれはなかなかむづかしいことです。

故に会合が主として夜になり、夕食後となり、終了が10時頃になるのもざらで、日曜もつぶれてしまうことが多いわけで、誰でもやれるという仕事ではないし、無理の行く面もあるわけです。

特に資料等の取扱いについて一言するならば、本部から配布され、また各支部独自に作成され利用されていますが、文章的なものは、ただ配布したで済むものでなく、「殆ど見る読むことは皆無」一つの資料を一応手渡して説明するか、読むことが必要と思います。出来たら質問の受け答えをする、で始めて資料は利用

され生かされると思っていますが、どうでしょうか。そうした活動の中で私なりに考えて、対話の中で母親たちと話し合っている教育対話主事としての姿勢なり教育的見地から、以下拙文を述べることに致しますので、御批判御指導を受けたく思います。

何の会であったか、話の中に学校や教師の悪口や不信に繋がるような言動は、退職した我々としても慎むべきことだ、といったことがあり同感であると思いました。然し対話活動を何回か重ねる中に、どうしても学校・教師に対する不満、不信の問題が出て来ることがあります。

その解答として学校教育のあり方の中に不十分な点、矛盾点は指摘せざるを得ないことがあるわけで、その問題点は「やらぬ」ではなくて「やれない」のであることを知って貰う必要があると思うわけです。

現行の教員養成の制度からして鯉坂先生の「教育職員養成審議会会長」の言を待つまでもなく、諸種の各学校卒業生の教育実習期間のことなど沢山の問題点がある。然しそれは制度上のこととして考えると、内容の問題が基本として考えられるべきでないかと思えます。

古人曰く。「教育は人にあり」と。教育とは人が人に対して行うことで、言うならば人の心が他の人の心に通じる仕事、それが教育という仕事であると思うわけです。今、勤務時間の問題や給与条件など教育の本質を損うような間違った考え方の人が教員志望の大半を占めて居るとしたら、もっと内容的に中身を吟味してほしいものです。私は先の発表文に「幼児教育は饌にある」と申し上げたことがあります。人が人類として社会組織や文化を作る中で、一番基本になるのは個々の饌だと思えます。そのことは、また次の機会に譲るとして、人が自分以外の人に何を、どうするのか、そこに教育のむつかしさがあると思えます。

何よりも大切なことは、まず自分自身が身をもって模範的なお手本を示すことです。

教育者となるには知識・教養を身につけるための学習は勿論のこと、それを子供にどう指導理解さすかということになると、自分自身がこうすべきだといった実践を通じての指導がなければならない。子供は学校内では先生を見て、家庭内では親を見ることで、自然に影響されて学びとることがある以上、少くとも学校内の勤務時間中は、きちんとした服装を身につけるべきでしょう。言葉使いも同様に正しく、誰が見てもあの人には「先生」だと思える「姿」「形」「言葉」が必要ではないでしょうか。単にカリキュラムを消化して行くことが仕事と考え、時間を過ぎさえすれば賃金になるといった考え方の人が居るとしたら、それは教育者として不適当な先生と言うべきではないでしょうか。

教育の仕事は単に専門職とした仕事よりも、聖職と

しての認識が必要なのではないでしょうか。

私は教育者は「24時間の先生」であってほしいと常に思っています。職員に要求したことはありませんが、先生が学校における勤務時間は真剣勝負であってほしいと思うわけです。それは一人一人の子供が家庭にあってどんな環境や家族構成の中で生活しているのか、通学距離や時間等交通災害の問題も考えて、万一事故の場合における対処の仕方はどうなのか、兄弟姉妹の中での子供の位置づけや父母の職業、食事における偏食、衣服の問題等々、一人の子供について単に通りの家庭訪問で総てを掴むことの出来るものではありません。教師が知らなければならず、また、しなければならぬことが如何に数多くあることよ。教育の仕事ほどやるうと思えば如何に沢山の仕事が控えていることか。教師になる前にこうした問題に取り組む決意と努力する決心をみな覚悟の上で教職につくことを希望しているのかどうか、疑問である。努力しなくてもやれるし、やらないで済ませようと思えば単に時間を過すことで金になる楽な仕事で定期昇給、ボーナスと身分の保証された職業であるから希望している、といった人達が先生を希望しているとしたら大変なことである。と思うわけで自分勝手な理屈はこの程度に切り上げます。

次に最近の一般社会の中での母親の教育に対する関心度はどうか、といった点について私なりに感じることは、父親のみならず母親も共どもに第一線で活動し家庭の収入を助けているのが実状である。収入さえ十分に得られたら家庭生活の充実は勿論、子供の教育も、自分がやるより、家庭教師をつけて勉強をさせることが出来るし、塾に入れることも出来る。そうした考えが「ポピー学習」をやるよりずっとよいことで、子供のためになると信じている。

故に少い手数料で普及活動に協力する時間があれば、まとまった収入源になる職業につく方が得策である。これが実態で、それぞれの家庭で母親が中心になり、子供の学習意欲を向上させ指導の出来る学年はせいぜい3・4年までが限度でないか、1・2年や幼児における母親の存在は偉大であり、絶対的であり、指導力もあるわけですが、さて問題が起きた時点での指導や解決策は母親には無いと言ってよい。

中高学年になるほど母親の存在価値が変わってくる。子供が自分自身で意欲的に学習にとり組むような指導は一番頭の痛い問題である。

そこに、そうした時にこそ対話主事の活躍の場が生まれるのであり、ポピー学習の原点には常に対話活動がなければならず、それでこそ全家研の主旨なり運動が展開されると信じています。そして、対話活動は先生としてのお説教ではなく、母親達から出る意見、苦情を聞き、心の交流の場としてゆくことが本命と信じています。

## 信頼と心のふれあ



いのなかに

服部 道子  
(京都京阪支部)

### 1. 対話主事として

この1年間、思い続けてきたことは、モニター、会員さん達と先ず仲よくなることです。同じ女性であり、母性であり、主婦である立場から膚で温め育てた子どもたちへの悩みや問題は痛い程わかります。子どもが学び育っていく土壌である家庭がよく耕やされ肥えていなければなりません。よいモニターづくり、よい会員育てはよい家庭づくりを背後に心しながら歩んできました。表面に出るのは勿論児童、生徒のことでありますが、家庭内の問題点や悩み(嫁、姑の意見の違い等)を吸い上げ痛みをわかちあうことで、仲よしになっていきます。小規模の支部では特にこうした雰囲気作りのなかで次の仕事を進めてきました。

### 2. モニター会(月1回、全員対象)

モニター会には二人の主事が交互に計画担当をする(当日の会話は二人で当たる)。

#### <内容>

- ① 教育対話の基礎になる子どもの見方、考え方、現代のしつけ等について話し合う。ここではあまりあせらず、子どもへの理解、意欲のモチベーション、集中力の養い方等、目先のことにとらわれず子どもを知ることの学習。
- ② 教材についての学習会  
例一公式、計算力、漢字の覚え方、カード学習、ノート学習等、ポピー教材の使い方も含めて、効率的な学習法等を討議する。
- ③ 教養講座  
モニターとして教養を深めることにより会員さんへの対話の幅を広げる。  
例一 児童年についての意義とその内容。
  - ・親と子の楽しい読書生活。  
子どもの絵本、本の紹介、おとなの読書等。
  - ・書けない子に対して楽しく書けるようにする条件。
  - ・新1年児童に対して考えること。
  - ・世界婦人会議を迎えて婦人の生き方を考え直す。

※一方通行にならぬよう工夫と協力が必要。遠廻りのようであるがモニター意識は教養を高めることと、社会参加への関心のなかに育てられるもので

あると考える。

### 3. 小集会(母親セミナー)

- ・人数 4,5人~10人前後
- ・会場 モニターまたは会員宅、集会所等
- ・対象 会員、未会員を特別にわけない(希望によって常に混合集会)
- ・内容
  - ① 日常生活の中の子どもの状況を知る。家庭及び学校生活のなかからの悩みや問題点を聞く(客観的判断と共感、共鳴することが大切)
  - ② ポピー教材の難解問題を、主事、会員ともに解明(体を通じて問題を納得)していくことは緊張感をもって頭の活動をさせる。
  - ③ ポピーの使い方、感想、質問など。興味と関心の持てることは中味がよくわかる。計画の一部にとり入れることができるように(どこに問題があるか察知する)。
  - ④ 未会員からの質問、家庭教育上の諸問題にふれて吸収する。状況判断のなかに全家研運動のねらいを含める。
  - ⑤ 母親教室  
小集会のなかに将来は母親教室的なもので趣味や学習の幅を広げる。
  - ⑥ 小集会の結果から電話による教育相談に結びつけたい。

### 4. 児童対象教室

春休み、夏休みに行く教室ではひとつの感動を持たせたい。

- 例。春休みには学習のしかた、どのようにして集中力をつけるか。ノート学習は個性のあるものをつくるための記録のとり方。感想のふくらませ方等。
- ・夏休みには絵日記指導。  
子ども達のなかには、文章を書くことの苦手な子、きれいな子が案外多い。したがって長文を要約する力、感想を表出する力に乏しい。夏休みのスタートに当たって四つ切画用紙1枚に思いきり心を表現した文と絵をかかせる。この指導によりこれから続く夏休みに意欲をもたせる。ひとりずつに短評を加えて作品に対する反省と今後の見直しをもつ。但し学校の指導と交錯しないように考慮する。

#### <作品例> 1年 たなばたさま

たなばたさまを かざっています。

かざがふいてきました。

きれいなたなばたさまが もっときれいになりま

した。

※夏休みの時期になって1年生もようやく文字が整って来た。素直さが好ましい。〈もっと〉と、いうところを具体的に伸ばしたい。たなぼたさまのきれいさに感動したものである。

1年 あさがお  
いつもみずをあさがおに、やっていたら  
あさがおがさきました。  
おおきいあさがおが さきました。  
むらさきのあさがおが さきました。あめがふって  
あさがおがしぼんでしまいました。しぼんだ  
あさがおを しるにしました。そのしるをえのぐ  
にしました。

※しぼんだあさがおをしるに、そのしるをえのぐにと、とてもかわいくて行動的な生活です。

紙面の都合で高学年の作品は載せられなかったけれど、幾つものことをみつけるよりひとつのことをしっかり見つめること、自分のことばで書くこと、人のことばに耳を傾けること等を考えます。

児童対象教室では、毎日つきあっている子どもではないので、学習にむかう姿勢とか、楽しさを味わわせたいと思っている。結果だけでなく過程を楽しませたい。特に時間的に自由な休み中では書く力を身につけさせたい。

○その他、絵本づくりをした子どもや作品を書いた子

どもについては随時短評を加える。

## 5. 対話主事として思うこと

- ①モニター、会員さんと仲よくするためには本音で、肩を張らず、同じ肩の高さで話し合うこと（相手の持っている何かと共鳴すること）。
- ②今までに持っている知識や経験にのみ頼ることなく、常にいきいきとした情報や知識を積んでいること。特に若い人たちに接するのだから、現状をよく把握していることが大切。
- ③共に学んでいく、共に生活のなかに息づいている自分をみつめること。教えてあげるとか、聞いてあげるとかの態度があらわでないこと。但し客観性や判断力は高く持っていたい。
- ④対話主事、モニター、会員、共に記録を十分にするように習慣づける。  
記録は人のことばを大切に作る基をつくり、次の学習へのステップともなり、また人間関係を豊かにもするものである。
- ⑤仕事のなかみを工夫して積極的に、楽しんで押し進めていきたい。楽しくない仕事は長続きしないだろう。

以上1年の浅い経験の中から気付いたままをやってきた中から拾ってみました。これからこそ勉強したいと思います。ご指導をお願いいたします。

# 展げゆく地域社会との交流

6

現在、全日本家庭教育研究会には、全国に510支部があり、各支部に所属して会員の普及と相互連絡のために活動される賛助会員（モニター）が凡そ20,800余名おられます。このかたがたは、いずれも当初普通会員であったのを、時を経るにしたがって本会の趣旨に賛同し、進んでこの運動の推進に一役を担って参加されたもので、その日々の活動状況が目あたりに見ると報告されています。教育の事業は、山に樹を植えるようなものと言われますが、まことにその語の結実を今、目のあたりに見る思いがします。

## ありのままに語る



平野 恵子

(浜松谷島屋支部)

### 1. ポピーとの出会い

私のポピーとの出会いは、こんなところからはじまりました。

あるきっかけで書店へ勤めるようになった私は、当時、外商課の片隅で書籍や雑誌の仕分けをして、それぞれの担当者へわたす、出庫と言う係をしておりました。もともと、本が好きな私ですから、ちょっと目にとまる本があれば、すぐメモをとっておいたり、店へ行って見てみたり、そんなことの中で、私は子供に家庭学習として使わせる何かいい教材はないかと、いろいろ探し求めておりました。

ある時、入荷してきた荷物の中に全家研のポピーという荷箱が目にとまり、ふと、ポピーって何かしらと思ったのです。中をベラベラと見てはじめてこれはちょっと変わっている教材だと感じとり、どんな仕組みなのか興味を抱いたのは勿論です。

当時、私の一番悩みの種は中学3年の長男のことでした。成績のよくない教科もあったので、とにかくやらせて見ることだと思い、1冊を求めて試してみることになりました。

その時、長男は「どこで見つけて来たの」と言い、「これならバッチリだ」と言ってよるこんでいる様子でした。今まで使っていた教材とは違う点、僅かでもよい、今までより効果が上がればと、そんな親の願いが多少通じたように思いました。

ここで家庭で使う教材は、教科書の内容からかけ離れたものであってはならないことを教えられました。また、中学1年生からスタートが肝心と言うことを痛切に感じました。

おくれればせながらのポピー学習でしたが、やっとの思いで目ざす高校へ進学が出来てよるこびを共にしたのです。

学習に取り組むコツ、そんなこともポピーで見つけたのではないのでしょうか。

それから間もなく、次男、三男坊も他教材を一切やめることにして、ポピーで実践して見ることにしました。三男坊は、「お母さん、これにかぎるよ」と言い、「ぼくあと2枚やらせて」と言う始末でした。

二男はすっかり気に入って、「これはやり易くていいよ」とよるこび、「裏も楽しめていいな。第一やったら終わりがあるからいいよ」と言った。

こんなこともらしい素直な受けとめ方をした日のことが、今も私の心に残っております。

### 2. モニターの仕事のはじまり

さて、そんな我が家のまだ試しにやらせている頃、隣りの方が書店へ勤めている私に、「何か子どもにやらせるいい教材ないかしら、みつけてきて」と頼みました。

私はいま、うちの子に試しにやらせているものがあるからと言って差し上げますと、「試しにやってみます」とおっしゃって下さり、今、思い返しますとその方が我が家以外の会員第1号であったわけです。やはりどこのお母さんでも、子どもの家庭学習については関心があるのです。そして何かいいものをお思いながら模索状態の方も多数おられます。探しているけど、目に触れる機会がなく、知らずにいるように思ったのです。また、心がせまいようではあるけれど、やはり

どこの親も自分の子どもがよそさまの子よりちょっとでも出来てほしいと思ったりするのは同じようです。

電車の中で出会った友人からも頼まれました。まだ、本格的にポピーなら絶対いいと言うところまでいってありませんでしたから、「試しにやっているものがあるけど」と言う程度にとどめておきました。今の私なら自信を持って、

「ポピー教材よりいいものは、今のところないでしょうね」と言うところですが。

友人は、しばらくしてその内容のよさを認めたらしく、電話でその感想をもらしてきました。

「子どもたちが、まるで勉強好きになったように楽しそうにやっているわ。ありがとう」と私にとってうれしい電話でした。

2号が生まれ3号が誕生し友人から友人へ、知人から知人へと紹介され、私のまわりに小さな輪が作られて広がっていきました。

やはりいいものは、ほかの方々へも教えてあげて喜んでいただく、と思う考えが心の中に動きはじめました。

### 3. 友人の協力に感謝の心を

現在の私のポピー会員の殆んどは、友人達の協力のおかげなのです。そのことなくして現維持会員の誕生はなかったでしょう。

ここで学ぶ大切なことは、日頃の友人関係の大切さ、近隣のおつき合いのあり方、地域や子ども達とのつながりが大事なのです。

勤めの傍ら人さまのお世話など到底出来かねる私が、いつの間にかモニターとしてのスタートがはじまったのです。

今、私は理解あるすばらしい会員の皆様に支えられております。

### 4. 仕事との両立の中で

現在、ポピーの事務局の中で仕事の一分野を担当して働いております。その一方でモニターの仕事もかねてやっております。

どうやってその会員のお世話をしているのかを、ふと、人に聞かれることがあります。私は自分に支障のない限り日曜日に配本をやっております。

私はこの仕事に対しては、言葉では言いつくせないほどの感謝の気持を持ってやっております。

モニターの仕事の中では、どうしても家庭の中の協力が必要なのです。よき理解者は主人です。そして3人の子とも達です。

時には、日曜日に十分家庭的雰囲気味わえないそんな日曜日もあるわけです。

忙しい日曜日には、粗末な食卓になったりすると、私は「ごめんね、明日はうんと御馳走するからね」と約束し、「でも今夜は災害の避難訓練のつもりで」と言い聞かせ、ひょっとすると避難の時にはこんなおいしい味噌汁やご飯はいただけないでしょうと思うし、「恵まれすぎている子ども達へ一つの饗ともなる」と主人も言ってくれます。そんな家庭の思いやりが仕事の疲れを忘れさせてくれたりもします。

また、時には、中学生から夜分頼まれて説明に行ったり、部活動のない日曜日の午前とか午後とか頼まれることがあります。私は余暇の時間の許す限り、相手の気持になって、なるべく都合をつけているのです。

### 5. 対話主事先生のこと

私は何よりも先に書くつもりだったこと、それは私が誇りに思っている対話主事先生のことです。私達の支部には、すばらしい対話主事先生が控えて下さっていることです。私は配本のとき会員さんからどんなことを聞かれても、「谷島屋支部には、すばらしい主事先生がおられるから、小さな困りごと、わからない問題、すべてお返事をいただいて来てあげますから」と言って宣伝をしております。

つけ加えて言うならば、算数(数学)と理科の教科については特にくわしい先生ですから、と会員に言っております。

私が中学のポピーに関して十分な説明をしてあげることが出来るのも、この神谷先生が控えていて下さるからなのです。

### 6. 中学の教科内容がかわる?

56年度、新しい中学のポピーが、どんなふうに変わるのだろうか。

今、あえて言うならば、前述の私の長男の場合によく似たケースがかなり多いと言う実態をつかみ、学習のことでは中学生になって、なんとなくもたついている子、ポピーの使い方についても十分に納得出来ないという実状を考えて見ますと、モニター自身も常に努力が必要だと痛感しております。

### 7. よろこびは

めぐり来る春になると、ポピーで学習をやった中学の会員が目ざしている高校へ合格をした時、私の一番うれしいよろこびがあります。

「よかったわ、おめでとう」と言葉をかける時、我が子のここのように胸がじーんと熱くなります。お母様からは、

「本当にお世話になりましたネ」

そんなことばのやりとりの中に、しみじみとよろこ



びがわいてまいります。

巣立ち行くポピーの会員がみんな明るくて心暖まる豊かな社会を作っていってほしいと願っております。

私を支えて下さっている会員のひとりひとりに感謝の意を、そして、それに答えるべき努力と誠意をおし、今日もまた明日も、自分を磨き成長していきたいと思っております。

私はただありのまま、日頃のモニターの仕事の中で感じていることを拙い文で綴ったにすぎません。ただありのままを。

## 出会いを大切に



田 幡 綾 子

(香川支部)

あれはたしか長女が4年生、今から3年前のことだったと思います。

隣の町から友人が遊びに来られて久しぶりにおしゃべりを楽しみました。その時、図らずも同学年の子供をもつ母親同士のこととて、早速、話が子供の生活や学習のことに移り、日ごろの悩みや苦勞の打ち明け話に夢中になってしまいました。その友人が家庭学習の習慣をつけるのに、全家研の「ポピー」という教科書に準拠した大変いい学習書があると教えられました。これがポピーと私とはじめての出会いでした。

その当時もいろいろな補助教材が出回っており、学校推薦や書店が宣伝する学習書など種類もたくさんありました。私もじっとしておられず、4年生の長女のために、あれこれと苦勞しているいろいろな学習書や参考書を買って見ましたが、初めの内はともかくとして、あまり長続きがせず、その効果もはかばかしくはありませんでした。こんな苦い経験からせっかくなすめられたポピーもどうせ「五十歩百歩」だろうと、たかをくくって大した期待もせず、友だちのすすめに従って一まず入会することにしました。そして2、3か月採っているうちに、教科書準拠、バラ方式、こころの文庫の読みもの、小学生新聞など多彩な編集内容を盛って、しかもよく工夫された構成になっているのが興味をそそったのか、子供は予想外に関心を示し、「A子ちゃんとポピーをしてくる」といってポピーを取り出して学習に取り組みだしたのです。

親としても教科書のまとめや問題の手引きなどを抛りどころに、自信をもって学習を見てやることも出来て大変助かっています。学校の学習進度とのずれがなく、バラ方式で分量や取り扱い等から考えても便利で取り組み易く、しかも学習効率が高いのに気づきまし

た。以来、叱ったり、泣いたり、怒ったり、悩んでばかりいた親子が、共に次号のポピー到着を心待ちにするようになりました。特別これといった抵抗も苦勞もなく自学自習の道が開けたのはよき友との出会い、よきポピーとの出会いによるところが多かったように思います。

今日、我が子が我が家庭が明るい第1歩を踏み出しつつあるのはよき友、よきポピーとの出会いと同時に、「生きることは燃えることだ、学問の道に近道はない、必ず順序正しく歩まねばならない。可能性を能力に伸ばすもの、それは努力である」と教えられた平澤興先生との心が出会いがあったからだと思います。

人は出会いによって友を得、チャンスを得、教えられ、励まされて伸びる。そうだ、ポピーこそ多くの人に友を与え、チャンスを与え、努力と能力を与えるものだ。こんな淡い信念から多くの人とポピーの出会いを持とう、そして精一ぱい燃えてみよう、と思い、全家研モニターの一員として働くことを決心しました。

当初、友人から「あんなに内気なあなたが、よくもまあ、モニターする気になったわねえ」とよく会うたびに言われたものでした。

「私も人の子の母でもの、燃えなくては、燃えなくては、この子のために」と心に言いかけ、出会いを求めて走りまわりました。

私が燃えるほど子供もがんばってくれるし、道で会った友人も「元気でやってるの、Aさんに話してあるから、ポピーのこと世話してあげてね」と激励や紹介をしてくださったり、次第に会員も増して、友と会い、人と語る楽しさのうちに、あんなに内気で恥ずかしがりやだった私がどなたにも気軽に声をかけられるようになり、毎月の配本とおしゃべりを次第々々に心待ちするようになってるのが不思議なくらいです。皆さんありがとうね。

最初の頃、子供から「ポピーのおばちゃん」と声をかけられると、ギクッとして全身血の気が引く、恥ずかしい、たまらない気持ちでしたが、今ではバイクで走っていて、子供から「あっ、ポピーのおばちゃんだ」と走りよられたり、手をふられたりすると、ジーンときて軀があつくなり燃えてくる感じです。笑顔で、あたりかまわず大声で「けんかしないで遊ぶんよ、車に気をつけてね。ポピーしたの、1枚ずつするのよ!!」と、二十四の瞳の大石先生気取りで叫ぶと、「うん、わかった。わかった。ポピーすんだよ。おばちゃんバイクあぶないよ。」と可愛い声のはね返ってくる。このふれ合いは何とも言えないね、忘れられないね。いつまでも……。

でも、時には玄関先でパツパツと出会った子が、私の顔を見るなり「うわあ、おばちゃん、また来たの、まだようけ残ってるわァ」と顔をしかめて奥へかけこむ

こともあり、「こんにちは、ポピーの田幡です」と3回も4回も声をかけ、もう居ないのかしらと思ったら、ひょっこり出てきたお母さんが、言いにくそうな顔をして、「たくさんたまってるのよ、あんまりしないからもったいない、もう休ませてほしいの」と、しぶしぶ話す母親。一瞬、電光が走った感じで二の句が出ない立往生。でも、今だ、がんばるんだ、燃えるんだ——と気を取り直して、平澤先生のことばをかりて「今、お母さんが燃えなければ、子供は燃えない、のよ、私も一しょに燃えるわ、がんばるわ。あなたも考えてね」と慰め合い励まし合い、子供もまじえて親子と私の三人対話。配本そっちのけで夕方まで話し合ったこともありました。

対話主事先生に頼みたいなあ、と思うこともしばしばでしたが、やはり女は女同士、母は母同士でなければ通じないこと、話せないこともあるのに気がつきました。やはりモニターが燃えることが大切だと悟られました。

親子三人対話は、子供中心で、何故残るのかな？どんな使い方してるの？どこがこまるの？などやさしく尋ね、話してもらいます。次にお母さんから、家族の生活時間のとり方はどうなの？学習を見てあげる余裕はありますか？お子さんのよいところは？欠点と思われることは？など心をこめて、立場や気持を聞きほぐしてあげ、私の経験話や他の参考事例を話してあげるの。そして最後に、平澤先生の仰言る、「学問に近道はない、正しい順序と努力、無限の可能性を、能力にまで伸ばす努力と根気と根性」の大切さを話し、赤ちゃんが成長するには、よい離乳食と食事指導が大切なように、子供がrippな大人になるためには、よいポピーでよい学習の仕方を教えることが大切なのです。そしてそれはお母さんが上手に教えて、はやく一人で出来るようにしてあげなくては、子は育たないのです。」と結んで、また会うことを約束して別れたこともありました。

また、Hさんの宅では、ご両親が共稼ぎで家を留守にすることが多く、二人のお子様は、ポピー学習をしているが、お母さんが忙しくて見てあげられず、休会寸前でした。その隣のUさんの家は一人っ子で、お母さんが家に居られて、いつもポピーを見て指導しておられるが、一人っ子で我まま、いつもお母さんの監督指導がわざわざいか、気が進まず、何でも母にたよって自主性に乏しく、これまたポピー学習が形式化されて身につかず、ともすればやり残しが多くて悩んで居られました。

そこで、私はポピーの協同学習を思いつき、勇気を出して私の考えを聞いてもらいました。するとHさんもUさんも共に強い関心と理解を示されたので、Uさんのお母さんにHさんの家庭の姉妹のポピー学習を一

緒に見てもらうことに話をとりつけましたところ、Uさんも心よく引き受けてくださり、Uさんの家で毎日4時～5時までポピーの協同学習を試みることになりました。幸いにも三人が大変仲よくなり、遊びも学習も協力して活気が生まれ、大変喜んで頂きました。

こんな出会いから両家の家族同士の交際が始まり、夏休みプランもできているそうです。

地域社会が全家研のポピーで結ばれ、その輪が日本全国に広がるとしたら、開かれた協同社会の中で、子供達は明るいポピーっ子となり、すばらしい協同学習や学習を営み、立派な社会人として成長していくのではないのでしょうか。

こんなことから、何時しか悩みや恥ずかしさは消えて、希望、よろこび、楽しみへと転じ、モニターの仕事の大切さ、ボランティア活動の必要性和重要性を痛感している次第です。

多くの母、多くの友、多くの可愛い子供達との数限りない出会いを求めて、お互に持てるものを出し合い、わかち合い、助け合い、励まし合っていきたいものです。

時には、結婚のお仲介人さんを頼まれたり、お買物情報を交換したり、街々のニュースを伝えたり、病める会員を見舞ったり、井戸端会議にも顔を出したりしますが、常に出会いを大切に、語り、助け合い、励まし合いを心がけ、微力ですが、全家研モニターとしての使命に燃えて一日々々、一人々々を大切に努力していきたいと思っています。

## このごろ思うこと



佐藤 容子

(宮城支部)

私が、ちょっとしたきっかけから、全家研教育モニターの仲間入りをさせて頂き、はや1年半近くになる。その間、様々な人々に出逢った。

息子が幼稚園に行きたがらず、なだめ、すかして連れ出すのに一苦勞し、親子ともども、泣きの涙で門の中に押しこんで来る。どうしたら良いものかと、真剣に訴えるTさん。

もっと早く知り合いになりたかったと、本職なみの籐の籠を編んで、別れに残して行って下さったOさん。

「中3の息子が、ポピーのお蔭で成績が上がってねえ。10か月のつき合いだったけど、もっと早く知っていたら、息子の進路も変わっていたかも知れないわ。」と残念がるNさん。

はたまた「もう来たのお、先月号も、さっぱり手を

つけていないのよお。」と、まるでこちらに責任があるかの様な洗顔をなさる方々、人は様々だけれど、最近、私は極めて両極端な母子に出逢い、深く考えさせられたので、私なりに感じたことを記してみようと思った。

### その1

私とその家に近寄ると、女の子の火のついた様な泣き声と共に、ピシッ、ピシッとお尻を連打する音、母親のカン高い声が異様な感じで耳に飛び込んだ。以前にもこんな場面にぶつかったことがある。

女の子は2歳のいたずら盛り、チョコチョコ盛りである。勿論、母親はその一人っ子を、こよなく愛している。憎くてやっているのではない。ただ、「人間は、小さいうちの躰が肝心、鉄は熱いうちに打て、鞭をひかえてはならない」の鉄則を実行しているにすぎない。現代の若い母親に多く見られる甘やかしに、敢然と挑戦しているのかも知れない。

### その2

私は、そのお宅で夏休み中の計画などを伺いながら、お茶をごちそうになっていた。そこへ遊びに行っていた4歳の男の子と2歳の女の子、それに同じアパートに住むAという同じく4歳の男の子が、どやどやと入って来た。たちまち狭いアパートは、おもちゃを奪い合う声、戦争ごっこ鉄砲の音、乱暴なことば、はねまわる音で、騒然となってきた。そのうち、そのAが私達のテーブルに置いてあったお菓子を、ガバッとつかんで持ち去った。

「あら困ったわ、この前A君のお母さんに、おやつは決めてやっているから、やたら与えないでくれ、と云われたのに、また、やったと思われるんじゃないかなあ」と、若いお母さんは顔をくもらす。

そのうち、小さい妹を、兄はAと二人でいじめたしたのである。兄の方もAに劣らぬ乱暴者だ。これからが問題だ。二人の男の子は戸を閉め切って女の子を入れまいとする。女の子は入りたくてヒーヒー泣いて、戸にしがみつく。時々戸を開け、また、ピシッと閉める。私は、とっさに女の子の怪我の危険を感じ、立ち上がって、「危ないでしょう。開けて入れてやりなさいよ」と戸を開けたとたん、左のホホに平手打ちをくった。と同時に足で胸をけとばされた。Aはベッドの上に立っているの、丁度その高さなのである。私は、とっさにその子をベッドから引きずり下ろし、両手をギュッと力を入れてにぎり、「あなたは、いつもお母さんや他のおばさんをたたいたりするの。して良い事だと思っているの」と、声高に叱りつけた。そして、「たたかれたら、どんななのか、おばちゃんも、たたいてみてやるわね」と云うと、Aの頬を「ピシッ」と

やった。一瞬三人の子は、シーンとなり、青ざめて私の顔を見つめている。

私は、今度は静かに、「じゃあ、二人で、いじめたCちゃんに謝りなさい」と云ったら、素直に「ごめんなさい」と云った。

一瞬の出来事である。他人の子に手をあげて必死に叱ったことが、正しかったのか、非難されるべきものなのか、今だに私は、わからない。ただA君のお母さんが、(私は会ったことがないが)抗議を申し込んできたら、私が話合いに行くので知らせてくれるよう頼んで帰って来た。

ほとんど同時に、この二つの場面に遭遇し、私はつくづく、子供の躰と愛し方に対する平衡のとれた見方の大切さを痛感したのである。

前者の場合の、鉄は熱いうちに打て、鞭をひかえるな考え方は決して間違っていないと思う。人間の脳は、満2歳までに大人の脳の重量の4分の3にまで達し、それに伴って知能も発達するそうである。だとすれば、その頃には、して良い事と悪いことを覚えさすのに早すぎることはない。ただ問題なのは、その母親が、鞭を文字通りのムチとしか理解していないところにあると思う。私は、以前鞭を打つとは、文字通りムチ打つことと、柔和な態度で諭すことの両方が含まれていると聞いた事がある。その母親も、2歳の子の特徴、その時の体の状態、精神状態をよく考慮し、感情的にならずに対処するなら、すばらしい子供の訓練者になるのではないかと思う。

後者は、与えるべき鞭を、全く与えない、その必要さを感じていないようである。気のおもむくままに、枠も柵も設けずに、子供を野放しにしていることの危険性を、いち早く悟り対処して欲しいと願った。

確かに、自分の子となると、ここでどんな処置をとるべきか、叱る時はげます時か、笑って見逃がして良い時かの判断に戸惑いを経験するのは、私だけではないと思う。非常に難しいと思う。ここが平衡の取れた見方、考え方の試される場所なのだろう。

そして、その時こそ、平沢興先生が常に強調しておられる本物の愛が発揮される時なのかも知れない。

ポビーを配達していると、よく、「家の子はさっぱりやらなくて」「何をやっても中途半端、やる気がないのよ」ということばを聞く。では、そのお母さんはやらない原因を考えてみたことがあるのか。やらなければならぬその必要性を、理屈ではなく、年齢に応じた納得をさせる努力をしたことがあるのかという、ほとんど、お目にかかったことがない。

反面、ポビー以外にも問題集を与え、自分も一緒に机に向かい、成績を上げることに情熱をもやしている母親もある。

親にとって、我が子はこの上なく可愛い。皆あらん

限りの愛を注ぐことに、よろこびを感じているはずである。

しかし、やらないからと放っておくことは、体力や、能力以上を求めて勉強させることは、決して愛ではないと思う。

何が善か悪か、はたまた道德基準さえ、あいまいになってきた昨今、平衡のとれた正しい愛を培うよう努力しなければ、と自分自身に、つくづく云い聞かせた出来事であった。

## ポピーと私



### 竹野 文代

(福井第1支部)

#### 1. ポピーとの出会い

私と全家研の学習教材・ポピーとの出会いは長女が1年になったところで、ポピーの誕生と同時にあった頃でしょうか。他社教材も今のようにあまり氾濫しておらず、「使いやすそうな良心的な教材だな」と思い、届けてもらいました。初めての事でもあり使い方も充分でなく、ただ続けているだけで、それでもやめるにはおしいと思っていたのが2年間も続きました。そのうち級友2,3人に話し、ポピー仲間が4,5人になり、ポピーを取りにくる口実で毎月子供連れて卒業後も学生時代と変わりなく世間話、育児問題、教育問題などを話しているうちに、一人増え二人増えとなり、ポピーには対話主事の先生がおられることを聞き、一応教育モニターをお引き受けすることにしました。

4月には20~30人位になり気を良くしている時、支部長から京都で中部地区モニター研修大会があるから出席してほしいとのこと、主人が「子供を見るから行ってこい」と協力してくれたものの、子供はまだ幼いし、他のモニターさんとは一度も会ったことがないし、不安でしたが出席させてもらいました。田舎者の私が、大きな会場で、各県の熱心で意欲的な体験談や有意義な講演を聞き、全家研の趣旨に賛同し、家庭教育がいかに大切かを知り、子供たちは無限の可能性を秘めている、その可能性を引き出してあげよう、一人でも多くのポピーっ子を作ろうと決意し、福井県も「がんばらなくちゃ、なんとかしなくては」と、意欲満々で帰って来てモニター活動を始めた次第です。

#### 2. モニターをはじめて

最初のころは、洋裁をしていてあまり見てやらず、残った分は日曜日の午前中にさせていました。こんな時期が2,3年もあったでしょうか。今思えば、もっ

たいないことをした、と反省しています。下の子が小1になったのを機会に全家研指導の使い方通り、刻み入れをしてポピー学習をさせ、手引きで答合わせ、台紙の裏へ間違った番号を記して色をぬるなど、2,3か月つづけました。すると子供はおもしろくなり、私がいなくても一人でちゃんとやってくれるようになりました。「何が何でもやる」というルールの上に乗るまでは見てやるのが、親の務めであり義務とさえ思います。次にモニターになって良かったと思うことは、対話主事先生からの経験あふれる体験、モニターさんたちと有意義な話し合い、色々な家庭を見、個性の違った会員さんと接することが出来、豊富な知識を得、納得したり教えられたり反省したりして、自分をみがきながら子供を良くすることが出来るという、こんなにすばらしい生きがいのある仕事はありません。

#### 2. 対話主事先生と共に行動

私は小集会の会場へ先生と一緒にいきますので、お母様方の話を聞き、先生方のアドバイスを聞き、その教えられた事を、先生の話の借りて各会員さんに伝え相談相手として話せるのだと思います。また小集会の誘いにもなり、会員さんへの信頼にもつながると思います。できるだけ多くの小集会を開き、自分自身のための勉強もしたいと思います。幸い第1支部には三人の主事先生がおられ、色々な立場で(低学年は竹内先生、高学年は秋田先生、嶺南地区石亀先生)というように分担されて、会員さん達によるこんで頂けるのが強みです。

#### 3. 体験

私にはあまり退会者がありません。退会者を出さないようにするには、まず会員さんの家族と仲良くなるということが第一だと思います。ついこの間も会員さんのお父さんが出てこられて「どちらの方へ行くの」と聞かれ、どっちでも行きますと答えたら、昨日呑みに行ってお客さんが居たので、そのまま車を道に置いて来てしまった、そこまで乗せて行ってくれと言われてました。また、ある奥さんから「手紙を入れて来てほしい」と頼まれたこともあります。

私が行くとポピーを持って来て「まるつけて」という子供もいます。お母さんは怒るけど、「おばちゃんだと良く分かる」と言われると嬉しくなって、「今度来るまでにやっておいてね」と言って帰ります。また「今日しておくから明日学校から帰る頃に来て」という子も居るので、いつも赤ペンを持って歩きます。玄関先でポピーをしているというのに、奥に入って行って、知らん顔をしている親もいます。でも子供の中にはポピーを楽しみに待っている子もいるということをささえに、毎月配布しています。また会員さんを励ま

している私自身が、「僕、ポピーはいいよ。」と言ってあげるんだから、もっとポピーのお友達作ってよ」と反対に励まされることもあります。これも、それまでに御主人御家族との話し合いがあったからだと思いません。

私の自動車は「全家研ポピー福井第1支部」と書いてあり、時々「ポピーの車や、ポピーのおばちゃん」と呼んでくれます。こんな時、「やってるの。がんばってね」と言ってあげます。支部が違うかもしれない、会員が違うかもしれないけど、とても嬉しいです。また私の車の後をつけて走ってくる人がいました。止まって見ると、東京から転入して来て誰に頼んだらよいかわからなかったらしく、いつもこの道を通るので、今月こそつかまえようと思ってついて来たらしいのです。私はいつでも、どこでも看板を下げて歩いているので、この普及活動のモニターらしく生きようと思います。

#### 4. モニター作り

ポピー会員の輪を広げようと思い、私の友達の中からモニターさんになってもらいました。30冊になるまでは応援してあげようと、毎日一緒に歩きました。彼女の代りに話をするとということは大変でした。ただでさえ話下手な私が、育っていくモニターさん、お客様の前で話すということは度胸がいます。初めは、後で言わなくても良いことを口出ししたりしてだめになったり、また言うべき言葉を全部言い果した末やっと採ってもらえた時の嬉しさ、二人で喜んだものです。また玄関へ行っても何も話さないうちに、いりませんと2回つづけて断わられた時など、二人ともがっくり、次へ行くことをやめて喫茶店に飛び込んだこともあります。また採ってもらえないことが分かったのに、何だか世間話をして30分も居座ったこともあります。このようにして、30冊出来たら一人、30冊位出来るようだったら一人と、モニターさんを作り、今では、この人達が支部の中心となってくれていることがとても頼もしいし、またモニター会、レクリエーションなど色々な面で協力してもらえて良かったと思っています。

#### 5. まとめ

出会いから6年、モニターをはじめて4年目。ずいぶん永い歳月ですが、我が子のポピーの使い方を軌道に乗せるまでの努力、それには対話主事先生との出会いが良かった事、また私には友達が多くいたことが現在のささえだと思っています。私の体験したひとつひとつが次の何人かのモニター作りの原動力となれば、これ幸いと思っています。そしてポピー会員の和を広げ、ポピーで親子の学習のお手伝いをするこの仕事、モニターとして、他の方々のためだけでなく私自身の

生きる道しるべとしての仕事だということが最近感じられるようになってきました。この仕事を続ける限り、色々な子に親に出会うと思いますが、主事先生方の力をおかりして、これからも一人でも多くの方々にポピーとの出会いを喜んでいただき、全家研の願いを広め、こつこつと普及活動に努力していきたいと思っています。

## 家庭学習の輪を！



### 鈴木和子

(東京新教育支部)

『ポピー』という学習教材の名を初めて耳にしたのは、娘が中2の夏でした。丁度そのころ、他社の学習教材で勉強していた娘が、自分で選んで始めたにもかかわらずその内容に不満を示し、たびたび私に「この教材、くり返しが多くくだいのでやる気を失う」と云っていました。確かにくり返し学習することは必要でしょうが、やる気を失わせるのでは逆効果、私も内容や量を検討してみても、やはり娘には適していないと思いましたが、暫く黙って見守っておりました。そんな矢先、全家研の新教育支部より、

「ポピーという、教科書に準拠した家庭学習教材があり、内容、量ともに無理なく消化でき、学習効果をあげている生徒がたくさんいますが、お宅でも使ってみませんか」

という内容の電話をいただきました。その場合は、実物を見て内容を確かめないことにはわかりませんので、娘と相談してからということでも断った形になっていました。その後、進学教室でポピーの実物を見てきた娘が、

「内容も量も無理なくできそうなのでやることにしたい」

と云ってポピーを持ち帰りました。あまり期待していなかった私も、内容を見てわかりやすい解説シートで復習も独力ででき、解説シートは予習にも使用できそうだし、良い教材にめぐり会えたと内心ホッとしました。

それから、2、3ヶ月使用して、これなら知り合いの子どもにも紹介しても必ず喜んでいただけるという確信を得たので、まず妹の子どもや私の所に勉強に通ってくる子ども達に実物を見せ、父母達にも全家研の趣旨を説明し、塾で勉強するだけでなく家庭学習をすることによって子ども達の学校での学習の理解度を知る手がかりもでき、1日に20～30分の親子学習で復習の習慣や勉強方法が身につけば、高学年に進んでからも悩みが少なくてすむのではないのでしょうかなど、話し

たところ、とにかくやってみようという母親が十数名になりましたので、まとめてポピーを注文したのが私のモニターになった動機というよりモニターにさせられたという感じでした。その後、1年余りは、口こみで会員が一人、二人と増える程度で積極的に普及活動をしたわけではありませんが、全家研の趣旨、教材内容に賛同された父母が知人を紹介下さったお蔭で会員も70余名になったころ、私も教育モニターとしての責任を感じ、努めて多くの会員の方に全家研の趣旨を理解してもらおうと同時に、わが家の家庭学習の体験や自由勉強のヒント等話を話し、以前にも増して親しくなった会員から電話で、「今月のポピーの算数の公約数の応用のところ、手引きを見てもわかりませんので、子どもがお伺いしますので、よろしく」とか、受験に関する相談も多く、未熟な私の体験だけではと思い機会ある度に対話集会を開き、一人でも多くの会員に対話主事の先生より直接、家庭教育、家庭学習に於ける父母の役割の重要性、子育てこそが教育の原点という奥田会長の言葉を聞き、改めて家庭教育の重要なことを反省し、気持ち新たに子どもに接する心境になったと喜んで下さいました。

今年でモニターを引受けて3年になります。この間、会員の親子から学ぶことが実に多く、私自身、良い経験になったと感謝しております。配本、対話集会、勉強会を通して私が見た会員の親子の感想を思うままに記してみました。

配本の度に、父母より一番、頻繁に聞く言葉が、なかなかやらず溜まる一方で」という報告です。そんな会員の方に、私はいつも、どんなによい内容の教材、教具も使い方、利用法がわからないと子どもも手がつかず溜まる一方で、負担になるばかりです。低学年の子どもにはお忙しいでしょうが、1日20～30分で結構ですから、親が手助けをし、正しい使い方、利用法と一緒に考えてあげ、やり終えたシートに赤マジックで○をつけ、何か一言、励みになることばを記していただけると子どももやる気を起こし、今度はどんな言葉が返ってくるかと期待し、少しずつ家庭学習の習慣が身につく、高学年になった時も家庭学習の習慣、勉強法を会得しているので自主的に学習ができ、親子共に負担が少なくてすみますので、是非、低学年のうちは努めて手助けをして下さいと力説しています。次の配本時に、学習のことから、

「ポピーの手引はわかりやすく、とても勉強になります。子どもが復習するところを先に目を通して、解らないところは手引きを参考にしておきますと、子どもが帰宅して復習する時にも学校での教え方、やり方によって自信を持って教えることができ、大変助かりました。」

との報告に足どりも軽く次の家へと急ぎます。こうし

て親自身がポピーに目を通して内容の良さを再認識された会員は、子どもの友達にも自信を持って紹介し、家庭学習の輪を拡げて下さいます。反面、今回の配本時にも「やっぱりウチの子はやりませんので止めます」という母親の中にはポピーを与えっぱなしの、子ども任せ、教材任せで、わが家では「何事も自分の力でやるようにさせていますので、手助けは一切しません」といかにも自立心を育てているという風に聞こえるのですが、実は放任という会員にもたびたび出会い、残念に思います。忙しいので親子で家庭学習をする時間がないといわれる方も、1日20～30分程度の時間は親の努力次第で生みだせるもの、作るものだと思います。ある日の対話集会で、

「父親も少しは子どもの勉強をみてくれると子どもの様子や学校の事もわかるのですが、多忙を理由にみようともしません」

という発言に他の母親より次のような報告がありました。家は豆腐製造販売という商売柄、朝が早いので、「主人は朝の仕事が終わると子ども達が帰宅するまで仮眠しますが、子どもの帰宅時には起きて子どもを迎え、親子でその日の出来事について話し合い、学校で習ったことも必ずその日のうちに、ポピーで復習するようにしており、たとえ友達が呼びに来て主人に空時間はその時しかないのかわいそうだと思う時もありますが、親子勉強が終わるまで遊ばせません。今のところ何の不満もいわず喜んでやっていますが、厳格すぎるのではないかと不安になることもあります」とのことですが私は体験上、低学年のうちは少々厳しくても大丈夫だという確信があり、3年生までは個人差もあるが、多少厳しすぎてもうさがられたり反抗的態度に出られる心配も少ないので、この時期にしっかりよい習慣をつけ、成長と共に手綱をゆるめていく方が心理的にも良いと話し、自信を持って続けて下さいと力説した次第です。そして夏休みに入った先日、その母親より親子でポピー学習を毎日続けたお蔭で家庭学習の習慣もつき、学期の成績表も全部「よい」をもらって来ました。主人も私も、一生懸命努力した子どもに感謝していますという御礼の手紙に目頭が熱くなり、何んとすばらしい親子だろうと羨しくさえ思えました。「子は親の姿を見て育つ」といわれますが、この子も日々、忙しく働く父母をみており、その忙しさの中でいつも子を思う父母の姿に感謝しているのでしょう。小1という幼さにもかかわらず、夏休みに入ってから自主的に父親の仕事の手伝いをしていて聞き、親子学習でのふれ合いを通じて得た親子のしっかりした絆が、子どもの人格形成に及ぼす影響がいかに大きいかを痛感しました。

ところで家庭学習の輪を拡げると同時に、いかにポピーを長続きさせ定着させるかが問題です。1年、2

年とすっかり定着している家庭では、子どもが努力していることはいうまでもありませんが、やはり何等かの形で父母が協力しているの、やり残しも少なく、学校でのテストにも効果をあげ、子どもからたびたび「テスト前にお母さんとポピーで復習した問題が出たので100点だった」という報告もあり、ポピーをやっている良かったという実感を味わった子ども達は、親にいわれるまでもなく自主的にテスト前にポピーを見直す態度も身につけているようです。この「やっけて良かった」という実感こそが子ども達の将来にもよい足跡を残すことでしょう。一人でも多くのポピーっ子が「やっけて良かった」という実感を体験して欲しいと願っています。

それにはやはり親の協力、子と共に学ぶ姿勢が大切ではないでしょうか。会員相互で助け合い、積極的に対話集会、勉強会にも出席し、家庭学習の輪を拡げようではありませんか。

今後も全家研の趣旨を全うし、家庭教育がいかに重要かを会員の方々に理解してもらうべく努力し、且つポピーを使って良かったと喜ばれる、良さ相談相手になれるよう、会員一人々々を早く理解し、心の疎通を図りたいと思います。

## 教育モニター3か月の歩み



光 恒 紀 子

(福岡県豊前支部)

モニターとしてようやく3か月、戸まどいながらの歩みを始めたばかりです。

実は5年生になる娘が以前ポピーをとっていましたが、私自身あまり関心もなく、子供もだんだん積んでおくだけになったので、これでは仕方ないと、他のプリントに切りかえたばかりでした。

5月になり、子供の2年生の時の担任の先生から、ポピーをやってみないかと進められ、3月までに、豊田小学校に勤められていた教頭先生が、対話主事になっておられることを聞き、ポピーについての話を初めて聞いてみました。今まであまり目を通してみなかったポピーも、大変よく工夫されて編集されていることを知りました。

毎月配布されること、各教科の教材のめあてにそった設問・学習が展開されていること、ドリル学習として、漢字、計算があること、問題のてびきによく間違えう問題の気をつける点、間違え易い点など留意点がこまかく記入されていること。裏には子供が楽しみながら、学習できるように考えられていることを改めて知りました。

また、こころの文庫の読物シリーズがあり、枚数も多くなく、子供が負担を感じない程度で、すぐ読み通せること、これがきっかけで他の読み物へ興味を持つことが出来るようになりました。

小学生新聞は、学年に応じて、読み物、学習、娯楽版が有り、時間をかけなくて楽しく読めることです。

新聞の家庭版では、今年度から小学校の教育課程の改定の基本になるものや、また総理府調査の資料の、「日本の子供と母親」から、家庭のしつけに関する調査、全国的な子供の傾向、そして平沢興先生のお話が毎月大変感銘深く、月号私共に、子供の教育上の示唆をいただき、楽しみにしています。また学芸欄での、それぞれの道に秀でた人のお話も興味深いものです。

次はポピーの使い方に14段階もあることなど、対話主事先生から映画を見せていただき、なるほどと分りました。

今までは、ただボンと渡し、そのままだった私の無関心さに、これでは折角の良い学習のしおりも、全く無駄だったということを知りました。

以上ポピーを初めて理解し、これなら私も子供と共にやってみようと思い、早速子供に話しました。子供自体はポピーの方がいいと前から言っていましたので、5月から始めました。

私は、我が家庭だけでは惜しい気がして、何人かの友達に声をかけてみました。

その声が次々と広がり、対話主事先生のお話を聞いてみようということになりました。

6月初めに主事先生宅に集まって、ポピー学習のスタートからみんなで学習しました。そして、これが家庭教育運動であることをみんなで理解しました。

そのうちに新しい教育モニターさんも、一人から三人に増え、7月初旬、私共豊前支部の中津のモニター会を開き、支部長さん、主事先生を交えて話し合いの会をしました。この家庭教育運動を今後どのようにしていくかについて、お互いの連携と協力について相談したわけです。

運動を始めて見て、会員を知人に紹介することは簡単ですが、未知の方々への紹介には話し下手な私は大変抵抗を感じています。何度か伺った上で、話し合いで納得して入会された時は、喜びもひとしおでした。歩みはぼつぼつですが、少しずつ会員も増やしてきています。

7月17日午後3時より、対話主事先生のお宅を借りて、私の担当の会員の小集会をしました。会員さんの仕事の都合もあって全員集まることは出来ませんでした。親子20数名集まりました。

初めに、全家研の映画、手づくりの家庭教育をめざして、生活づくりから学習力づくりの2本を上映しました。

ポビー学習については、1年から6年生まで、実際の指導を対話主事先生にして戴きました。親子とも、話が具体的だったので、よく分ったと言っていました。せめて7段階はきちんとやろうと約束をし合ったことです。

次に、お母さん達と対話主事先生との話し合い学習では、時の経つのを忘れる楽しいひとときを過ごしました。毎日1枚ずつ切りはなして使い易く仕組みされたドリル学習のシートがついているが、これは社会や理科のような、勉強しにくい教科が、実に要領よくまとめてあるので、その日の勉強内容が良く分る。兄弟の下の子が使っていると、上の子供も欲しがった。また少し付属物が多過ぎる。他の会社のものは、テストを送ると順位がついてくる等々、賛否両論の意見がわつと出て来ましたが、ポビー学習の仕方が分ったので、とにかく継続してやってみよう結論が出ました。

その他の話題としては、復習の仕方、夏休みの暮し方、作文の書き方、継続観察、休みの旅行について等、話はつきないほど出ました。こうして、皆さん時の経つのを忘れてしまい、本音で話し会ったことに驚くと共に、良い会だったと思えました。次回は2学期になってからは是非、小集会をしようと言って別れたことです。

私は、小集会でみんなが本音を出して話し合うことは、ポビーの会員であるからこそだと思い、みんなの喜びを肌と感じ、対話主事先生には、大変お世話になりました、本当に有り難うございましたと、感謝の気持ちでいっぱいです。これが全家研の家庭教育運動だと思えます。

教育モニターとして歩み始めて3か月、よちよち歩きの新米ですが、これから対話主事先生、支部長さんの御指導をいただき、同僚のモニターさん方と連携をとって少しでも前進を願っています。

## 百を求めてゼロにしないで



沼田 幸子

(近江支部)

我が家は、主人と現在小学校5年生になる息子と私の3人家族。

全家研の教育モニターとの出会いは、丁度子供が小学3年生の秋のことでした。

当時私は、これといった仕事も持たず、世間一般のありきたりの主婦業と、余暇は手芸、園芸などの趣味に費やしておりました。

子供もその頃は幼児期と違って、あまり手がかからなくなるし、正直言って、この余暇という時間をもつ

と有意義な仕事に向ける良い方法はないものかと考えることが度々でした。

家事を一通り終え、ホッと一息ついた時など、殊のほか学生時代、OL時代の人々との交流が懐しく思われ、それと現在の自分を比較すると、なんだか温室の中にスポリはまり込んでしまって、だんだん世間知らずになっていくような感がないでもありませんでした。こんな自分が、子供にあれこれと注文ばかりつけ、上ばかり向いて生活してよいものか。そんな事を考えている矢先、ある日、ふとしたことから、当地の支部長さんに、全家研の教育モニターの仕事があることを聞きました。

その時は、人さまがやっておられる様子を聞いて、何かやりがいとある、うらやましい仕事に思えましたが、さて、この仕事を自分自身にあてはめて考えてみますと、どちらかと言えば内向的な性格、加えて主婦業にひたりきっていた私には、知人・友人と言っても数が知れているので、引き受けてもかえって迷惑になるのではないかと思い、一度はお断り致しました。が、支部長さんの言葉、「人間だれしも初めからスムーズにやれるものではない。一步々進んでいけば良いのだから、今すぐ何人の会員さんを増やして下さいなどと強制しないし、また無理なことは何もやって下さいと言うつもりはありませんから、それより、今から5か年計画でやるつもりには」とのお言葉に、私の今日のモニターとしての第一歩が始まりました。

### モニターとして

当時、住んでいた所は、私が産まれ育った彦根市。古くからの城下町で、勉強やスポーツをするのには、落ちついた緑の多い、また施設も整った住みやすい街でした。そんな所で、最初は、幼馴染、親戚、ごく親しい近所の人達という順に、下手な説明でも意思の通じる相手から、ポビーを勧めて歩きました。親しい相手ということで、「そんな良い教材があるのなら是非私の家の子供にもやらせてみるわ。」と言う人達がほとんどで、殊のほか簡単に会員になって頂き、内心ホッと、これなら、支部長さんが言っておられた5か年計画の何十分の一のスタートが出来たのではと、こんな私でも何とかやれそうな気がしました。

しかし、もともと交友関係が少ない私は、すぐ行き詰まり、知人外への普及に足を運ばなくてはならなくなりました。いわゆる物を売るセールスとは別ですが、それにしても知らない家庭への訪問には勇気がいり、布袋に入会案内や教材の見本を入れてはあるのですが、先方へ行って何を出し何をどう説明するのかなど、頭の中で考えると、二の足を踏むことしきり。バイクのカゴに積んで出たものの、パンフレットだけを配り、帰りにスーパーで買い物をして帰ると言う日が



続きました。そうこうするうちに月日も過ぎ去り、何とか、よそ様の玄関のチャームを押し、1軒、2軒とポピーの名を知って頂けるようになりました。

朝、起きた時、今日は何軒の人にポピーを理解して頂けるかしらなどと考え、主人、子供を送り出して手際よく家の後片づけをすまし、やっと出られるようになった頃、今度は、折角住みなれたこの彦根の街を離れ、今まで同じ滋賀県内であるのに一度も行ったことのない能登川町へ引越す事になりました。見ず知らずの町で、果たしてモニターを続けることが出来るかどうかで、いろいろ悩みましたが、またゼロからの出発、初心に戻ってガンバッテみようとする彦根の会員さんとお付合いしながら、やらせて頂く事にしました。

### 能登川の町で

能登川と言う所は田舎で、これと言った施設もなく、住みにくい町ですが、国鉄沿線にあるため、京都、大阪方面へ通勤される人達の新興住宅で、見かけによらず、教育熱は高そうです。

私どもは54年4月にここへ引越しました。

当初は町の地理がわからず、普及に出かけるのにも、迷子になってはどうしようもなく、町を知るために、メイン通りを何回となく子供を連れて散歩しました。私はどうも方向音痴の気があるらしく、いつも違う方向へ自転車を走らせては、子供に笑われたものでした。道すじが分ったところで、次は団地の状態、T団地200軒、S団地200軒、M団地60軒、等々10か所近い団地の人達に全家研ポピーの名を知ってもらわなくてはと、心ばかりが先に立ち、いざ団地に入ると、同じ所をグルグル廻ってばかりいるという失敗の連続。何回か行っているうちに自動販売機、赤い屋根、看板等の目印しを覚え、1年過ぎた今では、やっと迷子にならず済むようになりました。

### 普及に関して

近江支部では昨年の秋、スタート号の普及時に、プロジェクトチームを組み、訪問の仕方、教材説明の方法等、支部長さんや対話主事の先生がたで、何か月間か指導が試みられました。その時私も参加させて頂きました。

今になって思えば、あの時参加させて頂いたおかげで、見知らぬ家庭を訪問する時、あれだけ苦痛だったチャームを押し時、また押しからの心境が今は何とか平静を保てるようになりました。先輩モニターさんと一緒にさせて頂いたおかげで、教材の説明方法なども私にはたいそう勉強になりました。

こんな良い経験をさせて頂いたあの企画、また機会があれば、もっともっといろんなことを学びたいと思っています。

### 未来に向かって

現在の能登川は、彦根と違って他社教材が何社も入り込み、昨日快く説明を聞き、納得して入会された会員さんが、翌日は近所の方が他社教材を勧めにこられたので、見ず知らずの私には、また次回にでもと電話で断ってこられるのは度々の事、そんなことで近くを通ると必ず立ち寄り、試読を2回、3回と届け、分っていないながら尋ね、一人でも顔見知りになれるよう訪問を続けております。そんな時、各家庭の子供さん達のが話題に出て、私も含めて世のお母さん達の子供達にいろんな意味で百パーセントを望み、負担をかけているのではないかと、しかも望み過ぎてゼロにしないようにと、お互いに反省もし、また新たな希望に燃えたりして帰路に着くのでした。

地理的に離れているため、なかなか学習会が出来ず、対話集会も出来ず困っていました。そんな時、先輩モニターさんのアドバイスで対話主事先生と個別訪問をさせて頂きました。会員さん達は個々の家庭でもあり、話がとてはずみ、こんなに喜んで頂けるのなら、これからも一度にはと申せませんが、焦らず何か月計画かで実施していきたいと思っております。今後私の課題としては、「百を求めてゼロにしない」ようにを胸に、一歩々々目標に近づくよう、努力したいと思っています。

### モニターひとすじ



江島 絹子

(佐賀県東部支部)

私が全家研の教育モニターになりましたのは、3年半前のことです。

対話主事の先生に、「子どもさんに使わせてみて、よい教材と思われたら、モニターを引受けて、近所の方々に勧めて下さい」

と頼まれたのが始まりです。電機部品の内職をしながら、仕方なく引受けたモニターですから、ほんの近所だけの数冊の配本でした。

普及部長さんに催促されて重い腰を上げ、普及に家を回ってはみるものの、思うようにはいかず、それにポピーに似た問題集がいろいろとたくさん出回っているのを知り、先が思いやられました。でも、なぜかモニターを辞めようとは思いませんでした。自分でもよくは分かりませんが、二人の息子が、今までになくポピーにひかれて勉強するようになった姿に、ポピーに対する信頼と自信を覚えたのでしょう。

そのうち、家の事情もあり、内職をやめてある会社勤めにすることにしました。40歳にもなったの会社勤

め、朝は8時前に出勤し、夕方6時に帰宅するという、忙しい毎日が始まりました。主人の会社が夜勤もある勤めですので、共働きの大変なことは初めからわかってはいたのですが、私が出勤した後で主人が帰宅し、弁当を自分で作って午後出勤するといった、すれ違いの日も続きました。ポピーの配本も、夕方や夜に行くことが多く、新しい会員の普及などできょうはずがありません。

当然のことながら、主人との間にもいざこざが生じます。高校生と中学生の子を持つ母親としての悩みも多く、あれこれ迷いました。一番大切にしなければいけない親子の対話さえ不足がちになっていることに気づきました。勤め始めるときには、家の都合で休みを取られるときは遠慮はいいませんかと言っていた会社も、いったん勤め出すと、

「あなたのように、PTAだ何だと言って休まれては困る。お宅のお子さんはもう高校と中学でしょう。」と嫌味たっぷりの言葉です。非行に走りやすい時期に、これではいけないと思い、今年の夏に会社を辞めて、ポピーのモニターに専念することにしました。

いろいろな悩みや不安をもって会社勤めをするよりも、同じ苦勞をするならば、ポピーのモニターで苦勞してみようと決心したのです。幸いなことに、モニターの仕事は時間的にしばられることがないので、主人の勤めや子どもにあわせて、家庭生活のリズムを壊すことなく活動できます。

「お母さんはね、会社辞めてポピーのモニターひとすじにがんばってみようと思うよ。」

と話しますと、

「それがいいよ。お母さんはやっぱり家にいて欲しいよ。経済的な不自由は、ぼくたち我慢するよ。」

と、喜んで賛成してくれました。そして、

「ぼくがポピーを使って高校に合格できたんだから、お母さんは自信を持って始めて歩いていいよ。」

と言ってくれました。また二男も、

「お母さんは歩いてだから大変だろうけど、ぼくが大人になったら車に乗せて、遠い所の配本には連れて行ってあげるよ。」

と、優しい言葉で励ましてくれました。

こうして本格的な私のモニター活動が始まりました。主人の勤めと子どもの通学を考慮した時間帯を利用して、暑かろうと寒かろうと、台風の日以外は毎日てくてくと歩き続けています。車はもちろん自転車にも乗れない私は、バスと徒歩で、配本や対話、普及に家々を回っています。車や自転車だと予め目星をつけた家から家へ、つまり点から点へとなりますが、私の場合は徒歩ですから、子を育てる年配のご婦人を見かけては、どなたにも話しかけて普及するという便利さがあります。

昨年の秋のことでした。いつものように、

「全家研のポピーですが、小中学生の子どもさんがおられますか。」

と、玄関に立って声をかけますと、40歳くらいのお母様が出て来られて、

「子どもはおりますが、そげなもの（そんなもの）はいりません。」

と、にべもなく断られました。手さげに入れて持っていたポピーが目についたのでよう。

「小中学生の家庭学習教材のポピーです。お話だけでも。」

と言いますと、

「前に一度、無理に勧められて何万円もするカセットの家庭教材を買わされたことがあります。2、3か月使っただけで、あとはほこりをかぶってる有様で、主人からはさんざん叱られるし、もうそげなものはこりごりです。」

とのことです。

「そうですね、それは大変でしたね。」

と、愚痴やうらみを聞いてあげているところに、中学生くらいの子どもさんが帰って来られました。

「ポピー、知ってますか。」

とたずねると、

「知ってはいるけど、見たことはない。」

「これ見本ですが、教科書と合わせて見て下さい。」

と言って、見本を差し出すと、素直そうな息子さんは、早速カバンから英語の教科書を出して、ていねいに見比べました。

「どうですか。」

「教科書にぴったりだから欲しいですけど、前のカセットのことがあるので、お父さんがとても——。」

「じゃ、おばさんからお父さんをお願いしてみましようか。」

「そうお願いできたら。主人がいる時にもう一度来て、よく話して下さいませんか。」

と、初めじゃけんだったお母様からも、嬉しいお言葉を頂きました。

それから2、3日後の夜、その家を訪ねました。家から30分歩いて駅前からバスに乗り、バスを降りてからまた20分歩かねばなりません。しかし、私の足どりは軽く、心はずみました。素直なあの息子さんの顔、初めはとりつく島もなく門前払いをされたお母様ではあったが、帰るときには笑顔で「主人のいる日にもう一度来て下さい」と頭を下げて頼まれた——子を思う親心を思い浮かべて、ほのぼのとした気持ちでした。それに、きっと入会してもらえそうな予感に心がはざみました。

30、40分も話し合ってるうちに、全家研の趣旨も、ポピーのよさもすっかりわかって頂き、

「息子がどうしても欲しいと言いますけん、今月号からお願いします。」

と、嬉しい申込みを頂きました。農家の厳しそうなお父様でしたが、30、40分も話し合っていると、前々からの知り合いの親しい人ではなかったかと思うばかり、和やかなうちに入会してもらいました。対話主事の先生や普及部長さんから、対話を大切にしようと言われてはいますが、本当にそのとおりだと思いました。

毎日歩いて回りますと、心優しい温かいお母様、冷たそうなお方と、いろいろな人に会います。しかし、心を開いて話し合いますと、子どもを持つ母親は大なり小なり何らかの悩みを持っておられることがわかります。モニターになる前は、子どものことで悩んでいるのは自分だけだと考えていたのですが、わが子のために悩むのは親の宿命であり、よい親であることの証拠でもあることを知りました。モニターの仕事をしているおかげで、私自身も成長しているのです。

近所の方から、

「教育のお仕事をされるっていいですね。子どもさんに喜ばれるお仕事で、うらやましいですよ。」

と言われたりすると、門前払いされるときのいやな気持ちや苦勞などずっとんで、嬉しさだけがこみ上げてきます。普及に回る私の足は、今日もはずみます。今日は、どんなお母様との出会いが待っているであろうか。どんなお子さんの笑顔に会えるだろうか。

## くずれやすい習慣



田淵 澄子  
(呉支部)

### 家庭学習の産婆役

呉支部でお世話になって2年になります。

私の目標は、何といても子供の家庭学習というむづかしい習慣づけのための産婆役として、手助けをすることにあると思っています。

今の家庭は、父も母も外働きの仕事を持って、昼間は不在がちのことが多い。たまに祖母がいて面倒を見るとしても、それは食事の世話とか留守番役という程度で、なかなか勉強の面倒まで見てやるところまで手が届かない。したがって、どうしてもしつけの主体は父母にあるわけですが、それが学校から帰っても不在勝ちとあっては、規律ある生活、わけても勉強などという自主的な習慣づけは甚だ困難というのが大方の例ではないかと思っています。

そこで、お母さんに代って少しでも学習習慣がつくよう手助けが出来たら、というのが私の願いでもあります。

それには、ひとくちに言って、本人がやる気を起こすように仕向けるのが一番ではないでしょうか。

この夏、甲子園では全国高校野球のすばらしい決勝戦が展開されて全国の野球ファンをうならせました。私は、あれを観ていて、攻守ともによく統制のとれた両チームのみごとなプレーの蔭には、必ずや監督さんの大きい指導力があつたことを思わずにいられません。ここに指導力というのは、先ず個々の選手の特性の把握から始まって、基礎的な体力づくり、技の訓練、忍耐力の強化など、すべての点にわたって調和のとれたチームを仕立てあげるための並々ならぬ苦心と努力であります。おそらくその根底には、各選手が「どこまでも、やる気」を起こすよう常に愛のムチが働いていたことでしょう。

そうでなければ、いざ実戦となって、監督さんのサインひとつで、あれまでのプレーが行われる筈がありません。

私は全家研の教育モニターですから、お子さんの自主的な家庭学習をおすすめするために、この野球選手やバレーの選手たちの競技を例にとりて、本人が「やる気」を起こすよう仕向けることが、どんなに大切かをお話しします。それには、何よりもまず、お母さん自身がその気にならなければならないと。

### やろうと思っても

思うに、どんな児童・生徒も、新学期を迎え、新しい教科書を手にとると、「今学期こそ、しっかりやろう」と例外なく新鮮な感動にひたるものです。それが日の経つにつれて、いつのまにか薄れてしまうのは、保護者であるお母さんの側に問題があるようです。

稲の苗を縦横に正しく、曲がらないよう植えつけるのを「しつけ」と言いますが、子供にもその配慮がなくてはなりません。それも幼いときからの「しつけ」が大切だと思います。

そこで、お母さんとお子さんを励ますために、私は次のことをお勧めしております。

- ① やろうと思うことを五つか六つまでとする。多くてはできなくなる。(目標の決定は、親と相談して、決めたら見えるところへ貼り出して置く)
- ② 曆につけていく。(習慣をつける計画表。よくできた、ふつう、もうすこし、の評価)
- ③ 毎日30分間、勉強法からはじめるようにして、やがて50分へと伸ばしていく。(毎日必ずまもるようにする)
- ④ 机のまわりの整頓をしていますか。(いらぬマンガ本、ふろくなど、集中力の邪魔になる)

⑤ 毎日、ポピーをしていく。(学習習慣がつく)

⑥ 本読み、読書をする。(できる子はやっている)  
その他、その人に合った計画をもとに、共にがんばるよう私はお手伝いします。

それも三日坊主にならないよう、継続することが肝心。やろうと思ったが、やらなかったというのと、やったというのとでは、大いに違う。甲子園に出る選手はどうしていますか。毎日、ごはんをたべるように、練習を怠りなく続けて、その結果が各県代表の榮譽を担っています。

私はこうして、くずれやすい子供たちの勉強の習慣づくり、三日、一週間、三カ月、三年、九年と続けてやることを説いて歩いております。

教科書だけで勉強したのは戦前のことで、今では、とても教科書だけでは足りません。

だからといって、宿題があるのにと仰言方には、本当に宿題だけで力がつくのかをよく考えてもらって、やはり最後には血肉となる自主学習以外によい方法がないことを理解してもらいます。つまり、寺子屋の時代から今日に至るまで、真に学習が身につくためには、復習と予習の反復パターンしかありえないことをお互いに確認し合うのです。

ポピーの教材が今月は少しぐらい残ったからといって、「しないから、やめた」では、放任主義というもので、これでは進んで勉強する習慣が養われる道理がありません。残った残飯は処理し、明日に希望と期待をかけることこそ大切というものではないでしょうか。

### 授業の定着はその日に

先生(教え) ⇄ 児童・生徒(学ぶ) ⇄ 親(愛のムチ)

こうして、今日習ったP5~8までを、その日に帰って、その日のうちにやれば、80%は記憶に残っているが、明日になると50%は忘れてしまう。1週間たつと、なんと80%のものを忘れてしまう。だから、習ったことは出来るだけ早く反復学習すると定着するし、さらに明日習う P9~10を予習しておけば、先生の教えもよくわかり、授業もおもしろくなってくる——。

それには、全家研ポピーこそ、最適の教材というのが私の信念です。

したがって、私は会員普及のために「今月だけ試しにポピーをやって」とか、「夏休みだけやってみては」という押し売りじみた勧誘はしておりません。むしろ、その人、その人が、今どの位置に立っているかを知って、その人に合ったやり方で、教えてあげており

ます。

こんなことを言うと、はじめは腹をたてたような対応をされる方があります。けれども、だんだん話し合っているうちに、こちらの言っていることを理解されて、うちとけて話合いができるようになるものです。

これが私の大きなよこびです。

とはいえ、ポピー学習そのものは、マンガやテレビを見て遊ぶようなものでなく、あくまで基礎学力を養うための教材ですから、本人がその気になって取り組まないと、なかなか効果がありません。そのところを納得がいくまで誘導するのが私どもの務めです。

### よく学びよく遊べ

昔から「よく学び、よく遊べ」と言います。これがわが国の児童を育てる教育上のモットーでした。とは言え、心身ともに発達ざかりの子どもには、元気にかけ廻る遊びも必要で、これをとがめる理由は少しもありません。むしろ近ごろの子供は、自然環境破壊のせいか、遊びかたを知らないと言われております。これはまことに憂慮すべきことと思われませんが、その半面、室内に閉じこもって、マンガやテレビに時を費しているというのも心配なことです。

こういう時代の風潮の中で、子供を健やかに育てるには、やはり身体をよく動かし、規則正しい生活習慣を身につけさせることが何よりも大切なことと思います。その規則正しい生活習慣の中に、学習が含まれることは申すまでもありません。

規則正しい生活習慣とは、人それぞれの分に応じて、やるべきことは必ずやるということだからです。

そのためには、幼児期からの母親のしつけが大切です。少くとも小学3年までに、そのしつけができていないと、中学、高校へ行くようになってからでは、もう遅すぎます。最初のボタンのかけちがいで、あとが全部狂ってしまうように、ちょっとした考え方の相違が人生を大きく左右します。

折角、全家研の会員となられても、勉強はポピーにおまかせ、というのでは少し無責任のそしりをまぬがれません。やはり小1、小2の初歩の段階では、お母さんがその気になって面倒を見てやらないと、子供には解決困難なことが生じ、やがて勉強ざらいにもなります。

私が全家研の教育モニターとして会員の家庭を廻り、少しでもお役にたてばと励んでいるのは、こういうことがらを理解して、適切な手だてを各家庭で構じていただくためであります。